

397.3  
TA19



\* 0057611000 \*

3

0057611-000

397.3-Ta19ウ

海軍作戦史

田口利介・著

西東社

昭和18

AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作  
第67条の規定に基づき、平成12年5月  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

350

397.3  
TA19

大本營海軍報道部

田口利介著



# 海軍作戰史

——大東亞戰爭第一年——



西東社版

964  
167

海軍作戰史 (大東亞戰爭第一年)

目次

第一篇 布哇海戰.....	三
第一章 布哇出擊.....	四
一大東亞戰爭勃發の原因.....	四
二日米海軍力.....	八
三布哇軍港奇襲.....	一四
四布哇海戰の影響.....	三七
第二章 十二月八日の戦闘.....	四〇
第二篇 西南太平洋撃滅戦.....	四八

目次

一

第一章 馬來沖海戦……………五〇

一新嘉坡軍港……………五〇

二英東洋艦隊出動……………五〇

三華府體制の崩壊……………五〇

第二章 比島航空撃滅戦……………六九

一 對日包圍の最前線……………六九

二 比島空襲……………七三

第三章 ウエーキ島攻略戦……………八〇

第四章 ジャワ近海々戦……………八六

一 蘭印航空轉進戦……………八六

二 ジャワ沖海戦……………九三

三 バリ島沖驅逐艦戦……………一〇二

四 スラバヤ沖・バタビヤ沖海戦……………一〇八

第五章 印度洋作戦……………一二六

一 ベンガル灣強襲……………一二六

二 デエゴ・スワレス港奇襲……………一四二

第六章 ソロモン近海戦……………一四七

一 珊瑚海々戦……………一四七

二 シドニー港奇襲……………一六六

三 米國の反攻と第一次ソロモン海戦……………一六九

四 第二次ソロモン海戦と其前後……………一九五

五 南太平洋海戦……………二〇三

六第三次ソロモン海戦……………二二

七ルンガ沖夜戦……………二三

第三篇 東太平洋出撃戦……………二三

一アリューシャン攻略……………二三

二ミッドウエー強襲……………三九

三東太平洋作戦の影響……………四五

附録

海軍作戦月次別經過一覽……………四九

海軍作戦史

大東亞戦争第一年



第一篇  
布哇海戰

## 第一章 布哇出擊

## 一、大東亞戰爭勃發の原因

アリユーション、比島を領有して以來、アメリカは自らを太平洋の平和維持者に任じてきた。此の平和維持者は、また獨裁を望んだ。

尠くとも、事實上太平洋の支配者である地位を保持せんとする事は、アメリカの傳統的太平洋政策であつた。従つて太平洋の平和を維持するに當つて、アメリカは我が國の協調を好まなかつた。第一次歐洲大戰後、東亞の安定が我が國の力に俟たねばならぬ状態に到達して以來、特にアメリカは東亞に於ける我が國の指導的立場を妨害し、露骨な敵性を發揮しはじめた。

ベルサイユ體制に依つてドイツに鐵鎖を強制した米英は、更に相謀つて我が國にワシ

トン體制を押しつけた。

劣勢比率下の我が海軍は、量の不足を質で補はんとして辛苦を重ね、やがて滿洲事變を迎へたが、アメリカは事變後我が國が強大になる事を怖れて、滿洲事變を阻まんとした。既にこの時アメリカの一部には武力彈壓をさへ説く者があつたが、アメリカ戰備の不均衡が暴露して武力發動による渡洋進攻は行はれなかつた。

支那事變が勃發するや、アメリカの敵性は愈々露骨になつた。

アメリカは重慶政權を援助する一方、支那事變を利用して我が國力を消耗させんとして種々方策を廻らし始めた。アメリカは、先づ我が國の經濟力を封壓せんとした。

産業戰時資源に貧困であつた我が國は、その大半を米、英の輸入に仰いでゐたので、アメリカの經濟壓迫は、支那事變遂行中の我が國に取つて、深刻なるものがあつた。

アメリカは、經濟壓迫の手段として日米通商條約を抜打的に廢棄したため、昭和十五年一月以降日米間は無條約状態に陥つた。アメリカの敵性が愈々痛烈となり、經濟壓迫が益々強化される傾向が明らかとなつたので、我が國は、米、英の經濟圏から離脱して新しい



秩序を建設せんとする國策の大轉換を決意した。

同年九月、我が國と獨、伊との間には三國同盟が締結されて、世界は樞軸側と米英民主主義國家群の二つに大別されるに到つた。

既にアメリカは、我が國に對して經濟封鎖を強行せんとする態度を明瞭にすると共に、他面第二、第三ビンソン案及びスターク案等によつて、未曾有の軍備の大擴充をはかり、世界一海軍建設の計畫を着々進捗せしめて、戰爭に介入せんとするその態度を露骨にしたのである。

一九四一年に入るや、經濟封鎖の鐵鎖は益々固く、屑鐵、高オクタン價ガソリン、潤滑油等をはじめ、全面禁輸の趨勢は不可避の状態となり、我が國が活路を對蘭印貿易に求めんと交渉を進める事に對しても背後から妨害し、同年七月南部佛印に進駐するに到つて遂に資産凍結を實施し、日米經濟關係は破局の状態に直面するに到つた。

またアメリカの戰爭介入も本格化し、同七月にはアイスランドへ派兵すると共に、太平洋でも、英國、重慶、蘭印政權を誘つて、A B C D對日包圍陣を結成した。

我が國は、經濟的にも、武力的にも米英陣營の包圍下に置かれるに到つた。

坐して死を待つか、死地に入つて活路を求むるか岐路が到來したのである。

東條内閣は野村駐米大使を輔けて交渉に當らせるため來栖大使を特派し、昭和十六年十一月十七日第一次會談が開始された。十一月廿日に至り我が政府は、

一、兩國政府が佛印以外の南東亞細亞及び南太平洋地域に武力進出を行はざる旨を確約する事

一、兩國政府に於て、蘭領印度に於てその必要とする物資の獲得が保證せられるやう相互に協力する事

一、兩國政府は、相互に通商關係を資産凍結前の状態に復歸する事

などの提案を行つたところ、アメリカ政府は同廿六日、我が主張を根本的に否認した提案、即ち、

一、日本政府は支那及び佛印より一切の軍隊（陸、海、空及び警察）を撤收すべし  
一、兩國政府は重慶政權を除く如何なる政權（註、汪政權を指す、筆者）をも軍事的、政治的、經濟的に支持せず

等と最後通牒に等しい回答を差出した。アメリカ政府は支那事變遂行中の我が國に對し支那及び佛印から撤兵し、且つ汪政權を否認した上なら交渉に乗ると無法な交渉基礎案を提出したので、遂に廿六日を以て日米交渉は事實上行詰り、我が國の厥起によつて大東亞戰爭が勃發した。

## 二、日・米海軍力

米艦隊は、長らく合衆國艦隊、亞細亞艦隊の二つから成つてゐたが、昭和十六年二月一日を以て、太平洋、大西洋、亞細亞三艦隊編制に改編された。

米國はかねて太平、大西兩洋艦隊の編制を企圖したが、一九四〇年七月、スターク案に

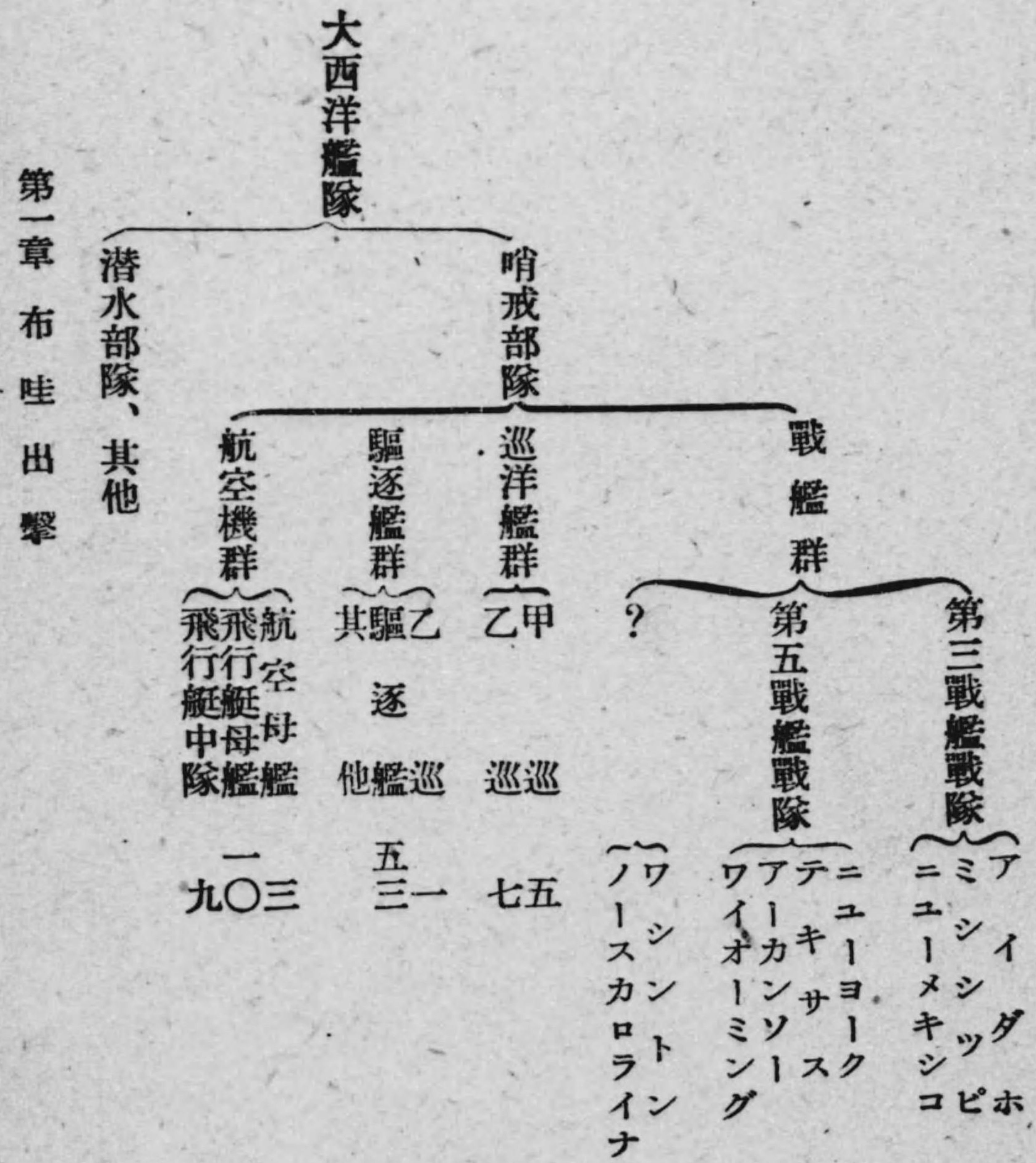
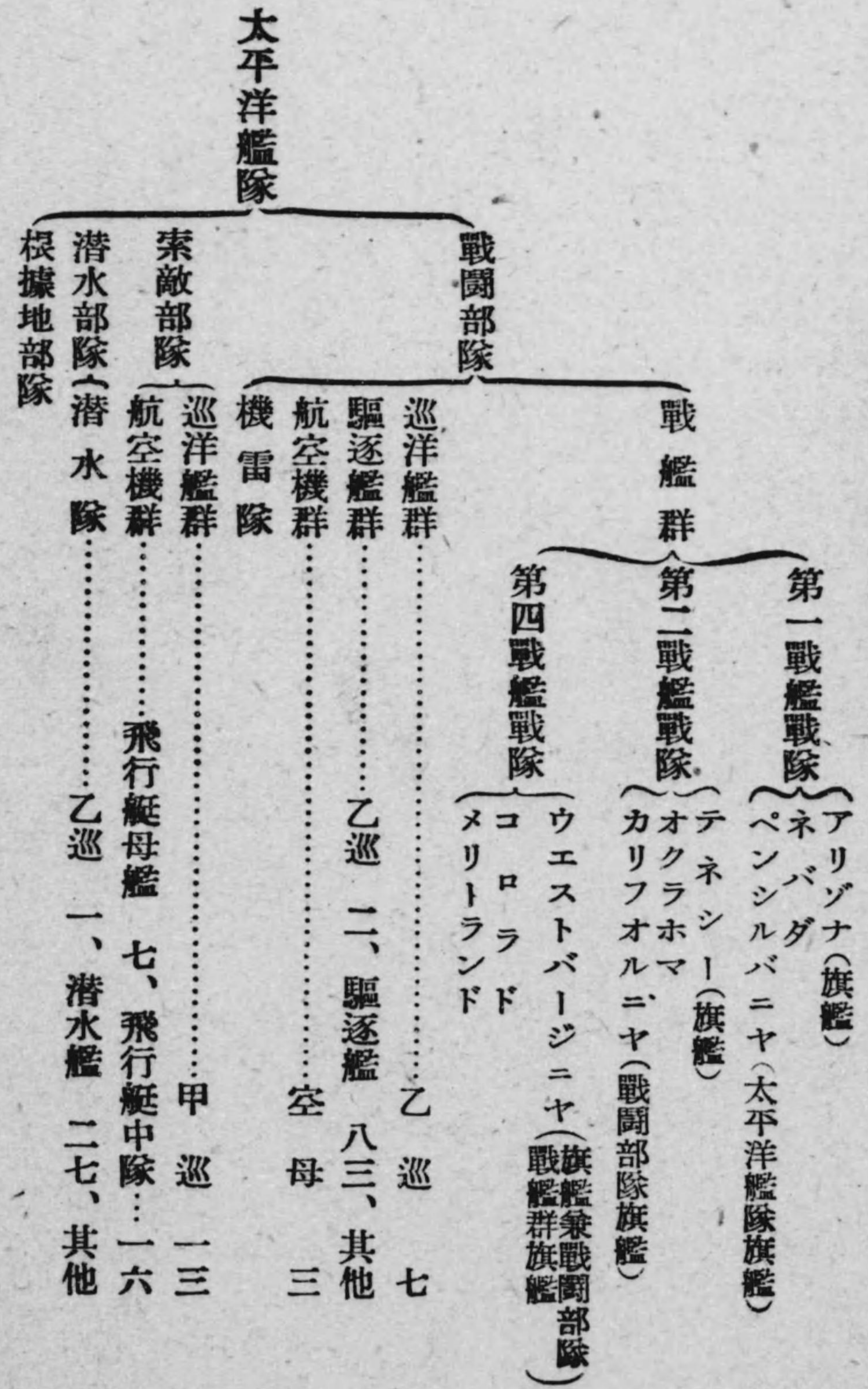
よる老大な世界一海軍の建設を決定（スターク案完成時の米艦隊は約三百萬噸）したため、一九四一年早々合衆國艦隊を兩洋艦隊に編制したのであつた。兩洋艦隊建設の目的は、太平、大西兩洋に於て同時に何れの國の海軍に對しても劣らざる優位を把握せんがためであり、換言すれば米國の世界征覇の野望に他ならない。

當時、大西洋では英國海軍が、事實上世界一の強力を誇つてゐたので、大西洋の護りを英國に任せた米海軍は殆んど全力を太平洋に集中する事が出来た。

なかでも、布哇軍港には、常時米海軍の六割前後の艦艇が集結してゐて、有事の際には直ちに行動に移り得るやうに待機してゐた。

米戦艦十六隻は、五つの戦艦戦隊に編成されて次の如く太平、大西艦隊に配屬されてゐた。此の他なほ、竣工間もないワシントン、ノースカロライナの二艦、（但し未だ戦隊には所屬してゐなかつた）があつたから、戦艦の總勢は十八隻である。

アメリカ艦隊編制表



亞細亞艦隊	
甲 巡	ヒューストン……………(九、〇五〇トン)(旗艦)
乙 巡	マーブルヘッド……………(七、〇五〇トン)
驅逐艦隊	…………… 驅逐艦 一三 其他
潜水艦隊	…………… 潜水艦 一七 其他
哨戒機群	…………… 飛行艇母艦 四
其他	

註

三艦隊長官は次の如くである。

- 太平洋艦隊司令長官——ハズバンド・キンメル大將
- 大西洋艦隊司令長官——アーネスト・キング大將
- 亞細亞艦隊司令長官——トーマス・ハート大將
- キンメル大將は十二月十八日罷免され、ニミツ大將があとを襲つた。

米航空母艦陣容は次の通りである。

- サラトガ (三三三、〇〇〇トン)
- レキシントン (同)

- レンジャー (二四、五〇〇トン)
- ヨークタウン (一九、九〇〇トン)
- エンタープライズ (同)
- ワスプ (二四、七〇〇トン)
- ホーネット (二〇、〇〇〇トン)

これに對し、我が方は戰艦群十隻(比叡、金剛、榛名、霧島、扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥)航空母艦六隻(鳳翔、赤城、加賀、龍驤、蒼龍、飛龍)であつた。また巡洋艦は次の通りである。

	米國	日本
甲 級	一九	一二
乙 級	一九	二五

## 三、布哇軍港奇襲

世界最大軍港の一を誇る新嘉坡をはじめ、蘭印、濠洲、ニューギニア等はアメリカと共に既に對日包圍陣を布いてゐた。アメリカがこれらを自由に利用し得る事は、戰略態勢の著るしき優位を獲ち得た事であつた。

かゝる優位な戰略態勢の上に、アメリカの空軍を含んだ海軍勢力が腰を据ゑれば、太平洋上の態勢は我が國に執つて著るしく不利となる。而も既に戰略態勢は整備されてゐて、あとは海軍勢力の補強を俟つばかりである。

帝國海軍が、緒戦の一撃に布哇軍港を奇襲し、アメリカ太平洋艦隊勢力を撃滅せんとする一大渡洋進攻作戦を敢行したのは、かゝる所以に基づいた。

アメリカが約六割の海軍勢力を布哇軍港に集結せしめてゐた事を、帝國海軍は巧みに逆利用した。

わが海軍は、一舉に敵の本陣布哇軍港を衝いて、太平洋艦隊を撃滅し、緒戦に於て敵の主力を屠つたのち、東亞の敵陣營を風潰しに攻略せんとした。

まさに乾坤一擲の大作戦といふべきである。

而も攻撃の主兵力に選ばれたのは航空母艦の飛行機であつた。

航空母艦が海戦に参加したのは第二次歐洲戦争以來であつた。英國海軍が航空母艦によつてイタリアのタラント軍港を襲撃し、所在艦艇に損害を與へたことはあつたが、布哇奇襲に於ける如く、全力を傾けた乾坤一擲の大作戦に主兵として出撃した事は最初であつた。

所がアメリカは迂闊にも布哇周邊の哨戒を怠つてゐた。我が布哇攻撃部隊は、無血で米太平洋艦隊主力に第一撃を與へる事が出来た。

四千數百海里を突破して一舉に布哇軍港を衝いた壯舉は、まさに戦史空前の大作戦である。

十二月七日、即ち布哇海戦の前日、布哇目指して全速力で驀進する旗艦の檣頭には、Z

旗が掲げられた。

卅七年前、日本海に翻つた「皇國の興廢此の一戦に在り」のZ旗が再び太平洋上に掲げられたのであつた。布哇海戦が、如何に乾坤一擲の戦ひであつたかは、これを以ても明らかである。(但し信號の文句は「皇國の興廢懸つて此の征戦に在り、各員粉骨碎身誓つて其の任務を全うせよ」であつた)

明くれば昭和十六年十二月八日。

我が海軍部隊は既に布哇沖に迫つてゐた。數日前から太平洋の中央附近は低氣壓のために荒れてゐたが布哇沖に差しかゝつた頃には、それも収まりかけてゐた。然し低氣壓の中心は過ぎたとは言へ時折名残りの驟雨が訪れ、北東十七米の強風は、布哇附近特有の長濤をうねらせて航空母艦は劇しく揺れ、飛行機の發艦は容易ではなかつた。だが暴風雨は布哇攻撃部隊に天佑であつた。嵐につられてアメリカは布哇周辺の哨戒を怠つてゐたのである。千五百米から二千米の上空には漠々たる密雲がこめてゐて、それを潜り抜けた航空部隊は、雲上で八日の朝を迎へた。

朝日を受けた翼は銀色に輝き、翔ける機影はくつきりと白雲に大編隊の影をおとした。



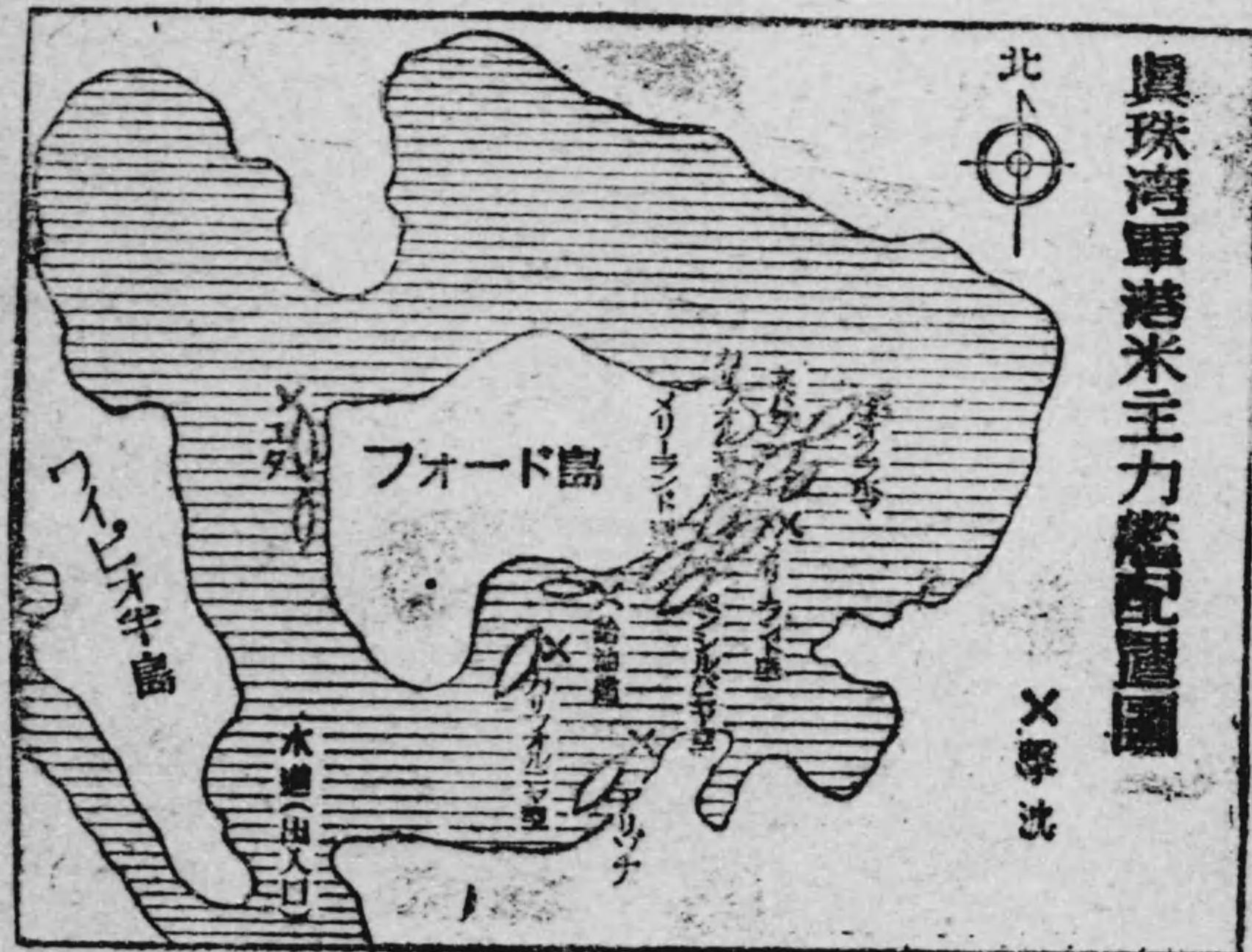
オアフ島コオラウ山脈の頂きには、密雲が深く、漠々たる雲をかぶつてゐた。

山肌擦れくこれにこれを突破した攻撃部隊の眼前に、突然雲の切れ目があつて、すかした底に眞珠軍港のまゝるい地形が浮び出てきた。

何ら敵に覺られる事もなく我が攻撃部隊は布哇軍港上空に到達したのである。奇襲は見事に成功し、布哇軍港に對する突撃が開始された。

時に昭和十六年十二月八日午前三時廿五分(ホノルル時間、七日午前

### 眞珠湾軍港米主力艦配置圖



七時五十五分。

布哇軍港の太平洋艦隊に對し、大空と水中から我が海軍部隊はひしひしと肉迫した。

古來、布哇海戦程、先制奇襲の見事な勝利を挙げた戦ひは他に比類がない。七日は恰も日曜日で、從來の米海軍の習慣は、大體日曜を休んでゐたゝめに、此の朝も全く虚を衝かれた。既に日本潜水艦に對しては布哇海戦の一時間前に攻撃を加へ、一方當直士官は同七時二分、布哇西方約二百キロに多數の飛行機が飛翔し

てゐるとの報告を受けてゐたにも拘らず、これを友軍機と誤認したりして、米海軍が我が猛襲に氣付いて周章して火蓋を切つた時には、既に布哇上空に到達した第一次攻撃部隊が米太平洋艦隊に必殺の攻撃を加へたあとの祭であつた。

布哇軍港攻撃の航空部隊は、第一次攻撃隊と第二次攻撃隊の二つからなつてゐた。

二回に亘る攻撃を通じて交戦時間は二時間弱であつた。此の間に米太平洋艦隊主力と敵機約四百五十機が葬られたのであるから、我が攻撃が如何に鮮やかに而も激烈果敢であつたかゞ想像される。

第一次攻撃部隊が布哇軍港上空に殺倒した時は、敵から一發の彈丸も一機の挑戦もなかつた。

フォード島東側の泊地には米太平洋艦隊主力が艦首を南に向けて二隻宛整然と碇泊してゐた。

それは第一戦艦戦隊（アリゾナ、ネバダ、ペンシルバニヤ）、第二戦艦戦隊（テネシー、オクラホマ、カリフォルニヤ）第四戦艦戦隊の二隻（ウエストバージニヤ、メリーランド）

の八隻と他に舊式戦艦ユタを合して合計九隻であつたが、此の外フォード島周囲の泊地には航空母艦二隻、巡洋艦約廿隻、驅逐艦五、六十隻、潜水艦約卅隻が集結してゐた。

其他オアフ島の飛行機は陸、海軍を合して約七百機であつた。

雷撃機隊は、泊地の主力艦目がけて海面すれすれに降下し先づ先陣の雷撃を開始した。雷撃機は各々の目標に向つて単機になつて順次獲物に殺倒した。敵艦の胴腹近く二、三百米の距離に肉迫して發射する魚雷は、一發の無駄もなく忽ち主力艦の舷側からは次々に高さ五、六百米の水柱を噴き上げた。

敵が漸やく我が奇襲に氣付いて應戦した時には、既に第一撃が加へられたあとで、敵太平洋艦隊主力は大損害を蒙つてゐた。

一方敵飛行場撃滅の任を帯びた急降下爆撃隊は、ホイラー、ヒツカム、フォード島各飛行場の格納庫及び飛行機群を攻撃した。ホイラー陸軍飛行場の如きは、二百機余りの戦闘機、爆撃機が集結してゐて、格納庫の前には五、六十機整列してゐたが、風下から順次に爆碎され、格納庫もまた濛火に包まれてガソリンに引火した火焰は全飛行場を黒煙で覆つ

た。

布哇海戦の最後に到るまで敵機の挑戦するものが極めて僅少であつたのは、地上の敵機が劈頭このやうに殆んど全部撃碎されたからであつた。

やがて眞珠灣の敵防禦砲火も漸やく熾烈になつた。

對岸まで僅か七、八百米の幅しかない狭い錨地であつたので、勢ひ我が雷撃機は對岸の岩壁をかすめて今にも水面にとゞきさうな低空に降りて魚雷を發射したが、對岸の岸壁にすらりと繫留されてゐた敵巡洋艦には、これは絶好の目標であつた。狭長な地形から、太平洋艦隊主力を狙ふ我が雷撃機の攻撃進路はこれ以外に執りやうがなかつたのである。

對岸の岸壁に足をかけて水際に躍り込む水鳥のやうな姿勢で、攻撃進路に突込む雷撃機のなかには、魚雷發射前に命中弾を受けて機體からガソリンを瀧のやうに噴出するものもあつた。だが、雷撃機は必死の操縦のうち、見事敵艦に魚雷を命中させて、やがてまた自らも敵艦に眞一文字に體當りして壯烈な最後を遂げた。

水道は狭長な上に水深が十數米位しかなかつた。例へば戦艦アリゾナの如きは、眞中か



ら眞二つに折れて横倒しになつて沈没したが、沈んだ後も、艦首と艦尾を水面の上に残して、丁度兩手を舉げて降伏したやうな恰好で其の後殘骸を曝してゐたやうに、兎角眞珠軍港は水深が浅かつた。

底が浅いので勢ひ低空に下つて魚雷を發射しなければならぬ。摺鉢の底のやうに、水際近くまでコオラウ山脈を背負ひ込んだ軍港に對して、急峻に懸る飛瀑のやうに一氣に駈下りて、思ひ切り低く攻撃する雷撃機隊員のなかには、魚雷發射と同時に冷い眞珠灣の潮水を顔に浴びた者もあつた。兎も角困難な攻撃であつた。

このやうな豫期せぬ猛攻撃を受けた敵太平洋艦隊主力は、忽ち凄まじい斷末魔の形相を呈しはじめた。メリーランド型の舷側からは高さ五、六百米の水柱がもくもくと天に沖し、またオクラホマは全身火焰に包まれて、灼熱した鐵片を四周の空に噴上げ、火焰と化した重油の黒煙は山から吹降ろす北の風に乗つて天空狭しと流れた。

雷撃機隊の攻撃が終ると、攻撃機隊が続いた。コオラウ山脈の嶺に名残りをとどめた颯風の余波は、水平爆撃の攻撃機を掃すり、更に燃えるアリゾナの黒煙が他の戦艦の上に流

れて、照準の定まらぬ攻撃機は、無駄弾を警戒して旋回をやり直した。

戦闘機隊もまた果敢な攻撃を行つてゐた。最初敵機の挑戦するものがなかつたので、我が急降下爆撃機に呼應して、飛行場の敵機に低空から銃撃を浴びせた。

まさに離陸せんとして燃料を一杯積んでゐた滑走路の敵機は、續々濃煙を擧げて炎上した。

第一次攻撃隊の猛撃で、ホイラー、ピツカム、フォード各飛行場は炎上し、布哇軍港の太平洋艦隊主力もまた大半覆滅し去つた。

カリフォルニア型などは、重油を眞黒く海面に流出させ、オクラホマは數發の魚雷を受けて逸早く火焰に覆はれ、メリーランド型の右舷は半分消飛んで、火災を起した前部甲板からは火焰が物凄く舞昇つた。

既に朝日は明るく眞珠軍港を照らし出してゐたが、火焰が翳す炎の蔭は、風に揺られて軍港の上に妖しい舞踏を踊つた。

此の頃布哇放送局がけたましく警報を放送した。「空襲、日本の空襲である。演習で

はない。ほんたうの空襲だ。飛行場の一角では、なほ米國兵が事實バスケットボールに興じてゐた。

第一次攻撃隊が引揚げると、續いて午前八時四十分（ホノルル時間）第二次攻撃隊が殺倒した。戦闘機隊も出動してゐたが、敵機の挑戦するものは數機に過ぎず、忽ち軍港上空は我が戦闘機隊に制壓されてしまつた。

布哇軍港の敵艦は、既に第一次攻撃を受けて炎々として燃え、或るものは既に水中に没してゐたが、なほ傷つかずに生残つたものに對して、第二次攻撃隊が、一艦も余さぬ猛襲を開始した。

斷末魔の敵艦があげる黒煙を搔潜り、飛鳥の如く殘存敵艦に殺倒する急降下爆撃機隊の奮戦は、燃える布哇軍港を背景に、凄烈な戦闘場面を再び現出した。

第二次攻撃隊が出動した頃は、敵の反撃は物凄く、布哇軍港は砲聲に轟き、上空は幾百とも知れぬ高角砲の炸裂した黒煙と火焰の織りなす濃煙で覆はれて天日暗く、和やかな朝暉は、煙の上に僅かに揺れてゐた。

晝間の海戦は二回にわたる攻勢で終つたが、黒煙は東風に吹かれてオアフ島を西に横斷、遙か洋上の彼方にまで流れた。

その夜下弦の月が山嶺の端に照つた頃、眞珠軍港では再び大爆發が起つた。

フオード島對岸の岸壁に一隻離れて投錨してゐたために沈没をまぬがれてゐた戦艦アリゾナが突如として舷側から水柱を噴き上げ、灼熱した鐵片は空中に飛んで、炸裂の轟音は再度軍港を震撼せしめた。

またも日本飛行機の來襲とばかり敵は照空燈を照らし、高角砲を打ち鳴らした。然しこれは軍港に秘かに突入して潜伏してゐた我が特別攻撃隊の強襲に依るものであつたが、初めて出現した我が特殊潜航艇に就いては夢想だにしなかつたアメリカは折から布哇軍港に飛來した味方のボーイング重爆『空の要塞』を撃墜した。

特別攻撃隊は晝間の攻撃にも参加したが、航空部隊の戦果と混入して識別出來ず、夜間の此の一撃のみが明かに區別されたのである。

アリゾナは胴體を眞二つに切斷されて轟沈し、坐乗の第一戦艦戦隊司令官アイザック、

キッド少将は戦死した。

布哇攻撃に参加して尊い犠牲となつたものは、我が飛行機廿九機と、特別攻撃隊の五隻の特殊潜航艇であつた。

布哇攻撃部隊員の奮戦振りを拾ひあげれば枚舉に遑がない。布哇攻撃に振ひ立つた海軍將兵は一命をこの一戦に捧げていさゝかも顧みなかつたが、特に二段進級の榮譽に輝やく勇士の功績を列記すれば、第二次攻撃隊の戦闘機隊指揮官飯田房太中佐は、布哇上空を制壓したのち、オアフ島東岸カネオヘ飛行場を襲ひ、水際に待機してゐた十數機の大型飛行艇を十五分間反復撃破し、更にベロス飛行場に飛んで敵機を撃破、再びカネオヘ飛行場へ引返して、敵機を銃撃し、やがてガソリタンクに敵弾を受けるや、部下に手を振つて訣別し、敵の格納庫へ眞一文字に飛込んで自爆した。飯田中佐はかねて「先づ敵の嚮導機を射よ、また駄目だと思つたら潔く自爆する事を躊躇するな。」と日頃部下に教へてゐたが、布哇海戦では自らその通り垂範実践したのであつた。

第一次攻撃隊の雷撃隊員鈴木三守中佐も魚雷発射前敵弾を受けて火達磨となつたが、屈せず、必中の魚雷を敵艦に發射したのち、敵艦に體當りして自爆し、第二次攻撃部隊の爆撃機隊々長牧野三郎中佐もまた急降下によつて必中弾を叩きつけると同時に自らも壯烈な最後を遂げた。

飯田、鈴木、牧野三守中佐は何れも功により特に二階級を進級（海戦當時は大尉）せしめられたが、此のほか航空関係の四十六勇士が二階級特進の榮光に浴した。

布哇海戦によつて、二階級進級せしめられたのは、右航空関係四十九勇士の外特別攻撃隊員九名を合して五十八名であつた。

布哇海戦に陸離たる光彩を放つたものゝ一つに、特別攻撃隊がある。

岩佐中佐等特別攻撃隊員は、特殊潜航艇を以て布哇軍港内に突入し、白晝強襲、或は夜襲によつて、史上空前の壯舉を敢行し、全員艇と運命を共にして散華した。

特別攻撃隊に依る攻撃の企圖は、岩佐中佐以下數名の將校が着想したもので、攻撃實行

に當つても志願者を募らず、岩佐中佐等が平素から信頼してゐた部下を隊員として参加せしめんと聯合艦隊司令長官に願出て、希望通り参加を命ぜられたものであつた。

特別攻撃隊員は、特殊潜航艇に分乗し、嚴重な警戒網と複雑な水路を突破して全艇豫定の部署に依つて港内に侵入した。かくて十二月八日の晝間強襲に参加した外、同日夜、月の出直後残存してゐたアリゾナ型戦艦を夜襲して撃沈し、眞珠軍港を再び震撼せしめた。

史上空前の壯舉を敢行した特別攻撃隊に對しては、聯合艦隊司令長官から感狀を授與されたが、なほ特別攻撃隊員の戦死者に對し二階級を進級せしめられた。これは大東亞戦争下、二階級進級の道が開けて初めての適用であつて、九軍神として一億國民の尊崇をあつめたのも當然である。

軍神の芳名は左の通りである。

海軍中佐 岩佐直治。

海軍少佐 横山正治。同 古野繁實。海軍大尉 廣尾彰。

海軍特務少尉 横山薫範。同 佐々木直吉。海軍兵曹長 上田定。同 片山義雄。

同 稻垣 清。

(何れも進級後の階級)

特別攻撃隊員は廿歳代から卅歳前後の若武者ばかりで、中でも最年少の廣尾彰大尉の如きは廿二歳であつたが、何れも従容として、ハイキングにでも赴くやうな恬澹たる氣持で出發してゐる。

櫻花散るべき時に散りてこそ大和の花と賞らるゝらん

身はたとへ異境の波にはつるとも護らでやまじ大和皇國を

これが岩佐中佐の残した辭世の歌である。

古野少佐の句は

君のため何か借まん若櫻散つて甲斐ある命なりせば

いざ行かむ網も機雷も乗り越えて撃ちて眞珠の玉と碎けむ

靖國に會ふ嬉しさや今朝の空

であつた。

布哇敗戦の眞相調査並に責任究明の任をうけたロバート大審院判事を委員長とし總員五

人からなる委員會は、敗戦の原因を次の如く報告してゐる。要約すれば、

一、戦争に對する根本的誤判断

日米間に戦端が開始しても、それは東亞に於てであるといふ觀念がアメリカ全體を支配してゐた。従つてアメリカが對日戦を覺悟し、政府首脳部が空襲の豫感を抱きながらも布哇軍港に於ては何ら實際措置が執られなかつた。布哇方面の指揮者達は、太平洋艦隊が眞珠灣軍港に基地を置く間に布哇空襲などは全然あり得ない、日本はかゝる奇襲を意圖してゐないと、例外なしに、信じてゐた。キンメル聯合艦隊司令長官ですら、戦前既に、布哇を衝かれる恐れがあるからその艦隊を防禦的に展開すべき命令をうけてゐたが、その措置をとらなかつた。(艦隊を展開してゐれば布哇海戦の如き大打撃はうけなかつたであらう)

二、戦闘準備状態の不完全

陸海共同沿岸防衛計畫によつて、オアフ島を中心として海軍は七百乃至八百哩の偵察、陸軍は周邊約廿哩の沿岸哨戒を行ふ事になつてゐた。また太平洋艦隊もオアフ島水域警

戒の任を帯びてゐた。更に陸軍高射砲隊、海軍沿岸高射砲隊、眞珠灣内の各軍艦に搭載されてゐる高角砲には人員が配置され、飛行機の最高度の準備状態も命令されてゐた。オアフ島の戦闘準備はこのやうに萬全を期されてゐたが、十二月八日即ち布哇海戦迄には實際何らの措置も執られなかつた。太平洋艦隊は航空母艦並に哨戒機で行動水域の偵察を行つたが、半徑七百哩迄擴張されることはなかつた。

特に十二月八日の朝は、オアフ島周邊に對して殆んど警戒されてゐなかつた。(日曜でもあり、低氣壓の去つた直後の安心が大きかつたであつたらう。但し無論ロバート報告書はかゝる失念を剔抉してはゐない―筆者) 僅に三機の哨戒機が潜水艦と共にオアフ島南方を哨戒してゐたに過ぎなかつた。

三、防衛の拙劣(我が集團組織攻撃の見事な成功)

全陸軍機はサボタージュを效果的に防止するために一ヶ所に集結されてゐた。また、陸軍機は四時間の豫告を以て出動準備を完了するやうに命ぜられてゐた。

このやうな飛行機の集結が奇襲のために大多數戦闘不能に陥入り、或は緩漫な戦闘準備

備状態（布哇海戦は前後を通じて約一時間半で終つてゐる―筆者）のために、日本軍が攻撃した際飛び上り得た戦闘機は僅かに二、三機に過ぎなかつた。同様の理由で母艦に引揚げて行く日本機追撃のため米機が間に合ふやうに離陸することもまた不可能であつた。

陸海軍情報本部も大きな失策を行つた。

陸軍情報本部の副官は、七日午前七時二分頃（ホノルル時間）多数の飛行機の編隊がオアフ島に向け飛んでゐる旨の情報を入手したが當時或る米國機數臺がオアフ島附近に飛來するかも知れぬといふ情報を得てゐたので、該編隊機を友軍機とみなして何らの措置も執らなかつた。副官は警報發令の訓練を受けるため情報本部附に任ぜられた未熟練者であつた。

海軍情報部も熟達した士官職員でなく、訓練下の非番士官が同日朝當直してゐた。

アメリカではかねて布哇が萬一攻撃されるなら夜明けであらうと豫想して、司令官は毎日午前四時から午前七時半まで警報實施を命じ、八日の日曜日にも警報は午前七時で終了した。（布哇海戦はそれから間もなく開始されてゐる―筆者）

#### 四、情報の不完全

布哇海戦の戦果並に我が方の損害を綜合すれば次の如くである。

##### 一、敵方損害

###### ◇撃 沈

オクラホマ、アリゾナ、ユタ（以上米確認）

###### 戦 艦

五隻 カリフォルニア型、ウエストバージニア型

甲巡亦是乙巡二隻

驅逐艦 二隻（ダウンス號、カッシン號、米確認）

給油艦 一隻

###### ◇大 破

戰艦 三隻 テネシー型、メリーランド型、ペンシルバニア型

輕 巡 二隻

驅逐艦 一隻

#### 第一章 布哇出撃

◇中 破

戰艦一隻 ネバダ

乙 巡 四隻

敵航空兵力に與へた損害

重爆撃により炎上せしめたもの

約四五〇機

撃墜せるもの

一四機

其の他撃破せるもの

多數

格納庫 十六棟炎上、二棟破壊

二、我方損害

飛行機 二九機

特殊潜航艇 五隻

註 一、昭和十六年十二月八日、同十八日、翌十七年三月六日の大本營發表に依る。

二、カリフォルニア型はカリフォルニア及びテネシーの二艦、メリーランド型はメリー



ランド及びウエストバージニアの二艦をいふ。但しメリーランド型一隻は一九四二年五月二十一日南米沖大西洋岸に於て伊太利潜水艦に依り撃沈された旨政府は發表した。従がつてメリーランド型は二艦とも撃沈されたわけである。

三、米政府は、布哇海戰の戦死者は、海軍側四千五百人、陸軍側一千名と發表してゐる。陸軍側戦死者の發生をみたのは、ホイラー、ヒツカム陸軍飛行場が大打撃を蒙つたためである。

なほ當時オアフ島に於ける敵兵力量に付いて、ロバート報告書は、各種艦艇七十五隻、またオアフ島並に眞珠灣陸軍の總數は七萬五千名と報じてゐる。

従がつてアメリカ政府の發表した陸海軍合計戦死者五千五百人の數字は犠牲者の一部である事が明瞭で、事實はもつと甚大な犠牲者を出した事は想像に難くない。

海軍眞珠灣再襲

開戦劈頭、布哇軍港を奇襲して米太平洋艦隊主力を覆滅した海軍航空部隊は、越えて昭

和十七年三月四日夜半、再度眞珠軍港を奇襲した。

眞珠軍港は十二月八日奇襲をうけたが、その際我が航空部隊が狙つたのは主として太平洋艦隊主力であつて、眞珠軍港の軍事施設には殆んど被害がなかつた。

眞珠軍港には三萬五千噸の戦艦を修理する船渠もあり、殊に當時アメリカ艦隊の大半が集結してゐた關係から、特に海軍工廠の設備は完備してゐた。

再度の眞珠軍港奇襲で我が海鷲が狙つたものは、海軍工廠であつた。

第一次奇襲の創痕未だ癒えず、海軍工廠が中心となつて着々復舊工事を急いでゐた矢先、またも夜陰を利用して、米太平洋艦隊の本據を衝いた再襲は、敵の心膽を塞かしめるに充分であつた。

眞珠軍港の對空砲火が活躍しはじめた頃には、既に爆弾が工廠に投下されたあとで、我が海鷲は爆撃を終つて悠々歸途に就いてゐた。

大東亞戰爭勃發後、太平洋方面に出動するアメリカ海軍部隊の根據地は依然眞珠軍港であつた。緒戦の十二月八日以來、眞珠軍港に對する防備は嚴重を極めたが、再度の同軍港

奇襲はアメリカを震撼せしめた。日米干戈を交へて以來敵は二回に亘つて布哇軍港が空襲を受けた、而るに戦前渡洋進攻を呼號したアメリカ海軍は一度も進攻する事が出来ぬうちにマニラ、新嘉坡、蘭印が相次いで陥落した。

海軍航空部隊の再度の布哇空襲は、精神的にアメリカを動搖せしめた。

#### 四、布哇海戰の影響

戦史上、布哇海戰程幾多の示唆を残した戦ひは無い。先制、奇襲の歴倒的成果、敵最大據點に對する乾坤一擲の決戦、空中魚雷による攻撃戰術の劃期的利用等數々の問題がそれである。

米、英は對日戰爭の時機を概ね一九四二年の夏頃を選んでゐた。アメリカは、我國と蘭印の交渉が開始された時、黒幕となつて之を妨害した上、蘭印政府に對して一九四二年夏迄にはアメリカの對日武力壓迫の準備が完了すると放言し、また英國も馬來防衛のための



沿岸機雷敷設を一九四二年の春迄に全部完成せしめる豫定であつた事が我が馬來作戦の進捗によつて判明した事などはその一端を物語る。米英は、我國が支那事變によつて疲弊したため、進んで活路を求める力が無いと誤診して、彼等の戦争準備が完了する迄我が國を經濟壓迫によつて締付け、我國が經濟封鎖だけで降伏するか、然らざる時は、戦争準備が一應緒に就く一九四二年の夏を待つて、武力を行使して降伏せしめんとした。

ピンソン案、スターク案による世界大海軍の建設計畫に依つて、第一艦が竣工するのは、一九四二年であつた。また巨大な生産能力が戦時態勢に編成されて兵器の製造が激化するのも、その頃であつた。即ちその頃アメリカの戦争準備が一應完成を見るのである。而も一方太平洋に於ける戰略態勢は着々強化されつゝあつた事は前に述べたとほりである。

布哇海戦には我が全力が傾けられた、即ち此の先制奇襲の一戦に若し敗北を喫したならば、戦ひの前途は如何に暗澹たるものであつたかは想像以上であらう。五、三の比率を一舉に打破せんがためには我方も全力を舉げて布哇海戦に出撃してゐた筈である。

不敗の根據地が艦隊に取つて最も安全な避難地である事は第一次歐洲大戰の教へるところであつた、英國海軍はスカツパーフロー或はファースト・フォースの奥深くに蟄伏して、艦隊存在主義によつて獨逸海軍を威壓した。

布哇軍港は太平洋のスカツパーフローであり同時に世界一堅固な要塞の一でもあつた。アメリカは眞珠軍港に太平洋艦隊を集結せしめてゐることが太平洋作戦の第一義であると考へた。眞珠軍港の狭長な水道の奥深くに太平洋艦隊を藏してゐた事は我が潜水艦を警戒してのせいに外ならない。何時でも強大な太平洋艦隊を擧げて出撃せしめ得る態勢を執つてゐた事は、それ自體既に東亞に對する恫喝であつた。

けれども、第一次歐洲戦争の時と布哇海戦では既に永い歲月の経過と共に兵器の驚ろくべき進歩があつた。

海底から躍り出る魚雷は、また空中から舞下る魚雷に進歩したのである。

布哇海戦は、空中魚雷の利用に劃期的生命を切り拓いたのであつた。

航空母艦が出現したのは第一次歐洲大戰の直後であつて海戦に於ける航空母艦の新しい

役割は未知であつた。

だが空中魚雷の利用が注目を引いたのは一九三九年十一月十一日と十二日の夜にかけて英國の航空母艦が伊太利タラント軍港を襲つた時にはじまる。この空襲によつて伊太利の三主力艦その他甲巡二隻等が損害を蒙つた。

タラント空襲で注目を引いた空中魚雷の利用は布哇海戦の結果、俄に各國の注目を浴びるに到つた。續いて馬來沖海戦でも空中魚雷が不沈戦艦を沈めるに及んで、大艦巨砲の威力にかはつて飛行機の存在が愈々重視され始めた。

アメリカは老大な戦艦の建艦計畫を俄に航空母艦建造に振向けるに到つた。

布哇海戦に依つて太平洋艦隊主力が潰滅した結果、アメリカの對日海軍力比五・三は逆轉した。アメリカがワシントン會議に於て五・三の比率を強制したのは、これに依つて太平洋上の積極的立場を保持せんがためであつた。比率を逆轉せしめられたのちのアメリカは、受身に立たざるを得なくなつた。大東亞戦争に於て、我が國は隨意、隨所に思ふだけの兵力を揚げて着々戦果を擴張し、ABC D包圍陣は僅か數十日の間に到るところで寸斷

されたにも拘はらず、米、英がこれに對して何ら反撃手段を取り得なかつたのは、守勢に立つたためであつた。

元來アメリカが太平洋作戦によつて企圖したものは渡洋進攻であつた。然し、布哇海戦の大敗によつて太平洋艦隊主力が潰滅し、艦隊の再編制を行つてゐる間に東亞の事態は疾風枯葉を卷いて西はベンガル灣から西南太平洋ではニューギニア濠洲迄戦線が進んでしまつた。

アメリカは其の後八月反攻に於てソロモンの一面に出撃した如き作戦をかねて企圖してゐたであらうが、開戦約半歳にして其の機を辛うじて擱んだのである。

此の間アメリカが僅かに反撃し得たのは航空母艦を中心とした集團攻撃であつた。

空母集團攻撃部隊が最も活躍したのは二月であつて、その後も數回軍事據點を襲つたが、我が反撃の強力さに弾かれて大した効果も收めずに敗退した。

僅か二、三隻の航空母艦を中心としたアメリカ機動部隊群ではとても狂瀾を既倒に返す戦果は望めない。アメリカが漸やく本格的な反撃手段を執り得たのは前記ソロモンの出撃

に現はれた如く、機動部隊に護衛された上陸部隊の大兵力を繰り出したためであつた。

かくの如く、潜水艦戦は別として、緒戦の打撃のために其の後半分アメリカは何ら手の打ちやうがなく、或は漸やく取得した反撃手段は僅かに航空母艦によるゲリラ戦位で、やがて本格的な反攻に出で來つた頃には、東亞の諸島嶼には鐵壁の我が根據地が隨所に出來上つてゐたのである。

米國の太平洋作戦は布哇の一撃で根底的に覆へされた。

アメリカの太平洋作戦の破綻に比例して、西太平洋に於ける我が制海權は確固不動のものとなつた。米英蘭の初めての西南太平洋聯合艦隊はジャワ近海の家海戰で文字通り殲滅され、西太平洋に於ける我作戦は快速力で進展した。

これは更に我海軍勢力の東太平洋出撃を可能ならしめた。

七月行はれた東太平洋作戦（ミッドウェー強襲とアリューシャン攻略）は、西太平洋に於ける制海權の確保があつて始めて爲し得るものであつた。

太平洋艦隊の撃滅は歐洲にも重大な影響を及ぼした。太平洋の失敗を補はんとして、ア

メリカは大西洋から海軍勢力を引揚げねばならなくなつた。歐洲を主戰場とし、太平洋を従とすと稱してきたアメリカの方策は變更を必要とするに到つた。

大西洋を英國に任じて、アメリカ海軍勢力が太平洋に移動すると、大西洋では忽ち獨伊潜水艦の活躍が開始された。

一九四二年二月以來、カリブ海を中心としカナダ沖から南米沿岸にかけて樞軸潜水艦の活躍は頓に激化した。東亞から求めてゐた資源の振替を南米に見出したアメリカは忽ち脅威を感じるに到つた。特に油槽船の被害は甚大であつた。

布哇海戰はまた精神的にもアメリカの精神を揺つた。「眞珠港を忘れるな」といふ標語が此の時以來アメリカに見出された。ルーズベルト大統領は市民の驚愕と民意の失墜を恐れて布哇海戰による被害をアリゾナ、オクラホマ、ユタの三艦で欺瞞せんとした。他の戦艦の損失には其の後頼冠りのまゝ押通してゐる。

廣告式宣傳に世界一の技術を誇つたアメリカではあつたが、此の布哇敗戦の戦果發表以來、政府の發表は著るしく國民の不信をかつた。

緒戦の布哇敗戦がアメリカに影響したところは極めて甚大である。

## 第二章 十二月八日の戦闘

大東亞戦争は布哇空襲によつて火蓋を切つたが、布哇空襲に呼應して戦線は馬來半島迄續きその距離は實に約六千哩、世界戦史に比類無い宏大豪壯な規模のうちに展開された。開戦の火蓋は布哇で切られたが、約六千哩彼方の馬來半島ではまた敵前上陸が開始され、新嘉坡テンガー、セレター敵空軍基地に對して八日未明海軍航空隊は初空襲を敢行した。

此の日更に比島に對する航空撃滅戦も開始され、戦火は日附變更線を東西に越えて東太平洋の布哇から西太平洋の馬來、比島に及んだ。

而も此の間、太平洋上の敵據點に對してもまた攻撃が開始された。

布哇軍港の前哨基地ミッドウエー島に對しては、同島沖に出撃した海軍部隊が八日午後

七時（ミッドウエー時間七日午後九時半）砲撃を開始し、ミッドウエー島の敵飛行機格納庫燃料庫等は忽ち火焰をあげて燃えた。

ウエーキ島に對しても八日午前十時二十分頃（ウエーキ時間で八日正午頃）我海軍航空部隊の空襲が行はれ、地上の敵九機が撃破されガソリンタンクは火を發して炎上した。

我が國に最も近いグアム島にも同じく空襲が行はれた。

太平洋上の敵軍事據點即ち布哇軍港から比島までの敵據點に對しては、此のやうに八日一齊に攻撃が開始された。

また支那大陸方面でも、米英撃碎のための戦ひが開始された。

支那にあるアメリカ租界に對して、我陸海軍現地部隊は進駐を開始すると共に、上海黄浦江上の米砲艦に對して砲火が開かれ、英砲艦ウエーキは降伏した。

支那に残されてゐた英國唯一の要塞香港に對しては、八日午後海軍航空部隊によつて空襲が開始され、空軍基地並に驅逐艦に損害を與へた。

此のほか、アメリカのプレジデントハリソン號（一萬五千噸）等大型船二十隻其他二百



隻合計八萬噸の船舶が我方に拿捕抑留された。

これに比較して、我方は布哇を攻撃した特殊潜航艇は論外として、他に艦艇の被害は皆無であり、また我方の船舶で敵に拿捕抑留されたものは一隻もなかつた。

緒戦の戦果は、此のやうに明確に勝利と敗北の二色に截然と色別けされた。

第二篇 西南太平洋撃滅戦

## 第一章 馬來沖海戰

### 一、新嘉坡軍港

大東亞戰爭が勃發すると同時に、我國は比島と馬來半島の二つの進撃路を傳つて南方攻略を開始した。

比島方面のものは、呂宋島からセレベス、ボルネオを傳つてジャワ島に出て、馬來半島方面は、新嘉坡を攻略してマラッカ海峽を抑へ、スマトラを経由してジャワ島に出るものであつた。

米英蘭が共同の敵となつたのちに於て、我南方攻略は、此の二つの進撃路を同時に前進する事となつた。

比島を放置して馬來方面のみを攻略すれば、支那海から馬來半島に伸びた數千哩の戰略

線は胴腹を敵に曝す事になつて、其處に忽ち脆弱性を暴露し、且つ比島から我本土の空爆さへも許容する結果になる。

また馬來半島を顧みずして比島のみを攻略すれば、新嘉坡軍港を背に負つた敵の反抗は必然熾烈であり、長期戦を覺悟しなければならない。比島と馬來の同時作戦は一時に廣範圍の戦鬪正面を持つ事になるが、同時に開始されなければならぬ作戦であつた。

馬來作戦の主目的は新嘉坡軍港の攻略であつた。

新嘉坡軍港は、布哇ジブラルタルと並んで世界三大軍港の一つであつたが、政治的にはその中でも最も重要な價値を帯びてゐた。

東亞に於ける英國の版圖印度、ビルマ、英領ボルネオ、濠洲の安定は總て新嘉坡軍港にかゝつてゐた。やがてABC D對日包圍陣が結成されたのちは蘭印迄がその勢力圏に入つた。第二時歐洲大戰が勃發し、伊太利の參戦を見るに到るや、大西洋と地中海の制壓だけ得手一杯の英國は、忽ち東亞の防衛に非常な困惑を感ぜざるを得なくなつた。もと／＼東亞方面に配備されてゐた英國海軍勢力比は支那、東印度各艦隊、濠洲、新西

蘭各海軍から成つて、それらは何れも數隻の巡洋艦を主力とするに過ぎず、支那艦隊が僅かに一隻の航空母艦イーグルを有してゐるに過ぎなかつた。

## 註

イーグルは大東亞戦争が勃發する頃は既に東亞の水域にはゐなかつた。地中海方面に廻航されてゐてジブラルタルを中心に活躍してゐたが一九四二年八月十一日ドイツ潜水艦のために西部地中海で撃沈された。

従つて、これらを如何に糾合してみても強力な我が艦隊に抗し得ない事は明瞭であつたが、ABC D對日包圍陣の成立は、かゝる脆弱な海軍勢力に神通力を賦與したかの如き錯覺を起さしめた。なかでも、蘭印はその魔力に眩惑された。

太平洋に於て、英米聯合戦線が成功した事は、當時に於ける英米海軍最大の悩みを救つたかの感を與へた。即ち海軍力の不足はアメリカが補ひ、渡洋進攻の場合のアメリカの弱點である基地は英國が提供する事によつて解決されたかの如くみられた。

また比島は米國に取つて東亞に於ける最大の據點ではあつたが、後方連絡の確保が極めて困難であつたので、米國に取つては強力な前哨線といふよりはむしろ戰略的弱點であつたが、米英合體が實現し、蘭印まで傘下に收め得たのちに於ては、後方連絡路を確保した比島は軍事的價值を著るしく増大した。而も比島を對日攻撃の第一戦とした背後には不落を誇る新嘉坡軍港が控へる結果となつた。

既に新嘉坡軍港では一九二一年六月以來軍港としての設備を施され、特に浮ドック、キングジョージ五世は五萬噸の巨船を收容し得られ、ほかに三萬噸の乾ドックをはじめ造船所をも備へてゐた。船渠の設備として完全なものであり、いかなる戦艦の修理も可能な東亞に於ける敵陣營唯一最大の軍港であつた。

その新嘉坡島には大小四つの陸海軍飛行場があり、外に馬來半島に約二十箇所の航空基地を有してゐて、第一線機約六百機を配してゐた。

元來英國が東亞の戰略線として頼んだのは香港——新嘉坡を結ぶ一線であつたが、香港は支那事變最中既に我が戦線が廣東、海南島に伸びた時から據點としての價值を喪失し新



嘉坡以東は既に英國の勢威が揺らいでゐた。

何れにしても新嘉坡こそ、東亞に於ける英國の國境線であり、且つ東亞防衛の牙城であつた。

昭和十六年十二月一日、新嘉坡軍港に突如英國の新鋭二戰艦が入港した。

プリンス・オブ・ウエールズ號とレパルスで、殊にプリンス・オブ・ウエールズは同年四月竣工したばかりの世界最新鋭戰艦であつた。そして翌々日、プリンス・オブ・ウエールズを旗艦としフィリップス中將を司令長官とする英東洋艦隊が編成された旨發表された。

東洋艦隊は二戰艦を主力とし、支那、東印度兩艦隊をはじめ濠洲海軍、ニュージールランド艦隊も包括するものゝ如くであつたが、馬來沖海戦で主力陣を喪失し、間もなく米亞細亞艦隊、蘭印海軍と合體して西南太平洋聯合艦隊を編成したために、東洋艦隊と長官旗を翻へしながら實質的に存在したのは僅か旬日に過ぎなかつた。

東洋艦隊の出現は、太平洋の現状に重大な影響を與へた。英國が遣外艦隊に戰艦を配し

たのはこれを以て嚆矢とする。當時布哇には太平洋主力が集結してゐた。

布哇と新嘉坡は、太平洋を東と西に挟んで距たつてはゐたが、不落の要塞にかくの如き有力な艦隊を有した結果は、我が國に對する強力な側面の抵抗となつた。

米英は完全な協力のもとに、日本に對する包圍の鐵環を完成したのであつた。

滿洲事變當時、米國の對日強硬論が對日力行使に迄發展し得なかつた理由の一は、日本の近邊に強力な海軍基地を持たなかつたからであつた。

支那事變に於けるパネー號事件に對しても外交的異議を支援する同様な軍事的缺陷を米國は自認した。

東洋艦隊の出現は、日本に對する米英の挾撃態勢の強化を物語るものである。

反樞軸陣の一部には、之を以て日本は戦はずして屈せざるを得ないといふ認識を強めたものも尠なくなかつた。此の時既に戰機は熟してゐて、週日の後には布哇海戦の勃發を見たのであつたが、當時は着々として強化される米、英の武力包圍陣に世界の眼が奪はれてゐた。

戦端が開かれるや布哇を奇襲した帝國海軍が、返す刀で約六千哩を離れた馬來沖に英東洋艦隊を葬つた緒戦の勝利は、太平洋を挟んだ敵米英の兩側面の抵抗を一刀のもとに斬拂つたもので、開戦後僅か三日間のうちにあがつた壓倒的戦果は、海戦未曾有の勝利として永く讃えられるものであらう。

## 二、英東洋艦隊出動

大東亞戦争が勃發すると共に西太平洋に於て最も注目すべきは英東洋艦隊の去就であつた。

英國が最新鋭不沈戦艦と高速戦艦を敢て東亞の水域に派遣したのは、敵前上陸を企圖する我が輸送船隊とその護衛艦隊を撃破する事に他ならなかつた。

我國としても馬來半島を攻略し、新嘉坡軍港を陥落せしめなければ、西太平洋の制海權が脅威をうけるので太平洋作戦の第一段階として如何にしても馬來攻略を開始する必要があつた。

あつた。

開戦第一日即ち十二月八日には、プリンス・オブ・ウェールズ、レパルス兩主力艦を中心とする英東洋艦隊は新嘉坡セレーター軍港に集結してゐた。

此の朝未明、我が陸軍部隊は、果然馬來半島の中部シンゴラ、コタバルに敵前上陸を開始した。同時に馬來半島に於ける制空權を獲得するために新嘉坡に對する初空襲が海軍航空部隊によつて決行された。

新嘉坡空襲が布哇空襲と時を同じくしたのは言ふ迄もない。新嘉坡では、布哇との時差の関係で、未だ眞黒な夜のうちに攻撃が加へられる事となつた。海軍航空部隊は、こゝでもまた完全に奇襲に成功した。新嘉坡は煌々たる電燈の下に昏々と睡つてゐたのである。

東洋艦隊は、その夜、つまり八日夜セレーター軍港を抜錨した。シンゴラ、コタバル方面の上陸部隊並に護衛艦隊に決戦を挑まんためであつた。夜陰に乗じて出陣した英東洋艦隊こそは馬來防衛者としての最大の輿望を擔つて起つたのである。

新嘉坡港外も何事も無く、舳艫相含んだ東洋艦隊は、三隻の直衛驅逐艦を先頭に、プリ

ンス・オブ・ウエールズ、レパルスの順で威風堂々、馬來半島沖を一路北上した。

プリンス・オブ・ウエールズには長官旗が翻へり、坐乗のサー・トーマス・フィリップス中將は、不沈戦艦を率けて我が艦隊との決戦を求めた。此の點、逸早く比島を離れて制海權を放棄した米亞細亞艦隊の行動とは趣きを異にする。

だが新嘉坡沖合に於て隱密警戒に當つてゐた我が潜水艦は、九日午後三時十五分、北上中の英東洋艦隊を見事に發見した。

當時我が方は二段構への陣を張つてゐた。

英東洋艦隊の出動に備へて、水上部隊と基地航空部隊がそれ／＼撃滅の構へをとつてゐたのである。

九日は折悪しく荒天であつた。馬來半島上空には厚い漠雲が重く低くこめ、海上にもまた積亂雲が多く、スコールは劇しく降り注いだ。

〇〇基地航空部隊は全力をあげて出動したが、折柄の荒天ではあり、基地からの距離も開いてゐたので遠くアナンバス群島上空迄索敵したが、遂に遭遇する機會に恵まれず夜と

なつた。

我が水上部隊もまた英東洋艦隊との決戦を企圖したが、この方は戦機に接し得ず惜しくも緒戦の凱歌を航空部隊に譲る結果となつた。それは、英東洋艦隊が此の夜反轉して、針路を馬來半島クアンタン方面に向け直したからであつた。

英東洋艦隊が反轉したのはフィリップス提督の誤判断に基づくものゝやうである。九日午前、前日新嘉坡空襲に引續いて海軍航空部隊はクアンタン敵飛行場を空襲し敵機約三十機を撃破したが、此の報を受けたフィリップス提督は我が軍がクアンタン方面に再び敵前上陸を開始すると判断したらしい。

九日夜英東洋艦隊反轉の理由には、このやうな解釋が正しいやうである。だが此の謎をとくフィリップス長官が馬來沖海戦に於て旗艦プリンス・オブ・ウエールズと共に沈んでゐるので、これはあく迄も推論に過ぎない。

八日陸軍部隊が上陸したコタバル、シンゴラから新嘉坡迄は約三百哩距てゐた。クワンタンからはその二分の一位の距離である。クアンタン上陸推定はこのやうな所にも一應

の理を見出し得る。

厚い積亂雲の重疊と荒れ氣味の天候も、九日の夜に入つて次第に回復しはじめた。

十日を迎えた時、馬來沖は拭つたやうに晴れ、所々に雲塊が流れて視界はからりと開けた。そして夜明けと共に東洋艦隊は再び我が潜水艦部隊の警戒網に引かゝつた。

此の時東洋艦隊は馬來半島の岸近く、更に針路を轉じて南下中であつた。新嘉坡を出港して以來一路北上してのち針路を西に變へ、馬來半島に接近するや、やがてまた轉針して南下したのである。

既に我が水上部隊との距離は開き過ぎてゐた。英東洋艦隊を捕捉殲滅する機會に恵まれるのはいまや駿足の我が航空部隊ばかりである。

〇〇基地航空部隊は全力を擧げて東洋艦隊に殺到した。

早朝發進した基地航空部隊の索敵機も午前十一時四十五分クアンタン沖五十哩の水域で東洋艦隊を發見した。こゝ迄〇〇基地からは直線コースにして實に千キロに垂んとする遠距離である。

索敵攻撃に任じつゝあつた攻撃隊は、飛電一閃。東洋艦隊に殺到しはじめた。

英國の不沈戦艦か、我が飛行機か、近代海戦に於ける新しい課題を翼に擔つて攻撃隊は敵主力に決戦を挑んだ。

東洋艦隊は、三角陣を張つた驅逐艦三隻を先行させ、旗艦プリンス・オブ・ウェールズ、レパルスの順で警戒航行中であつた。速力は二十節。

丁度行手の上空に一塊の白雲が擴がつてゐた。

僅かに雲の切れ間があつて太陽の光線が矢のやうに流れてゐるところから突然光を背負つた爆撃機の一隊が降るやうに殺到した。午後一時頃である。

敵の防禦砲火も應戦したが、レパルスのカタバルト・デツキに命中した一弾は、艦内深くで炸裂して忽ち火焰が舞ひのぼつた。

續いて攻撃機隊の第二陣が殺到した。全速力で避退する敵艦に魚雷は凄まじく喰ひ込んだ。第三次攻撃隊も殺到してきた。兩舷から魚雷は愈々劇しく敵艦に迫つた。命中するとに水柱が凄まじく舷側から舞ひのぼる。攻撃機隊は海面擦れ／＼に迄降下して敵艦に肉

迫魚雷を發射し、更にマストをかすめて機銃を掃射しながら上昇した。左右から迫る魚雷を避けて右往左往する敵主力艦は、總ての火砲を動員して自慢の二十ミリ對空火器ボンボン砲撃が眞赤に火を吐き、やがて主砲迄が飛行機目めかけて射ち出された。

海上に残る眞白な五本の航跡、火龍の如く兩舷に火を吐く戦艦、その上をすいと右から左へ、左から右へかすめて飛ぶ飛行機、海中からは魚雷が戦艦を追ひかけ、大空では太陽の光を消す高角砲の彈幕が擴がり、飛行機と戦艦の一騎打ちは眞に激烈を極めた。

戦艦の悲鳴を代辨するやうに、高い水柱が次々と舷側から噴きあげて海上に眞白く崩れ落ちる。レパルスが先づがつくり速力を落した。右舷に單艦轉針したとみるや、大爆發が起つて、あつといふ間に巨體は海中に没し去つた。見事な轟沈である。時に午後二時二十七分。

やがて魚雷は敵驅逐艦一隻をも噴きとばした。白煙を全身から上げたとみるや、忽ちレパルスのあとを追つて沈没した。

プリンス・オブ・ウェールズは流石に不沈戦艦だけあつた。傾きながら八節位の速力で

左に轉舵して進んだと思ふとやがて魚雷は艦尾に何發目かの命中をした。

巨大な水柱が立ち、艦尾を左舷に愈々はげしく傾けた。

いまや不沈戦艦も斷末魔である。後方から驅逐艦が一隻、速力をあげてプリンス・オブ・ウェールズに迫つた。驅逐艦はプリンス・オブ・ウェールズの舷側に寄りそつて乗組員を移さんとしたのであつた。此の間約三十秒、間もなくプリンス・オブ・ウェールズに大爆發が起つた。火焰がめら／＼と舞ひのぼり、黒煙が噴き出した。續いて第二の爆發と共に午後二時五分、不沈戦艦は艦尾からづぶづぶ海中に没した。

坐乗のトーマス・フィリップス中將、艦長ジョン・リーチ大佐はプリンス・オブ・ウェールズと運命を共にした。

我が攻撃隊が引揚げる頃、後方から敵戦闘機八機が戰場へ飛來したが總てあとの祭りであつた。クアンタン沖僅か五十哩の海上に於ける海戦であつたが、敵航空部隊は何ら手の施こしやうがなかつたのである。

チャーチル首相は翌十一日、議會で二戦艦の沈没を發表した。ネルソン以來、不敗を誇

つた英國海軍の誇りは一朝にして崩壊した。

海軍に絶大の信頼を寄せてゐた英國々民は馬來沖敗戦に愕然となつた。英國戰略家達は、兵術の革命であると我航空部隊の威力に嗟嘆し、不沈戦艦の最後を悲しんだ。

歐洲戦争の經驗を織込んだ英海軍が全力を傾けて造つた不沈戦艦が、わづか開戦三日目にして撃沈された事は、英國民を悲しませるに充分であつた。而も東洋艦隊が主力潰滅の代償として得たのは僅かに三機の我が自爆機であつた。

馬來沖海戦の戦果並に我が方の損害を綜合すれば次の如くである。

#### ◇英國の損失

撃沈

戦艦——プリンス・オブ・ウェールズ。同 レパルス

驅逐艦 一隻

#### ◇我方の損害

自爆

飛行機 三機

註 昭和十六年十二月十日、同十一日に於ける大本營發表による。

### 三、華府體制の崩壊

二十年前、米、英はワシントン體制を強行して、主力艦、航空母艦の保有量を制限したが劣勢を押しつけられた帝國海軍は、之を補ふために質の充實をはかり、同時に新兵器である海軍航空部隊の完備に全力を傾けた。ワシントン會議に引続きロンドン會議によつて補助艦にも制限が加へられたが、海軍航空部隊に對しては僅かにこれを搭載する航空母艦保有量の制限のみで、飛行機そのものには何らの制限も課せられなかつた。

當時、海軍機の威力は、海軍戰術の轉換を促す程發達してはゐなかつたが、その後航空母艦並に飛行機の發達は著しく、特に行動圏の目覺ましい進歩と航空魚雷等の發達は海戦

の方式に本質的變化を齎すに到つた。即ち近代海戦に於ては、最早航空機の存在を無視する事は不可能となつたのである。

飛行機が初めて實戦に参加したのは第一次歐洲戦争の時であつた。元來飛行機が兵器として注目を惹くに到つたのは二十世紀に入つてからで、ブレリオが英佛海峡を横斷したのは一九〇九年、戰場に於て重要な役割を擔ふに到つたのは歐洲大戰の二年目（一九一五年）からであつた。その後歐洲大戰によつて飛行機の發達は目覺ましく、夜陰を問はず戰闘、爆撃、偵察、連絡に活躍範圍は著るしく擴大した。

だが飛行機が海戦に於て重要、不可欠の眞價を發揮したのは、大東亞戦争であつた。第二次歐洲大戰に於ては、ドイツ空軍の活躍は歐洲大戰の戦局を支配してきたが、海軍航空隊を持たぬドイツは海上に於ては餘り功績を示さなかつた。例へば戦艦ビスマーク號の最後の如く、プレスト沖四百哩に於てイギリス艦隊と最後の海戦を行つた時、ドイツの重爆撃機大編隊は切角救援に出動したが種々の事情のため遂に海戰場裡に到達しないで引揚げた。

またスカツパフロ軍港に對してドイツ空軍の空爆が行はれた事はあつたが、何れも爆撃によるもので空中魚雷の使用は行はれなかつた。

飛行機か戦艦かの問題は、結局馬來沖海戦に於て解決される事となつた。馬來沖海戦は、飛行機と戦艦の決戦の典型的海戦であつて、我が方は基地航空隊ばかりであり、英國は水上部隊のみであつた。海戦の結果は飛行機三機が戦艦二隻、大型驅逐艦一隻と差違へる結果となつた。

飛行機と戦艦の決戦が、かくの如き鮮やかな結果を生む事を豫想しなかつた英國は、馬來の敗戦に愕然たらざるを得なかつた。結局英國は歐洲に於て未解決の問題を處理するためにわざわざ最新鋭の不沈戦艦を東亞へ派したやうなものであつた。

基地航空部隊の威力は俄然注目を浴びるに到つた。尠くも行動圏一千キロ以内に於ては基地航空兵力の壓倒的優位が馬來沖海戦によつて證明されたのである。

布哇海戦並に馬來沖海戦によつて、開戦僅か三日にして米太平洋艦隊主力並に英東洋艦隊主力は覆滅した。而も何れも我航空兵力の威力に愕伏したのである。

二十年前華府會議によつて米英相謀つて我主力艦を劣勢比率に強制し、太平洋上の優位を獲得せんとした米英は、その後離伏二十年、黙々として錬磨し來つた帝國海軍に緒戦で破れ去つたのである。

二十年間の兵器の進歩、不斷の訓練、特に華府會議、ロンドン會議に於て何ら制限を受けなかつた飛行機の進歩は完全に華府體制を崩壊せしめた。

比率の強制に依る海軍勢力比は今や全く過去に於ける米英覇道政治の夢と化した。米英海軍の歴史的的地位には、此の一瞬から大きな變動が生じたのである。

同時に基地航空兵力の轉進が、今次戦争の重要な作戦となり、海戦に於ける制空權問題は、俄然大東亞戦争の大きな歴史的課題となつた。

## 第二章 比島航空撃滅戦

### 一、對日包圍の最前線

大東亞戦争が勃發した十二月八日、戦ひの火蓋は先づ飛行機を主兵として切られたが、緒戦の此の日、我が航空兵力は三つの戦鬪正面を持つてゐた。

一つは米海軍の本據布哇軍港に對し、他は比島の米航空兵力、第三には馬來方面に對してであつた。

三方面に對する航空作戦は、殆んど同様に逸早く開始されたが、なかでも比島航空撃滅戦の成果は、我が國土に直接重大な影響を持つてゐた。

日米干戈を交へた曉、比島がアメリカに取つて唯一の反撃の基地である事は、戦前夙に呼號されてゐたところで、アメリカがこゝに強力な航空部隊、水上艦艇、潜水部隊を配す



れば、我が國の南進が極めて至難である事は、地勢的にも明瞭であつた。また比島は我が國に對する反撃の第一線であつたからアメリカに取つて比島の地位は、東亞に對する攻撃と防衛を兼ねた戦略上の要衝で、これを維持するか否かは、アメリカの權威が西太平洋に介入するか、或はそれから退却するかを決定するものであつた。

日米間に風雲が切迫するや、アメリカは比島防衛に狂奔した。空の要塞といはれるポイングB一七型、同一八型が急遽補強され、潜水艦が増派された。萬一日本軍が上陸した場合にも備へてバタアン半島、孤島コレヒドール要塞には、不落の防備が急がれた。

だが布哇、ミッドウエー、ウエーキ、ガム、比島と太平洋の中央に伸びてゐる連絡線は、途中に於て我が内南洋の中を通過しなければならなかつたので比島は後方を遮斷される弱點を避け得なかつた。

従つてアメリカが東亞に武力壓迫の手をのばさんとする時には、先づ此の惱みを解決する必要があつた。

ABC D對日包圍陣の結成は、かゝるアメリカの野望の一端を結實させたものであつ

た。

支那事變を利用して我が國力の消耗を策し、對日經濟壓迫によつて資源戰を企み、更に最後の武力行動迄を考慮して、既にその段階に入つたのである。

蘭印を飛石傳ひに、濠洲の巨大な面積の陰を副ひ、米國と比島の連絡が安全に併も完全に執れ得る情勢の變化は、比島に不落の堅塞たる資質を賦與した。

大東亞戰爭が勃發した當時、比島のアメリカ航空兵力は陸海軍を合して總數約三百機であつた。

そのうちには、太平洋のあはたゞしい風雲に乗つて補強された空の要塞ポイングB一七型、同一八型などのアメリカ第一線長距離爆撃機が約五十機、PB Y大型飛行艇が約四十機、戦闘機が約百機があり、残りは偵察機、練習機等であつた。

ポイング超重爆は九州から我が近畿附近迄を行動圏内に收める威力を持つてゐたので、比島の敵機が我が本土を空襲する事は、充分可能であつた。

かゝる敵機の反撃を撃摧し、且つ比島攻略を速かに實施するためには先づ比島方面の敵

航空兵力を撃滅しなければならなかつた。

## 二、比島空襲

十二月八日の開戦第一日、比島方面を攻略せんとする我が航空部隊が基地から發進しなければならぬ時刻に、基地に濃霧が襲つてきて離陸すら不可能となり、航空部隊は遂に八日の夜明けを迎へ、遅くなつてから漸やく進撃した。

一 布哇と比島は時間の關係で、布哇空襲と比島空襲が同時に行はれるとすれば、比島では未明の眞暗な時でなければならなかつた。濃霧のため出發の遅れた間に、比島のアメリカ部隊は布哇海戦の報知を受取つてゐた。

我が空襲部隊が比島目指して進撃したのは天候に阻まれたため、布哇空襲時の大分あとになつた。もし比島のアメリカ空軍が、此の機を逸せず我が國に反撃を試みたら比島攻略戦の速度は變化した事であらうが、アメリカは遂にその機会を逸した。最も比島の航空機

の若干は我が基地方面附近に飛來してゐたが天候不良のため何ら爲す事が出来なかつた、比島の敵航空部隊は天候の回復を待ちつゝ飛行場に整列してゐたのである。敵機の集結は、我が航空撃滅戦に絶好の結果を與へた。

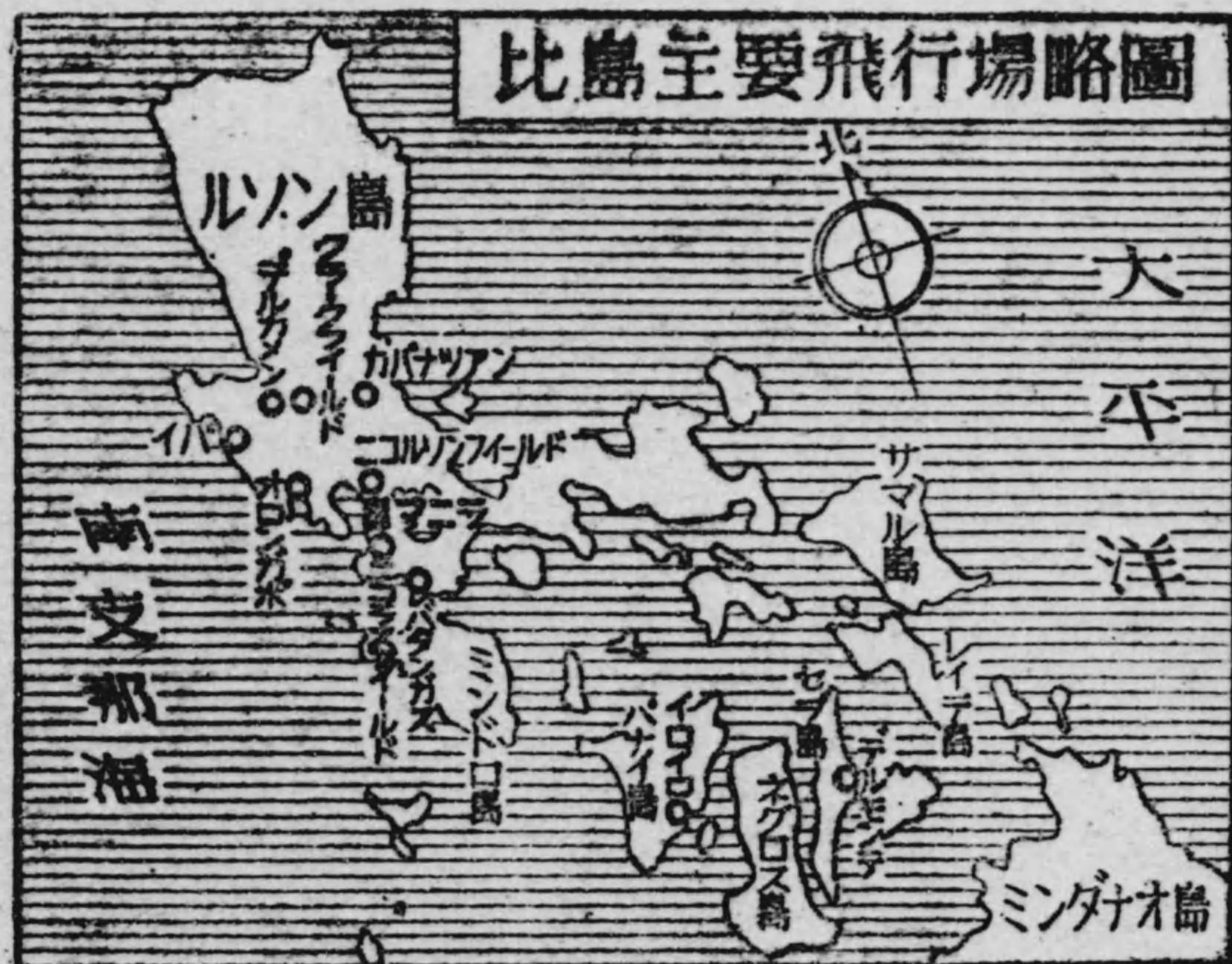
爆撃機、戦闘機からなる大編隊の我が攻撃部隊がクラークフィールド及びイバ兩飛行場に大舉攻撃を加へた。

クラークフィールドには敵超重爆の殆んど全部が集結してゐた。

此の時我が基地とクラークフィールドの距離は海を距てゝ往復〇千軒の距離があつたが、航空撃滅戦を速かに實施するために我が戦闘機も攻撃に参加した。

かゝる長距離の渡洋攻撃を實施するために我が戦闘機隊の拂つた周密な作戦準備の苦心は絶大であつたが、見事に輝やかしい大空の記録を創造した。戦闘機隊の長距離渡洋としては戦史に比類のないものであつた。

昭和十二年支那事變が勃發した當時、海軍戦闘機隊は上海から南京に出撃したが、南京上空で敵機と決戦して上海に引返すのが丁度一杯の行動であつた。



上海、南京間の昭和十二年と、往復〇千軒の昭和十六年とを比較する時僅かに四年間に數倍の驚異的發達を遂げた事が判る。

初日の初攻撃によつてクラークフィールド及びイバ兩基地の敵機で撃墜されたものは百二機に及び、この第一撃で敵航空兵力の三分の一が潰滅してしまつた。

九日は天候不良のためニコラスフィールドに夜間爆撃を敢行したゞけで晝間の攻撃は行はれず、十日に到つて再度基地航空隊の全力をあげた

航空撃滅戦が行はれた。

第二回目の總攻撃はマニラ周辺の敵飛行場を目標とし、ニコラスフィールド、ニエルソン、キャンブマーフィ、デルカルメン等の飛行場は風潰しに急襲され、またも撃墜破百六機の大戦果を擧げた。

ニコラスフィールドは、第一日の空襲で覆滅したクラークフィールドと共に比島最大の航空基地の双壁であり、主として戦闘機、偵察機、攻撃機等約八十機集結してゐた。

此の日キャビテ軍港を襲つた部隊は、繫留中の驅逐艦、潜水艦、特務艦に致命弾を命中せしめたが、同軍港を根據としてゐた亞細亞艦隊は逸早く遁走してゐた、既に此の時僅か數隻の残存艦艇を残すのみであつた。

ところが此の日の午後、基地方面の天候がにはかに悪化して所々に猛雨さへあり、視界は極めて不良となつた。歸途に就いてからこのやうな悪條件に遭遇して第二回空襲部隊は、支那事變初頭に於ける七二〇ミリの低氣壓を衝いた渡洋爆撃隊に勝るとも劣らぬ苦難をなめる事となつた。



殊に空襲部隊の中には、攻撃機隊に比較して航法、能力の劣つた戦闘機隊が交つてゐた。

不良な天候と戦つた此の日の戦闘機隊の奮戦こそは、比島航空撃滅戦の歴巻の一つであつたらう。日頃の訓練、技術、機體の優勢、熾烈な戦闘精神等が綜合されてこのやうな状態であつたにも拘はらず、行方不明となつたのは結局一機に過ぎなかつた。

第三回比島總攻撃は十二日に決行された。

續いて翌十三日第四回總攻撃が實施されたが、既に三回の總攻撃に於て敵空軍の殆んど全部が潰滅し去つたので、第四回の攻撃の際挑戦し來つた敵機は僅か一機に過ぎなかつた。此の日の空襲で特別善行賞を授與された少年航空兵出身の若い戦闘機隊員がある。

マニラ周辺の飛行場に低空飛行を敢行、大型機二機、小型機九機を炎上せしめた一等飛行兵曹は、地上の敵機銃弾を右肩に浴びて肩胛骨を碎かれたが、戦闘意識の旺盛な同兵曹は左手を操縦桿から放さなかつた。やがて出血のため意識が朦朧となつたが、遂に渡洋に成功して基地に歸來した。併し片手のため引込車輛を引出す事が出來ず、車輛を引込めた

まゝ着陸し、操縦席の同兵曹は人事不省に陥つた。意識不明になりながらも魂の操縦によつて基地に歸つた烈々たる攻撃精神は部隊の賞讃を浴び同兵曹には後に特別善行賞を授與された。戦闘機隊の隊員、機體共に優越してゐる事を物語る一つの實例である。

かくの如く開戦後六日目、此の間進攻四目で比島敵航空兵力の大部が撃滅された事は比島作戦の大勢を決した。

緒戦に於ける布哇海戦の敗報に驚愕したアメリカは、週日を出でずして比島空軍潰滅の報も手にし、布哇敗戦にも比すべき衝撃を受けた。

中立國の新聞の中には逸早く比島の運命を豫言するものさへ現はれた。比島空軍には米第一線機が揃へてあつたので、餘り急速な撃滅に愕然たらざるを得なかつたのである。

その後間もなく十二月十四日レガスピーに上陸した陸軍部隊によつて同方兩飛行場が占領確保されたので、海軍航空部隊の一部は同飛行場に轉進したが、その後は専ら敵機の掃蕩戦に過ぎなかつた。

進攻四回で比島方面航空兵力を覆滅した航空撃滅戦の成果は爾後の作戦に寄與する所が甚大であつた。同空襲に参加した第一空襲部隊、第二空襲部隊に對して、後日山本聯合艦隊司令長官から感狀が授與された。(二七、五、二七)

第一、第二空襲部隊による開戦後旬日間の比島各地爆撃狀況

撃墜

撃破

敵飛行場

一二一八

二五(大型一)

イバ、クラークフィールド

一〇

五二(大型六)

マニラ周邊飛行場

一二

八

バダングス、イバ、オロンガボ、クラークフィールド

一三

一

ニコラスフィールド、デルカルメン、カバナツアン

一五

一

五

ニコラスフィールド

一八

一

二

イロイロ

一九

六

五

デルモンテ

カ二

一一〇

合計

三〇二

## 第三章 ウエーキ島攻略戦

ウエーキ島は太平洋上のアメリカ最前線基地であつた。距離から見ても横濱、ウエーキ間は千九百五十哩、ウエーキ、布哇間は二千四哩であつて、ウエーキ島は布哇、横濱間の丁度中間に位置してゐた。

布哇、ウエーキを結ぶ中間には更にミッドウエー島が存在した。アメリカに取つて、戦前、布哇、ミッドウエー、ウエーキを結んだ一線が太平洋中央進攻路に豫想されたのは當然の所であつた。

ウエーキ島は三つの珊瑚礁から成り、全部を合して僅かに面積十平方キロ、最長部でも八キロしかない洋上の扁舟のやうな孤島であつたが、クリツパー機による米本土・比島間の太平洋定期航空路が開設されて一躍洋上の宿場として注目され、更に日・米間の風雲が急を告げるや對日反攻の有力な基地として千五百五十萬ドルの巨費によつて全島を武装化

されつゝあつた。

數年前まで無人島であつた一介の生物も出ない珊瑚島に、三千名の人夫が送られて大規模な軍事施設が施されはじめた。

定期航路用の海上基地施設の他に、新たに二千米と千六百米の二本の陸上滑走路が造られ、更にホテルが出来、海兵隊の宿舎が設けられ、續いて砲臺、本格的兵舎、病院、倉庫等の基礎工事が終了した。

十二月八日我が第一次空襲が開始された時、ウエーキ島は、丁度かゝる状態にあつた。

大東亞戦争の一つの特徴的形態は、據點の奪取戦である。

廣漠たる太平洋に於ては、戦線の前進、發展は據點となり得る島嶼の奪取戦に具現される。通商破壊戦の作戦基地を提供し得る港湾、強力な陸上航空基地を設備し得る島嶼、其他既に軍事據點としての施設を完備せる島嶼は當然攻略の最大の目的となる。假にグアム島或はウエーキ島などがそのまゝアメリカの掌中にあつて堅固に防禦されてゐるとすれば、大東亞戦争はこの二つの據點に阻まれて戦ひの速度をいかに阻害されるであらうか。

據點の意味では比島もまた西太平洋に於けるアメリカの最強、最大の對日戦の基地であつた。大東亞戦争が勃發すると共に、これらアメリカの對日反攻の連鎖基地に對して、我が國は全面的に先制攻略を開始した。

帝國海軍部隊のウエーキ島攻略は、西太平洋に於ける我が制海權の獲得確保を意味すると共に、同時にまたアメリカが日附變更線以東の東太平洋に後退した事を示したものであつた。

だが、據點奪取戦の勃發を豫測されて、警戒を嚴にし防備された島嶼を攻略する事は極めて至難の事である。

ウエーキ島はかゝる意味での典型的な激戦場であつた。

ウエーキ島に對する上陸作戦は十二月二十二日午後九時半頃から開始された。

田中三夫海軍中佐の指揮した第〇〇艦隊聯合特別陸戰隊並びにウエーキ島攻略戦参加部隊は、折柄十數米の強風が連吹し、長濤激浪の嘯むウエーキ島南岸に接近したのであつた。闇夜の中を驟雨が去來し、肅殺の氣が満ち／＼してゐる。ウエーキ島の敵は既に十二月八

日の我が第一次ウエーキ島空襲以來、我が上陸作戦を豫想して五吋平射砲、三吋高角砲十三ミリ及び七・七ミリ機銃を上陸地點に集中配備してゐて、我が上陸が開始されると共に猛烈な砲火を上陸部隊に集中した。

内田謹一少佐（當時大尉）の指揮する部隊が眞先に舷側から海中に飛込んだが水深は肩を没して至難な敵前上陸となつた。

水際の戦鬪で早くも敵前上陸は大激戦となつた。内田少佐も傷ついた。他の部隊長も相次いで傷き、隊員の中にも壯烈な最後を遂げる者が續出した。

何一つ身體を護るものもない水際に身體を投出して珊瑚礁の磯に爪を立て／＼敵陣ににじみ寄るのである。

二十六日の午前三時頃戦鬪は最激烈を極めた。既に上陸開始以來數時間、腥風荒む戰場に漸やく朝の訪れがきざし始めたが、敵の頑強な抵抗は衰へなかつた。敵も精強を謳はれてゐる海兵隊である。ベルグマン機銃を身體にあて、すつくり火線の上に棒立ちになつて我が陸戰隊員の頭上に弾丸を注ぎかける果敢なものもゐた。

此の間、ウエーキ島東岸ピーコック岬に最右翼隊として上陸した別働隊は、敵が南岸に全力をあけて防戦してゐる虚に乗じて同岬砲臺を奇襲奪取し、敵の機銃陣地を破壊して北上中、自動車道路の屈折箇所にかゝると偶々路上を南下して来る一臺の自動車を發見した。自動車はやがて急停車したのちあはたゞしく後退しはじめたので間髪を容れずこれを押へると、中からウエーキ島守備隊指揮官カニングラム中佐が白旗を振つて降り立つた。指揮官の投降で敵兵の降伏の端緒が開けた。

一方ウイルクス島では尙激戦が続いてゐた。(ウエーキ島はウエーキ本島、ピール島、ウイルクス島の三つから成つてゐる) 田村圭一少尉(當時兵曹長)の指揮した部隊が寡兵を以て克く同島高角砲臺を占領したが、黎明と共に敵は我が部隊が孤立してゐるのを認めて優勢を持って逆襲し、遂に壯烈な格闘戦となつて田村兵曹長以下次第に戦死し、午前八時頃には十數名の兵力で敵の百數十名と對峙中であつた。ウエーキ島から増援隊が到着した時は、ウイルクス島は激戦の最中であつた。だが、我が増援の救援でウイルクス島の敵も投降し、全ウエーキ島の攻略が完了した。

太平洋上の葭爾たる孤島ではあつたが、ウエーキ島攻略戦のために拂はれた我が方の犠牲は大きかつた。

内田謹一少佐は其後敵地上陸戦闘を指揮中壯烈な戦死を遂げ、其他我が方の戦死者は決して僅少ではなかつた。嶋田海相は議會に於ける戦況説明のなかで特にウエーキ島攻略戦を鬼神も哭く激闘と形容した。

布哇、馬來沖海戦の僅少な犠牲に比較してウエーキ島攻略戦は多大の犠牲を出したが、これこそ據點奪取戦の至難性を卒直に示すものであり、一面からすれば大東戦亞争の激戦である所以を端的に表現したものであつた。

ウエーキ島は其の後大島島、ピール島は羽島、ウイルクス島は足島と改名された。



### 第四章 ジャワ近海海戦

#### 一、蘭印航空轉進戦

比島のアメリカ航空兵力を撃滅したのち、更に蘭印航空兵力を撃滅するため、我が海軍航空部隊は、二つの進撃路を南下した。

セレベス島——セラム島——チモール島と轉進した第〇〇航空隊と、ボルネオ島——セレベス島(マカツサル)——バリ島へと轉進した〇〇海軍航空隊の二つがそれである。

第〇〇航空隊の進撃の跡を辿れば、一月十二日にメナド、同二十五日ケンダリ、二月四日アンボン、同二十三日クーパーン、また〇〇海軍航空隊は一月十六日タラカン、同二十八日バリツクパパン、二月十八日マカツサル、同二十日バリ島にと進撃してゐる。

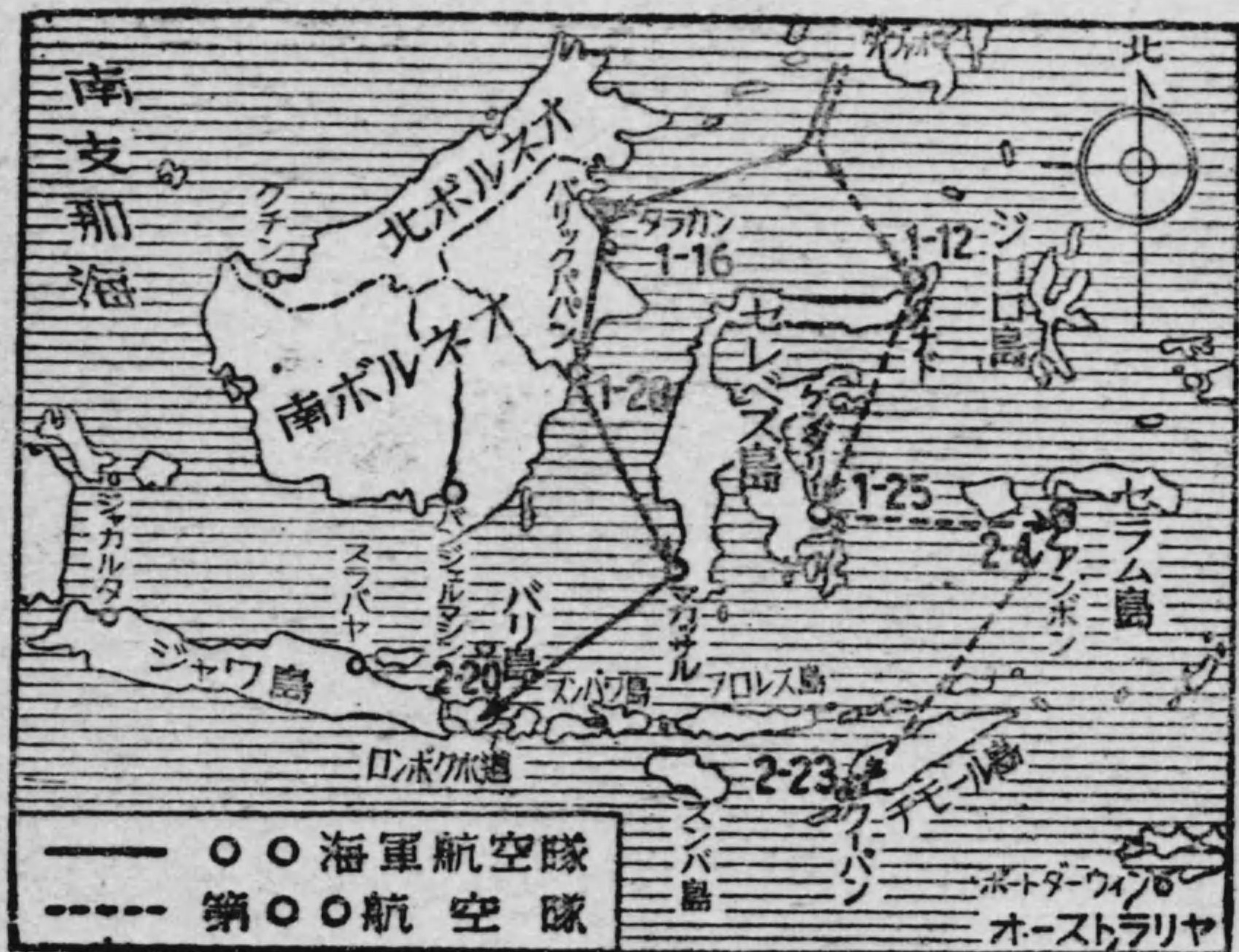
此の間兩航空隊がジャワ島哉定迄に擧げた戦果は次の通りである。

	撃墜	撃破	炎上	計
第〇〇航空隊	八六(内不確實 八)	六五	二五	一七六
〇〇海軍航空隊	六五(内不確實二)	七三	一八	一五六
		(一七、九、一八、海軍省公表)		

開戦前蘭印の航空兵力は約三百五十機であつた。爆撃機、戦闘機が各々約百機。飛行艇が約五十機であつたが、蘭印政府が米英兩政府に手頼つて各種の飛行機を購入してゐたので、米、英兩國のものが混合してゐて、恰も飛行機の展覽會の如き觀を呈してゐた。

しかし、我が航空部隊が蘭印敵航空基地を轉進したあとをみれば明らかな如く、わづか一ヶ月餘りの間にこれら寄せ集められた敵機は殆んど撃滅されてしまつた。

メナド——クーパーン、タラカン——バリ島と蘭印の中央部に對して深く穿貫した進撃路は、ジャワ島と濠洲の飛石連絡路を完全に遮斷した。



メナドからクーパンへ進撃した部隊は、二月二十三日クーパン飛行場に轉進したので、敵が濠洲からジャワ島へ飛行機を補強せんとした計畫は完全に畫餅に歸した。

メナドからクーパンに進撃した此の第〇〇航空隊は更に進んで蘭印に空軍を補強せんとする聯合軍の最前線基地を積極的に攻撃した。

このため蘭印空軍はジャワ島に孤立する結果となつた。

蘭印は、その心臓と頭部とも云ふべきスラバヤ、バタビヤ兩市を防衛

するために空軍を兩都市の周邊に集中しなければならなくなつたが、既に濠洲方面からの空軍補強は不可能となつたので、在蘭印空軍だけで戦はねばならなかつた。

米、英の援助を唯一の力と頼んだ蘭印の愚さが自らの晩鐘となつて凋落の夜を告げるのである。

ボルネオからマツカサルを傳ひバリ島に進出した〇〇海軍航空隊の方は、ボルネオ島ジャワ島の敗殘敵航空兵力を亂潰しに破砕した。

第〇〇航空隊が長槍となつて敵の構えを破ると〇〇海軍航空隊は七首となつて、ジャワ島の脇腹にびたりと構えたのである。

米、濠との連絡を絶たれた時、蘭印の運命は決してゐた。

二月廿日にバリ島へ、また同二十三日にクーパンへそれ〴〵我が海軍航空兵力が進出するや、これに呼應してジャワ島攻略の機は熟した。

間もなく輸送船團を推した我が護衛艦隊がジャワ海に突入したのである。ジャワ海には米、英、蘭の初めての聯合艦隊が集結してゐた。

敵西南太平洋聯合艦隊との決戦を豫想して輸送船團並びに護衛艦隊がジャワ海に突入したのは、既に航空撃滅戦によつて、制空権が我掌中に歸してゐたからであつた。

蘭印は航空撃滅戦に敗れた時、即ち制空権から見放された時、敗北の運命を背負つたのである。蘭印攻略の勝敗を決したのは航空撃滅戦であつた。

蘭印航空撃滅戦で偉彩を放つたものに、我國最初の落下傘部隊の参加があつた。

航空基地の速かな確保が航空撃滅戦の成果に最も重要な關係を持つてゐたので落下傘部隊が出動した。海軍落下傘部隊は、此の目的に對して、肉弾突撃を行つたのであつた。

横須賀鎮守府第〇〇特別陸戦隊は一月十一日メナド攻略戦に参加したが、同陸戦隊こそ落下傘部隊で、實戦に参加した落下傘部隊としては我國最初のものであつた。

一月十一日、海上からもメナド及びケマに對して敵前上陸が行はれてゐたが、海軍落下傘部隊はメナドのラングアン飛行場を速かに獲得確保するために同飛行場に降下した。

メナド攻略は、蘭印攻略の第一矢であつたと同時に、蘭印航空撃滅戦の始まりであつた。

落下傘部隊の活躍が注目を引いたのは今次歐洲戦争以來である。蘭白作戦でドイツ落下傘部隊が和蘭第一線の後方に降下し、橋梁、要衝の獲得と確保に功を建て、ドイツの勝利を早めた。その後も大陸の戦線では方々で使用されたが、海上作戦に使用されたのは地中海のクレタ攻略が始めてであつた。

同作戦ではドイツのグライダー部隊が始めて戦争に参加してゐる。

落下傘部隊は、しばしば活躍したが、それは直に陸上の戦線で、渡洋作戦に利用されたのはクレタ島攻略に續いてメナド攻略戦であつた。而もメナド攻略戦は、渡洋作戦の大規模な點で、クレタ作戦を遙かに凌駕するものであつた。

途中猛烈なスコールを衝き、落下傘部隊員の中には濕氣を心配して傘體を抱いてゐたものさへあつた。スコールを潜り抜けたのちメナド上空は晴天に恵まれた。

附近のメナド富士が端麗な背景を添へる中を、我が國最初の落下傘部隊は、純白の傘體に燦々たる陽光を浴びながら、大空に大輪の花を咲かせて天降つた。

初陣の落下傘部隊は多大の戦果を収めた。着陸迄の間に傘體に八十餘發の被弾を受けた

者があつたが、途中で犠牲になつた者は一人もなかつた。

飛行場を占領した落下傘部隊は、忽ち附近のカカスの街を占領し、翌日はメナド海岸に敵前上陸した部隊との連絡が完成した。

蘭印航空轉進戦の快速調は、このやうに速かにセレベス島に足掛りを得た事に依るものである。

續いて横須賀鎮守府第〇〇特別陸戦隊は二月二十日チモール島クーパンへ第二次降下を敢行した。クーパン攻略の落下傘部隊のめざすところは、クーパン附近に敵前上陸をした陸海軍部隊に呼應してクーパン飛行場を占領確保するにあつた。

二月二十日午前十時四十五分クーパン飛行場の東北十八キロにある牧場に降下した落下傘部隊は、完全に敵の虚を衝いて一發の抵抗も受けず、附近四〇キロの離れた地點にあるババウ部落に進撃、午後一時頃部落の入口で初めて敵と交戦した。

その後、敵は敵前上陸部隊に備へた機械化部隊の一部を移動した落下傘部隊の正面に配備したが、輕裝寡兵の落下傘部隊は克くこれと對戦し、戦車、装甲車計十三臺を分捕り二十

二日未明、遂にクーパン飛行場を占領して任務を達成した。

メナド攻略の横須賀鎮守第〇〇特別陸戦隊及びクーパン攻略の横須賀鎮守府第〇〇特別陸戦隊兩落下傘部隊に對しては同年五月二十七日山本聯合艦隊司令長官から感狀が授與された。

## 二、ジャバ沖海戦

比島の米航空部隊に對し我が海軍航空部隊の撃滅戦が開始せられると、キヤビテ軍港を根據地として同方面に配屬されてゐるトーマス・ハート大將麾下のアメリカ亞細亞艦隊は逸早く同島から脱出した。

甲巡ヒューストンを旗艦とする亞細亞艦隊では強力な帝國海軍に抗し得べくもなかつた。トーマス・ハート大將は比島戦線を専ら潜水艦に任して後方に退いたのである。

米太平洋艦隊主力と英東洋艦隊が緒戦で撃滅されたことは、西太平洋に於ける米、英、

蘭の海上戦線に痛撃を與へた。西太平洋の戦線へ當分補強が望めなくなつたので、同方面の海軍部隊は自力で日本海軍の南進を阻止しなくてはならなくなつた。第一次西南太平洋聯合艦隊はかゝる経緯に促進されて急速に編制された。

米英蘭聯合艦隊の編制に就いては、意見が二つあつた。一つはジャワを中心として集結し我が國が蘭印攻略を開始する時これを阻止せんとする企圖と、他は濠洲迄退却して濠洲を根據とし、適宜機動作戦に移らんとする主張であつた。濠洲戦線説は、トーマス・ハート大將一派の代表する米國の説くところであつたが、蘭印の犠牲に於てなされんとする濠洲戦線説は當然蘭印側の容れるところではなかつた。

比島攻略後、次に開始されるものが蘭印作戦である事は明白であつた。日蘭交渉以來、黒幕として蘭印政府を煽動し遂に蘭印を戦争の渦中に追ひ込んだ米國は、蘭印が陥落せんとする危機に遭遇するや己れの不利を察知して逸早く濠洲の廣大な大陸に逃避せんとしたのである。

だがトーマス・ハート大將は遂に初代の西南太平洋聯合艦隊司令長官に任ぜられ、聯合

國アメリカの代表者として蘭印防衛の責任の一端を擔はされた。新司令官はスラバヤ附近に本部を置いて、全艦隊を指揮した。

かくして最初の米英蘭西南太平洋聯合艦隊はスラバヤを中心としてジャワ海を遊弋したが、その勢力は、蘭印海軍の全部、米亞細亞艦隊の主力、それに濠洲海軍の一部が加はつたものであつた。

註 蘭印海軍、濠洲海軍の當時の勢力は次の如くである。

蘭印海軍

巡洋艦 トロンブ、デ・ロイテル、ジャワ、スマトラ

驅逐艦 約十隻

潜水艦 約二十五隻

練習艦 スラバヤ(五、六四四トン) ヘルトツグ・ヘンドリック(四、三七一トン)

敷設艦

約八隻(うちヤン・ファン・アムステルダム號は三月九日撃沈、ヤンプアン・ブラーケルは二月二十二日六時炎上)

第四章 ジャワ近海海戦

第二篇 西南太平洋撃滅戰

掃海艇 約十隻

高速魚雷艇 砲艦等

濠洲海軍

巡洋艦 オーストラリア、キャンベラ、シドニー、ホバート、パース、アデレード

驅逐艦 バンバイヤ、ベンデター、ボヤージ、ウォータヘン

沿岸護衛艦 ヤラ（一、〇六〇トン）等三隻、

特務艦 約九隻

魚雷艇 約十二隻

亞細亞艦隊はアメリカ艦隊編制の項で既述した。

米英蘭の海軍勢力を糾合した聯合艦隊は一應結成されたが、戦術、艦型、速力、訓練などの異なる海軍を一に合してみても、それらは到底紙上計畫の如き實力を發揮し得ないのは當然であつた。ジャワ沖海戦をはじめスラバヤ、バタビヤ沖海戦にあらはれた如く、實戰に遭遇すると一艦傷つけば一艦逃げる有様で寄木細工のやうな脆弱性を暴露した。

元來米英蘭聯合國の作戦は、これらの海軍力を以て一應日本海軍を阻止し、やがて本國

からの急援を得て態勢を建直す事にあつた。

プリンス・オブ・ウェールズ號の新嘉坡補強が示した如く、アメリカ太平洋艦隊は當然東亞の戦線に出動する筈であつた。而し布哇海戦の一撃は、遂にかゝる補強を不可能ならしめた。アメリカが艦隊再建に狂奔してゐる間に、逸早く我が陸海軍部隊は蘭印に迫つてゐた。

米英聯合艦隊は必死に抵抗を試みたが非力な聯合勢力では狂瀾を既倒に返す術もなかつた。

マカッサル海戦は此の時捏造された史上空然の幽霊海戦である。一月二十五日拂曉、我が陸、海軍協力部隊はボルネオ島バリックパバンに敵前上陸を敢行したがその際輸送船四隻が撃沈された。

蘭印當局はこれを種にしマカッサル海峡の大海戦を捏造したのである。先づ蘭印軍司令部は二十五日マカッサル海峡に於て蘭印潜水艦が我が輸送船團を攻撃し驅逐艦一隻撃沈、巡洋艦、輸送船に損害を與へた旨二十六日午後四時發表した。

同時に米國でも亞細亞艦隊がマカツサル海峡に出撃して輸送船五隻その他一隻を撃沈したと発表した。

これにはじまつた蘭印及びアメリカのデマ放送は遂に六日間続いた、メックス米海相はマカツサル海峡に於ける大海戦は既に第六日目に入つた。とラジオ放送を行ひ、此の間、米、蘭のデマ宣傳によれば多數の我が戦艦、巡洋艦、驅逐艦、輸送船が撃沈され、日本海軍は建國以來未曾有の大敗北を喫したのであつた。

やがてマカツサル海峡に沈没した我が軍艦のラストが傾いて波の上に残骸を暴してゐるなどと見てきたやうなニュース迄が飛び出した。アメリカの宣傳によつて計算すれば比島戦以來マカツサル海戦迄の間に撃沈された我が戦艦は實に二十八隻の多數に及ぶに到つた。

註 當時我が戦艦群が十隻である事は、周知である。アメリカでも政府の發表に對して不信任の聲が高まつた。ありもしない戦艦を遂に二十八隻まで沈めたのは、米、蘭がいかに布鞋

馬來沖の敗戦に苦悶し、更に蘭印、新嘉坡の危機を控へて狼狽を極めてゐたかを示すものであつた。

マカツサルの大勝利が忽ち幽霊の實體を暴露したのはジャバ沖海戦であつた。續いてスラバヤ・パタピア沖海戦に及んで、米、蘭政府は逆に國民の批難さへ浴びるに到つた。

建國以來未曾有の潰滅を喫した筈の日本海軍は、大輸送船團を護衛してジャワ海に堂々姿を現はしたのである。

「日本の軍艦は沈んでも直ぐ浮上る装置を持つてゐるらしい」  
皮肉な米國の議會問答が行はれたのはこの頃であつた。

米蘭聯合艦隊はマツラ海峡に遊弋してゐた。マカツサル海峡には既に我部隊が進出してゐたので、スラバヤ沖ジャワ海には戦氣が漲つてゐた。

米蘭聯合艦隊に對して我が基地航空部隊は決戦を求めて全力をあげ索敵攻撃に當つてゐたが、二月四日午前十一時十五分、カンダアン島南方約三十哩で入佐俊家海軍少佐の率ゐた〇〇海軍航空隊支隊飛行機隊は巡洋艦、驅逐艦數隻を直衝とした米甲巡オーガスタ、蘭

巡ジャバ型等の巡洋艦主力を發見した。

曇り日であつたが割合に雲は高く、攻撃には申し分のない状態であつた。

巡洋艦群は三十餘速節の高速でジグザクに逃走を企てた。十數隻の敵艦が打あける高角砲、高角機銃弾は凄まじく炸裂したが、入佐部隊は部隊長機を先頭に主力の敵巡洋艦目掛けて果敢な突撃を開始した。

旗艦米巡オーガスタには忽ち爆弾が命中した。

濛々たる火炎がのぼり速力が落ちて廻避運動が緩慢になり、やがて大爆發を起して僅か數分の間に沈没した。二番艦蘭巡ジャバ型にも同じく爆弾が命中しオーガスタと同じく火焰をあげつゝ、逃れんとして必死にもがいたが忽ち沈没した。

三番艦のジャバ型も命中弾を受けたが、同艦は傷ついたまゝ落ちのび、他に直衛艦であつた蘭巡トロンプは直撃弾を受けて忽ち沈没した。

この海戦で我が一機は敵弾を受けて壯烈な最後を遂げたが入佐部隊は見事に巡洋艦三隻を葬り、同一隻を撃破した。

ジャワ沖海戦は海軍航空部隊の壓倒的勝利に歸した。基地から長距離を飛んでしかも米蘭聯合艦隊の主力を粉碎した結果、ジャワ海の敵制海權は著るしく動搖した。内海のやうなジャワ海では、制海權は基地航空部隊の制空權には到底抗しかねた。基地航空部隊の行動圏内に含まれてしまふジャワ海のやうな狭い水域では、制海權は制空權の中に包括される。併しかゝる事實も、先の馬來沖海戦並にジャワ沖海戦に於てはじめて強力に實現されたのである。

入佐少佐の指揮した〇〇海軍航空隊支隊飛行機隊に對し後日感狀が授與されたが、米英蘭陣營ではトーマス・ハート大將を罷免して、蘭印海軍のヘルフリツヒ中將を聯合艦隊司令長官に任命した。

ジャワ沖海戦の綜合戦果は次の如くである。

### ○敵側の損害

撃沈　　オーガスタ、ジャバ型、トロンプ

### 第四章 ジャワ近海海戦



撃破 ジャバ型

○我方の損害

飛行機 一機

註 二月六日、同七日の大本營發表、七十七議會に於ける海相の戦況説明、並びに十一月十五日の海軍省公表による。

三、バリ島沖驅逐艦戦

ジャワ近海に於ける彼我水上部隊遭遇戦の前哨戦として、二月二十日未明に於けるバリ島沖海戦が展開された。

既に航空部隊は、セレベス、ボルネオの敵航空基地を粉碎して、我が航空轉進戦は急速度で進行しつつあり、航空部隊によるジャワ沖海戦の凱歌まであがつて、制空權を失なつた蘭印はまさに危局に瀕してゐた。

航空撃滅戦に呼應して、水上に於ける戦機もまた動き、米、英、蘭聯合艦隊と我が水上艦艇との遭遇戦は、避け得ない状態にあつた。四隻の我が驅逐艦は、輸送船を護衛して二月十九日午前零時バリ島近くに投錨、上陸部隊は上陸を開始した。

バリ島とロンボク島の間は、ロンボク水道は蘭印と濠洲を結ぶ重要な水路であつた。

ジャワ近海に戦の前哨線が、ジャワ海の裏門とも言へるロンボク水道で逸早く開始された事は、我がジャワ作戦がジャワ海の敵を包圍殲滅する雄渾な規模を持つてゐたかを想像させる。

上陸は殆んど終つたが、敵の鼻先にあらはれた我が水上部隊に對し、まづ飛行機による敵の反撃がはじまつた。

バリ島シンバランには敵の航空基地があつた。

敵航空兵力が強靱である間は、かゝる出撃は困難であつたが、敵は今ほわづかな敗殘部隊に過ぎない。それでも敵航空基地から眼と鼻の所に現はれた我が水上部隊に對して、日の出から日没迄、敵襲は執拗に何回も繰返された。

蘭印側も真剣であつた。加ふるに我が方は驅逐艦四隻の小部隊だと見て取るや、反撃は執拗を極めた。やがて十九日の夜を迎へるや輕巡二隻、驅逐艦五隻からなる有力な蘭米部隊が出撃してきた。

二十日の午前零時過ぎ、月のない星明りのバリ島沖で、彼我水上部隊は肉迫した。

我が方は輸送船を擁してゐたので、驅逐艦は二隻づつ二組に分れた。一組は輸送船を安全地帯迄避退させる役を擔ひ、他の二隻は敵艦隊に突込んで、決戦せんとしたのである。

我が部隊が、兵力を二に割いたため、彼我勢力の開きは甚だしくなつた。

だが二隻の驅逐艦は肉迫戦によつて突撃を決行せんとした。夜襲に傳統と訓練の自信を持つ我が驅逐艦は、勝利の確信に燃えてゐた。海光はあつたが、幸ひ月はない。

敵水雷戦隊を右舷に迎へた我が驅逐艦は午前零時四十五分砲戦を展開した。彼我相對峙して堂々と交戦した結果、敵の驅逐艦三隻は命中弾をうけて沈没した。敵巡洋艦は我が驅逐艦の猛撃にたじろいで海戦に加はらなかつた。

三時間近くの間七回の合戦が繰返された。

午前三時、敵巡洋艦を求めてゐた我が驅逐艦は遂に遭遇した。驅逐艦は必殺撃沈の機を狙つて、敵弾をくぐりながらじりじり肉迫した。夜陰にかくれて矢のやうに敵艦に迫る驅逐艦は、遂に機銃弾を直接浴びる至近距離に迄迫つた。敵は我が魚雷を避け得べくもなく、大損害を蒙つて周章して逃亡したが、我が方もまた機關部に敵弾をうけて犠牲者も出た。

一方輸送船を護衛した他の二隻の驅逐艦も午前三時四十八分敵巡洋艦、驅逐艦と各二隻に遭遇した。前哨として突進んでくる敵驅逐艦に對して齊射が始まつた。敵驅逐艦（二隻とも米艦）は忽ち轟沈した。これを眺めた敵巡洋艦（デロイテル、ジャバ）は、煙幕をはつて逃走を企てたが、驅逐艦はこれを追つて砲撃を命中させ、巡洋艦は火焰をあげ乍ら辛うじて夜陰の彼方に逃げ延びた。

二十日の夜明けと共に、機關部を射られた我が驅逐艦は、戦場の附近に浮んでゐた。機關部の故障で行動し得なくなつたのである。

この時傷ついた驅逐艦は次の報告を行つた。

『我れ單艦にて哨戒す』

恰もロンボク水道の真中であつた。敵米、英、蘭聯合艦隊が、濠洲へ落ちんとすれば、必らず通過しなければならぬ海上の關所である。

『我れ哨戒す』

動けなくなつた驅逐艦は、この水道で哨戒しながら動けぬながらも砲戦によつて敵を撃滅せんとしたのである。

此の報告は、當時、水上部隊の血をわかした。機關部損傷で動けぬといふ悲鳴をあげるかはりに動かぬまゝに海峡の見張りをせんとする烈々たる氣魄は第一戰將兵の氣持を端的に表現した名文句として残るものであらう。

二十日の朝を迎へ、敵機の來襲は前日に引續いた。傷つき動けぬ驅逐艦は、好い目標であつた。

僚艦が傷ついた驅逐艦に近づいて曳航せんとした。敵機は反復爆撃を繰返し、苦心の末成功した曳索も切られたが、敵機の追躡の下で僚艦は悠々曳索を掛け直した。

かつてダンケルクから英軍が逃走する時、襲ひかゝる數百の獨機の下で、英驅逐艦が悠々岸壁に横づけになつて任務を果した事實に勝る驅逐艦の奮戦記録である。  
傷ついた驅逐艦は、見事基地に曳航された、バリ島沖海戦の戦果を綜合すれば次の通りである。

### 敵の損害

撃沈 驅逐艦 四 (蘭國三、米國一)  
大破 巡洋艦 二 (デロイテル・ジャバ)  
驅逐艦 一 (米)

### 我方の損害

損傷 驅逐艦 一隻

註 二月二十一日同二十七日の大本營發表(二月十五日海軍省公表)による。

#### 四、スラバヤ沖、バタビヤ沖海戦

ジャワ海戦後約三週間を経て二月二十七日から三月一日にかけスラバヤ沖、バタビヤ沖海戦が勃發した。場所こそ異なるが二つの海戦は我が上陸部隊を阻止せんとして出撃した敵艦隊と我が護衛艦隊との間に闘はれた海戦であつて、一つに綜合され得るものである。

米英蘭西南太平洋聯合艦隊は、ジャワ沖海戦から此のスラバヤ、バタビヤ沖海戦を通じて文字通り潰滅してしまつた。

米英蘭戦線の初めての聯合艦隊であつただけに、その影響は大きかつた。後日ソロモン附近の海戦にアメリカが全力を傾注せざるを得なくなつたのも、聯合陣營の不信の聲にわき立てられた形跡が濃厚に看取される。

二月末、我が部隊はジャワ島に强行上陸を敢行せんとしたので、敵聯合艦隊と我護衛艦隊との間に海戦が勃發した。

海戦は敵の海岸から程遠からぬ場所で行はれた。スラバヤ海戦の如きは、白晝スラバヤ沖百漥の近海で展開されてゐる。

大輸送船團による敵前上陸と、護衛艦隊による敵艦隊との決戦が同時に行はれたのは、既に敵陸上航空兵力が潰滅してゐた結果によるものであつた。

新嘉坡陥落後、我が鉾先がジャワ島に向ふ事は明らかであつたので、米、英、蘭聯合艦隊はこれをジャワ島附近に邀撃せんとした。これに對し我が部隊は真正面から堂々とジャワ島攻略を開始した。

スラバヤ・バタビヤ沖海戦は、大體四つの戦闘から成つてゐる。

第一回 二月二十七日夕刻、

第二回 同 二十八日午前一時頃

第三回 三月一日午前一時頃

第四回 同日午前十一時頃

更に三月二日からは追撃戦に移つてゐる。

米、英、蘭聯合艦隊はスラバヤ、バタビヤ港に蟄伏したまゝであつた。ジャワ沖海戦でジャワ海制海権が蘭印の手から、離れてゐる事を實證されて以來、敵聯合艦隊は、港の奥深くに潜んだまゝ外洋に出る事を避けてゐたので、航空撃滅戦の進捗に伴なつて、ジャワ島攻略の機熟するや、我軍は敵聯合艦隊を尻目にジャワ島敵前上陸を敢行せんとした。

陸軍部隊を乗せた大輸送船團と、これを護衛する我が艦隊が、スラバヤの北方パウエアン島附近に進出したのは二月二十七日の午後であつた。

スラバヤ港に敵艦隊のゐる事を、熟知しての行動である。同日午後四時頃、我が大部隊はパウエアン島とスラバヤの略中程迄に進んでゐた。敵艦隊を鼻先へ我が輸送船團の出撃である。

ヘルフリツヒ中將は斷然これを邀撃せんとした。ジャワ海に日本軍を引つけ決戦を主張してゐた蘭印に取つては、まさに戰機到来であつた。

ドールマン少將の坐乗した蘭巡デ・ロイテルを旗艦として、エクゼター、ヒューストン、パース、ジャバの五隻の巡洋艦が、エレクトラ、ジュピター、エンカウンター、コルテナ

ーエルの四驅逐艦を引具して堂々とスラバヤ港を錨拔した。

折柄ジャワ海にはスコールの雨足が劇しかつた。一降りさつと海面を撃つて、霽れたと思ふと、次の雨雲が現はれてゐた。

我が護衛艦隊は巡洋戦隊、水雷戦隊から成つてゐた。彼我相撃つには申分ない。たゞ我が方は、數に於て劣りまた大輸送船團を連れてゐる不利な條件にあつた。

艦隊同志の決戦は、大東亞戰爭勃發以來初めてである。

午後五時、我が哨戒機は逸早く敵艦隊を發見した。輸送船團を安全に退避させた護衛艦隊は敵艦隊を求めて全速力で迫つた、彼我の距離は刻々つまつて、午後六時遂に砲門が切られた。

既に夜の氣配が、彼の谷間に降りんとしてゐた。

波濤を蹴つて進む艦隊の齊射は、忽ち幾十の水柱をジャワ海に卷起した。水柱をくぐつて驅逐艦は敵巡洋艦目がけ飛燕の如く肉迫してゐた。敵の驅逐艦もまた突撃してきた、さつと迫る距離で全砲門が火を吐いた。

エクゼターが先づ機關室に命中弾を受けて濛々たる火焰をあげた。旗艦デ・ロイテルもまた忽ち命中弾を受けた。コルテナーエルは正確な致命弾を浴びて、火焰をあげたかと思ふや海底に没し去つた。

機關室に損傷をうけたエクゼターは早くも艦列を離れた。敵艦隊は動揺した。

三番艦ヒューストン以下は健在であつたので愈々これに攻撃が集中される時がきた。

夕闇がいつの間にか海面を匍つてゐた。敵艦は、我が艦隊の周圍に相變らず凄まじい水柱をあげてゐる。此の時我が駆逐艦一隻も傷ついてゐた。肉迫した時甲板に敵弾を受けてゐたのである。蒸氣が漏出して白煙を噴き、また敵弾のため故障を起して砲塔の廻轉が利かなくなつた。これをみた乗員は白鉢巻で甲板に飛出した。戦傷者も痛みを忘れて砲門を押しした。鈴成りの人手で動かされた砲塔は、再び敵艦へ砲火を送た。

凄まじい闘志にヒューストンが先づ壓せられた。濛々たる煙幕を張りながら、パース以下と共にぐるりと向きを變へて遁走したのである。夜が迫つてゐた。間にかくれて米、英、蘭聯合艦隊は惨々の體でスラバヤ港に退却した。

我方の損害は驅逐艦一隻のわづかな被害に過ぎなかつた。

初の合戦に敵艦隊を一蹴した我が艦隊は、船團を擁して、再びジャワ島目指し堂々と進撃した。

時折、雲間を破つて煌々たる明月があつた。月光にぬれて、哨煙收まつたジャワ海を進む大船團は、繪のやうに見事であつた。海波も聲をひそめて、艦首に碎ける銀波が、やがて白い航跡を幾つとなく曳いてゐた。

大船團は西南に進んで、レンバン沖にかゝつた。

晝海の圍ひでスラバヤ外港タンジョンプリオクに逃げ込んだ米甲巡ヒューストン・濠乙巡パースの兩巡洋艦は、夜のうちにジャワ海を脱出せんとした。二巡洋艦はスンダ海峡の突破を企圖した。

敵聯合艦隊は、此の時既に四分五裂の大動搖を來してゐた。ジャワ沖海戦、バリ島沖海戦、スラバヤ沖の一戦で米英蘭聯合勢力の弱體を見せつけられた米アジア艦隊は、かねて濠洲を足場にした主張を再びこゝで固執したものゝやうである。スラバヤから濠洲



への最端コース、ロンボク水道の通過は既にバリ島沖海戦の示すとほり、安全性を喪失してゐる。迂回にはなるがスンダ海峡の通過が最も確實であつた。

ヒューストン、パースがスンダ海峡脱出を企圖してタンジョンプリオク港を抜錨した顛末は、後に英海軍省が發表してゐる。米、英は傷ついた蘭印海軍を見捨て、逸早く退却を開始したのであつた。

英巡エクゼターは機關部の故障修理に一兩日を要したので、ヒュース

トン、パースが先づ逃れんとした。蘭巡デ・ロイテル、ジャバがこれを見送つて、ジャワ島北方海上を一路西進するうち、レンバン北方十二哩の海上で、再び南下する我が艦隊にバッタリ遭遇した。まさに二十八日の曆を迎へんとする頃であつた。

夜戦になれば、敵は多年獨特の猛訓練に培はれた我が艦隊に抗し得べくもなかつた。晝間に劣らぬ猛烈な砲撃戦に火蓋が切られて、彼我の砲弾は劇しく入交ひ、激闘はしばらく繰返された。夜陰を貫く閃火は海波に映え、今次戦争最初の規模を持つ夜戦が茲にはじまつた。

蘭印艦隊は勇敢に抗戦した。既に濠洲に遁れんとするヒューストン以下を傍らにして、ドールマン提督は玉碎を決意したのかも知れない。

折柄一瞬、驟雨は提督の頬に濡れて、からくも數百年長らへた和蘭海軍に今最後の涙を送るかの如くである。

二十八日午前一時、果敢な砲雷撃をうけて火焰に包まれた旗艦デ・ロイテルは、火柱を噴き上げたとみるまに大爆發を起して沈没した。同じ頃ジャバもまた火焰をあげて南海に

没し、残るヒューストン、パースもまた命中弾を受けたが既に蘭印艦隊主力は潰滅した状況を察知するやまたもヒューストン、パースは戦場を捨て、遁走した。

此の夜戦で英驅逐艦ジュピターが後刻撃沈された。

やがて二十八日の夜明けを迎へた。南海の空は明るく晴れて、夜來の戦場には熱帯の夏が訪れた。

傷ついたヒューストン、パースは午前七時再びタンジョンプリオク港に引歸した。

再度にわたる交戦によつて、敵聯合艦隊のうち既に蘭印艦隊は潰滅した。残るエクゼター、ヒューストン、パースは何れも損傷をうけた。ジャワ島附近に我が輸送船団が出動してゐたが、敗れた敵艦隊はもはや堂々の決戦を企圖する勇氣はくじけた米、英敗殘艦隊は、再びスンダ海峽を突破して濠洲へ落ちんとした。

我が部隊も上陸をのぼして終日索敵と待機に暮した。スラバヤ方面には、エクゼター、ヒューストン、パース等がなほ残存してゐる。

止めを刺すのはこれからであつた。

二十八日の晝間を見送つたヒューストン、パースは應急修理の上驅逐艦を随伴して、口没を利シタンジョンプリオクを抜錨した。再びスンダ海峽へ。だが遂にアジア艦隊ヒューストンにも最後の時がきた。

三月一日午前零時頃、バタバヤ方面に敵前上陸せんとした陸軍部隊は、バンタムに進入して上陸に成功してゐた。

パンジャン、バビー等の島影が、中央に黝々と横たはるバンタム灣を壓して我が輸送船団の大部隊が入泊した。

時折冲天高く煌々の満月が輝やいた。緩く彎曲したバンタム灣には小波がかすかに揺れて、躍る銀波に遠征の感懐が盡きない。

ジャワ島上陸の主力部隊は、抵抗らしい抵抗もなく既に上陸は着々進行してゐた。

其の時、パンジャン島の島影からバンタム灣に二つの黑影が迫つた。先頭がパース、二番艦がヒューストン、スンダ海峽に出んとしたがそれも危険とみるや、上陸を開始した我が輸送船団に斬込まんとしたのであつた。



輸送船團の護衛艦隊は、逸早く敵艦を発見した。けれ共我が主力との間には距離があつた。

パース、ヒューストンは護衛艦隊を知つてか、知らずしてか、いきなり輸送船團に挑みかゝらんとした。

これがパース、ヒューストンの運の盡きとなつた。敵艦のあげる水柱が、徒にバンタム灣の静かな海面を亂す頃、必殺の意氣も凄まじく我が護衛部隊は、殲滅の鐵環をじりくせばめて行つた。パース、ヒューストンはそれと知るや、またも逃亡をはかつて反轉し、もとの進路を逆に退却せんとした。だが、殲滅網は見事これに致命的魚雷を叩きつけたのである。パースは傷つき、ヒューストンはよろめいた。

退路も遮断されたと知つた時、敵艦は死物狂ひでバンタム灣の外に逃避せんとした。

今こそ止を刺さんと我が護衛部隊はまつしぐらに敵へ迫つて行く。青い光赤い光が敵艦から發射される。照明弾がゆらくと大空に月光と燭光を競ふ。パースもヒューストンもいまや死力を傾けてゐる。狂つたやうに砲門を開いて、水柱は我が護衛部隊の附近に立つ

たが、傷ついて手許の狂つた敵艦の射つ弾は命中しない。

我が部隊は矢のやうに敵の懷ろに飛び込んだ。やがてばつと砲門が開いたとみるや忽ちパースの甲板に灼熱の火焰が躍りあがつた。

射つ、當る、火焰が擴がる、一發の無駄もなく、さながら巧みに仕組まれた海戦の演習を見るやうに、夜の海上に凄まじい光景が展開された。火焰があがり、やがてパースは大爆發を起した。大きな焰を噴きあげたと思ふと、そのままづぶ／＼海中に没し去つたのである。

ヒューストンはこれを眺めていよく最後の近きを知つた。アメリカ亞細亞艦隊の旗艦も、いまや手足を喪失して自らもまた手負ひとなつてゐた。

我が護衛部隊めがけてヒューストンの曳光弾が火箭のやうに海上低く飛んで来る。主砲から機關銃に到るまで、火力の總てを動員したヒューストンの最後は凄まじかつた。

併し最初の一撃によつて、魚雷の致命傷を受けたヒューストンは、艦體がぐらく／＼して

か、懸命の射撃にもかゝはらず、弾丸はあらゆる方向に徒に水柱を數へるばかりである。そしてヒューストンにもまた火焰、爆發、沈没の最後がきた。

パースの撃沈よりは一時間程遅れてゐた。

敵も此の一戦は死物狂ひで戦つた。パース、ヒューストンの外に魚雷艇をも繰り出して、我が輸送船團の中には少し傷つくものがあつた。

沖では敵巡洋艦を撃滅すべく砲聲は殷々として海面にひびき、バンタム灣では敵魚雷艇が飛び出し、その間中天の満月を浴びて、我が敵前上陸はなほも續いてゐる。岸に近く、閃々たる砲火を背景に、一幅に盛られた此の夜戦は、満月の下鮮やかな戦争畫の構想そのままであつた。

翌日、我が護衛部隊は更に敵の驅逐艦を發見してこれも撃沈した。

バンタム灣に上陸した陸軍部隊はジャワ島攻略の主力部隊であつた。

スラバヤ方面に向ふ陸軍部隊を護衛した水上艦艇も、一日午前十一時、遂にクラガン北方で敵殘存艦艇を捕捉した。

初の手合せで傷を負はして逃がしたエクゼターである。二十七日來スラバヤで損傷箇所を修理してゐたが、驅逐艦エンカウンター、ポールジョンズ、ホプキンス、ポーブ等と共に同港を出港した。

正午近くエクゼター目がけて必殺の攻撃が開始された。敵の交戦も熾烈である。

今度こそは打洩らさじと我艦隊の一部は逸早くエクゼターの退路に立塞がつた。エクゼターは煙幕をはりながら必死の抵抗を續けた。

エクゼターは今次世界戦に既に輝々たる武勳を戦史に残してゐた。

一九三九年末、南米モンテビデオ沖でドイツの一萬噸戰艦グラフ・シュペー號を捕捉、遂に自没せしめるに到つた赫々たる戦歴がそれである。

だが今や砲塔、機關室に我が命中弾をうけて速力は落ち、半身不隨になつた。だがなほ力をしぼつて應戦してゐる所へ、やがて我が驅逐艦が矢のやうに突込んで必殺の魚雷を叩きつけるや、左に傾きながら遂に艦尾から沈没した。

驅逐艦エンカウンターもまた捕捉網に押へられて撃沈された。東に急いで逃走したポー

ブは我が駆逐艦等の追撃をうけて止めを刺された。

沈んだ艦を捨て、救命艇に乗った敵乗員の姿が、波間の方々に漂った。

三月二日からは敵敗残聯合艦隊に對し掃蕩戦がはじまつた。既に二十七日から開始された海戦で、敵の大部分は撃滅されたが、なほ生きのびた敵艦は、濠洲を指して一散に退却してゐた。だが、敵艦を一艦も逃さじと捕捉殲滅網を張りめぐらした我が海軍は、既にジャワ島南岸の印度洋に進出してゐた。

二日午後八時、美しい月光を浴びながら全速力で東進する一隻の駆逐艦がジャワ島チラチャップ沖で我が部隊に捕へられた。

英駆逐艦ストロングホルドである。

西南太平洋聯合艦隊の徹底的な潰滅振りを物語るやうに、駆逐艦一隻の哀れな濠洲落ちである。海軍の覇者を以て過去の歴史を貫ぬいた英國海軍の、哀れを極めた姿であつた。ストロングホルドは正確な砲撃に一たまりもなく、眞晝のやうな月光の下に沈んで行つた。

それから二時間後、米乙巡マールヘッドが聲をひそめて夜逃げする所を再び捕捉された。

探照燈が照射されて、一斉射、二斉射……初弾から艦橋に命中して、マールヘッドはわづか七分足らずで撃沈された。

三日の夜には米砲艦アセヴィルが鎧袖一觸葬られた。四日朝には濠洲砲艦スループ艦ヤラが哨戒艇と共に撃沈された。五日には兵學校生徒二百五十名を乗せて濠洲に向ひつゝゐつた和蘭武裝商船が警戒網にかゝり、逸早く白旗を掲げた。

一方、三月一日、スラバヤ、パタビヤ兩方面から上陸した陸軍部隊は、破竹の勢ひを以て敵要衝を攻略し、敵前上陸から旬日を出ぬ短期間の交戦の、ち蘭印軍は三月九日無條件降伏をした。

蘭印がかくの如く速かに降伏したのは、ジャワ島が米英との連絡を遮断されて孤立したためであつた。

既に蘭印航空部隊は一月から二月にかけて殆んど撃滅され、蘭印防衛の西南太平洋聯合

艦隊もまた數次の海戦に於て殆んど全部海底に没し去つた。

帝國海軍部隊は、スラバヤ、バタビア方面上陸陸軍部隊の護衛艦ばかりでなく、蘭印の外側印度洋に迄進出してゐて、ジャワ島包圍の鐵環は完全であつた。

またジャワ海の通用門スンダ海峽、ロンボク水道も逸早く我が手に押えられてゐたので、東西二百五十哩のジャワ海に蠢動する敵艦隊は袋の中の鼠とならざるを得なかつた。

三月一日から八日にかけて、即ちジャワ敵前上陸から陥落までの間にジャワ島周邊並にジャワ海から印度洋に脱出せんとしたもの或はジャワ島を救援せんとして航行中の敵艦等は片端から撃沈破されて總計五十二隻、二十一萬噸の多數に達してゐる。

スラバヤ・バタビア沖海戦に於ける綜合戦果は次の如くである

△敵側の損害

撃沈

デ・ロイテル、ジャバ——蘭巡

ヒューストン、マールヘッド——米巡

エクゼター——英巡

パース——濠巡

驅逐艦 一〇隻

潜水艦 七隻

砲艦 アセヴィル(米)

ヤラ (濠)

掃海艇 二隻

△我方の損害

掃海艇 一 沈没

驅逐艦 一 小破

註 二月二十八日、三月一日、二日、三日、五日、同十一日の大本營發表による。

## 第五章 印度洋作戰

### 一、ベンガル灣強襲

米英蘭が初の聯合艦隊を編成して、我が海軍をジャワ海に邀撃せんとした作戰は、ものゝ見事に失敗した。作戰の失敗ばかりでなく逆に我が包圍殲滅戰によつて、東亞の海域に蠢動してゐた敵艦隊は、殆んど餘すところなく南海の底に葬り去られた。

馬來沖に英東洋艦隊を撃滅し、更にジャワ近海々戰で敵聯合艦隊を覆滅して西南太平洋撃滅戰の第一段階を劃した我が海軍は、悠々と次の印度洋作戰に移つた。

作戰はまさに着々たる進捗と、悠然たる歩武を示してゐる。馬來沖、ジャワ海、印度洋へと發展する作戰の過程は、盤面に布かれる名人の布石ふしながらである。

アメリカは未だ布哇海戰後の再建が未完成で、僅に航空母艦を中心とする機動部隊でゲ

リラ戰を繰返すに過ぎず、我が陸海協同作戰もジャワ攻略に伴なつて一應整備されねばならなかつたので、次の作戰は當然印度洋に向けられる運命にあつた。

二月下旬、既に陸軍部隊は泰國境からビルマに突入した。これに呼應して海軍部隊はベンガル灣の英艦隊を撃滅する事となつた。

ベンガル灣はビルマに對する最も強力な英國の補給路であつた。馬來沖に敗れた後の英國は、セイロン島を中心として印度洋の防衛に當つてゐたが、その勢力は、大體戰前の支那艦隊、東印度艦隊が中心となつた。

註、一、第二次歐洲戰勃發前に於ける勢力は次の如くである。

#### 支那艦隊

巡洋艦 ケント、ドーセットシャー、パーミンガム、サフォーク、コンウオール

航空母艦 イーグル（大東亞戰爭當時はジブラルタル方面に廻航さる）

驅逐艦 一四隻

潜水艦 一五隻

#### 第五章 印度洋作戰

第二篇 西南太平洋撃滅戦

揚子江艦隊 河用砲艦 一八隻

其他

東 印 度

巡 洋 艦 マンチエスター、グロセスター、リバプール

砲 艦 六隻

南アフリカ艦隊

巡 洋 艦 ネブチユーン、デボンシャー

砲 艦 四隻

2、大東亞戦争開戦前に於ては此の勢力は大體次の如く増強された

新嘉坡並に印度洋方面

巡 洋 艦 一二隻

驅 逐 艦 一一隻

潜 水 艦 約一五隻

當時印度洋は、イラン、イラク、蘇聯の南方戦線、或はアフリカ戦線への重要な補給路であつた。地中海でも、一九四二年に入つてから樞軸の勢力が強大となつて、制海權が英國の掌中から消えかゝつてゐたので、印度洋を経由する事が南阿戦線への最も安全な後方通路であつた。

英國は寶庫印度防衛のためばかりでなく、各地の共同戦線を維持するためにも、印度洋を死守しなければならなかつた。従つて印度洋防衛の最前線セイロン島海軍基地は、新嘉坡喪失後の英國に取つては、最も大切な軍事據點であつた。即ちビルマとベンガル灣が日英戦線の第一線となつたのである。

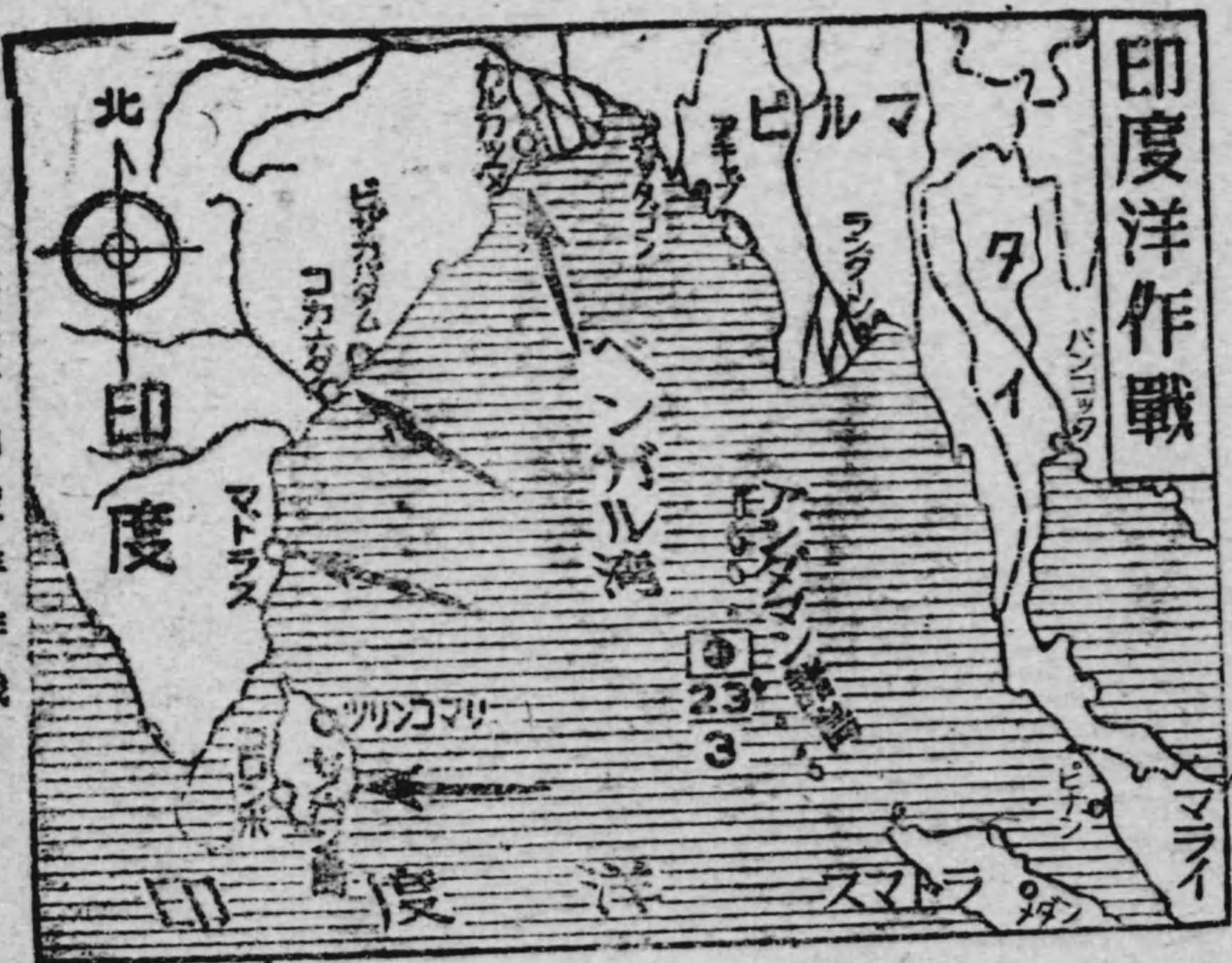
海軍部隊は、ジャワ作戦の頃から、早くもベンガル灣に進出してゐて、ジャワ島陥落直後即ち三月十六日迄に既にラングーン、コロンボ、マドラス方面で敵船舶十一隻（八萬一千噸餘）を撃沈し、海上補給路を遮断してゐたが、三月二十二日には早くもベンガル灣内の要衝南アングマン島に陸、海軍部隊が敵前上陸を行つて、印度洋作戦は俄然熱氣を帯びてきた。

アングマン島は、ベンガル灣の關所ともいふべきで、同島のブレア港は灣が深く、英國海軍がこゝを死守してわが進撃を阻むなら、印度洋に出撃せんとする艦艇は、所詮この要衝に悩まされたであつたらう。いはゞベンガル灣の入口ともいふべきアングマン諸島が陥落した事はベンガル灣から印度洋への進撃路の扉が開いたやうなものであつた。

アングマン諸島に對する攻略が終ると續いてベンガル灣に對する強襲が敢行された。同強襲に参加した部隊は、布哇海戦に緒戦の凱歌をあげた航空母艦を中心とする部隊であつた。同部隊はその後ビスマルク群島を衝き、三度鋭鋒をベンガル灣に現はしたのである。

太平洋の洋心布哇群島を衝いたのが十二月八日、翌十七年一月中旬にはビスマルク群島を叩き、更に四月五日にはベンガル灣を襲つて航程まさに二萬哩を悠々突破するであらう。

ベンガル灣強襲部隊はセイロン、カルカッタ間の海上輸送路を徹底的に撃滅せんがため潜水艦をも随伴した。またそのために強襲部隊は二つに分れた。



第五章 印度洋作戦

一つはセイロン島のコロンボ、ツリンコマリを攻撃せんとし、他はカルカッタ、マドラス間を衝かんとした。カルカッタ、マドラス間を狙ふ部隊は更に三つの方面別に分れてゐた。カルカッタ方面を衝く北方部隊。コカナダ、ビザカパダム方面を衝く中央部隊。マドラスを衝く南方部隊。セイロン島を衝かんとする部隊は、セイロン島の南方からコロンボ

目指して一路北上した。

五日朝コロンボを空襲する航空部隊は、續々母艦を發進して午前十一時過ぎ目指すコロンボ上空に殺到した。

コロンボは新嘉坡陥落後のイギリスの第一線海軍基地であつたゞけけにハリケーン、スピットファイヤー、デファイアント等の優秀な第一線戦闘機が揃つてゐたので、新嘉坡空襲以來の壯烈な空中戦闘が展開し、敵の防禦砲火もまた熾烈を極めたが、我が航空部隊は實戦によつて敵機を撃墜すると共に、爆撃隊は敵飛行場に果敢な爆撃を敢行し、敵格納庫、軍事施設などに大損害を與へた。

一方港内の敵船に對しても猛烈な爆撃が敢行された。

だが敵船は、大部分逸早く遁走したあとであつた。敵は我強襲を恐れて早くも巡洋艦等を避退させてゐた。

だが此の日の午後六時過ぎ、セイロン島を脱出して一路アフリカ方面に遁走せんとした英甲巡ドーセットシャー、コンウォール兩艦が、見事にわが包圍殲滅網に引掛つた。

兩艦は全速力でセイロン島南々西約三百五十哩の所を、西方に向つて一路退却中であつたが、兩巡洋艦發見の報に再度母艦を發進した我が航空部隊は、逃げ行く英甲巡の背後から猛鷲の如く挑みかゝつた。甲巡はヂクザク海上をのた打つて、あらん限りの高角砲を射上げた。

眞珠灣以來、歴戦の誇りを持つ航空部隊は英甲巡を逃す筈はなかつた。

命中弾を浴びて白煙を高く噴き揚げ乍ら、二甲巡は印度洋の底に没し去つたのである。

翌六日はベンガル灣の商船狩りが敢行された。

北方、中央、南方と三方面から出撃した我が部隊は、通商線上の敵船を一隻も打洩らさじと夜明けと共に活躍を開始した。

曉の海上で先づ遭遇したのはカルカッタを發して一路南下する大輸送船團であつた。

中には米國旗を掲げてゐるものもある。

砲撃を受けるとわづか數分で火焰に包まれたものもあつた。カルカッタから油を輸送中のものがあつたからである。また三十發の被弾をうけて沈まず、我が驅逐艦から魚雷の止



めを刺されて没したのもあつた。

午前九時（日本時間）から三時間の間に敵の通商路は大混乱を呈した。

またビザカバダム、コカナダに對しても奇襲が加へられて、港内の船舶軍事施設に大損害を與へた。三時間にわたる徹底的な通商破壊戦の結果、此の日ベンガル灣上には遂に敵影をとどめなくなつた。

通商路破壊戦で各部隊の擧げた戦果は

北方部隊が八隻（内二隻は飛行機）

中央部隊が同じく八隻（内三隻は飛行機）

南方部隊が五隻（内一隻は飛行機）

一大旋風の如くベンガル灣全帯を衝いた強襲によつて五、六日の二日間にかゝはらず英國の損害は甚大であつた。

續いて九日セイロン島ツリンコマリ軍港強襲が行はれた。

午後十一時（日本時間）ツリンコマリ上空に達した我が編隊は、港内の敵艦目かけて急

降下爆撃を開始した。

同港に蟄伏してゐた乙巡リアンダーが先づ大破した。續いて三隻の商船が火焰をあげて撃沈された。第一線機スオードフィッシュが此の日も熾烈に反撃したが、敵機は相次で撃墜され、椰子の木蔭の軍事施設も粉碎された。

ツリンコマリ空襲に引續いてベンガル灣強襲の棹尾を飾る戦鬪が勃發した。

午後三時頃、セイロン島の東方約十哩の洋上で、航空母艦ハーミスが逃げ行く所を發見されたのである。

ハーミス號（一〇、八五〇トン）は、英國が航空母艦として建造した最初のもので、九日ツリンコマリ軍港にゐた。

同日朝八時（インド時間）同軍港を出港したがわづかに驅逐艦一隻を随伴した模様から想像してもハーミスは戦ひを挑むためでなくすでにこの時、英國が誇り續けてきた「見敵必戦」の戦意を喪失してゐたことが明瞭である。

セイロン島方面に残されてゐたコンウオール、ドーセットシャー兩甲級巡洋艦が、すで

に五日の朝撃沈されてゐたゝめに、ハーミス號はわづか驅逐艦しか随伴出来なかつたのであらうが、英國海軍の弱體化は覆ふべくもない。

ハーミス號は必死に高角砲を射ちあげ、海上をのた打ち廻つて、急撤回しながら逃亡せんとした。

ハーミス號を狙つたのは我が航空母艦から發した航空兵力である。即ち、航空母艦の相四ツの取組みである。

特有の積雲が深く、太陽の直射はなかつたがまた波もなく、まるで湖水のやうな靜寧の中に遙かセイロン島の山並が、瘤をならべたやうな突凡の背景を添へてゐた。

ハーミスは猛烈な彈幕にかくれんとしたが、巨彈を抱いたわが海軍機は、正確無比な急降下爆撃でハーミスの甲板に殺到した。

忽ち甲板からは濛々たる煙が立ち昇つて、やがて艦橋の前部からも炎をあげ出した。

うねりはあるが、油をながしたやうな洋上に泡立つ航跡をくつきり残りながら、幾度目かの急撤回で、今しも艦首を南に、セイロンの島影に並行した時、ついと舞ひ降りた急降

下爆撃機の巨彈は、見事艦橋附近に濛々たるとゞめの火災を促した。

二十五ノットの速力は、がつくり停止して、前部左舷から見見る傾斜し、艦首の前部甲板が先づ海中に突つ込み、左舷に六十度ばかり、殆ど横倒れのやうな恰好で、そのまゝやぐらを最後に、すぶすぶ没し去つた。

ハーミス撃沈は、急降下爆撃によるもので、空中魚雷による雷撃は行はれなかつた。これは英國を一層驚愕させた。

マレー沖海戦で、イギリスの不沈戦艦プリンス・オブ・ウェールズを撃沈した時は、幾つかの空中魚雷が致命傷であつた。ハーミスは一發の雷撃も被らず、急降下爆撃にのみよつて撃沈された。

時に印度時間の午前十一時、文字通り白晝の決戦であつた。

ベンガル灣強襲作戦は、敵艦隊の撃滅並に通商路の破壊を徹底的に行つたものであつた。

航空母艦、水上艦艇、潜水艦の渾然たる三位一體の協同は見事に奏功した。五日間にわ

たつて我が強襲の嵐がベンガル灣に連吹したが、英國海軍はひたすら遁走するばかりであつた。

世界一を誇つた英海軍は、茲に凋落の哀れな姿を曝したのである。ベンガル灣の嵐が英に報告された時、再び馬來敗戦の時のやうに英國の輿論はチャーチル首相を責めた。此の時、チャーチル首相が議會で行つた答辯は次のやうに惨めなものであつた。

『印度洋方面にあれ以上の艦隊配量をする餘裕がなかつた』

これが英國の寶庫防衛に當る英國海軍の姿であつた。

印度洋方面艦隊司令長官ジョフレ・レイトン中將は十三日罷免され、西地中海艦隊長官として評判の高いジエームス・サマビル大將が後任に補せられた。英國もベンガル灣の敗北をはつきり認められた。

ベンガル灣強襲は、また我が海軍が英國空軍に挑戦したものと云へる。スピットファイヤ、ハリケーン、デファイアント戦闘機、ビービーワイ飛行艇、スオードフィッシュ、アルパコア雷機等英國第一流飛行機と我が航空母艦搭載機が戦つた結果、損害は百二十機對十

七機であつた。英國海軍と本格的に戦ふ機會に餘り恵まれぬ帝國としては、尊い經驗であつた。

ベンガル灣強襲の戦果を綜合すれば次の如くである。

○英國側の損害

撃 沈 空母一隻 甲巡二隻 驅逐艦一隻 船舶三十五隻  
 撃 破 乙巡一隻 船舶二四隻  
 撃 陸炎上せる敵機 百二十機

○我方の損害

飛行機 十七機  
 (艦艇の損傷なし)

なほ右戦果の内譯を記せば、

第二篇 西南太平洋撃滅戰

四月五日

◎コロンボ方面

敵機撃墜六〇機（附近洋上に於ける飛行艇撃墜とも）  
敵艦十六隻撃破（約八萬噸）

格納庫三棟 修理工場一棟其他軍事施設大破、炎上

◎コロンボ沖（南方三百數十哩）

甲巡ドーセツトシャ、コンウォール撃沈

四月六日

◎ベンガル灣

英船二十一隻撃沈（十四萬噸）

同 七隻大破（約四萬噸）

◎沿岸 強襲

ビザカパダム

コカナダ

四月九日

◎ツリンコマリ方面

敵機撃墜四十一機

同 炎上 四機

英乙巡リアンダー 大破

敵船撃沈 三隻

敵飛行場施設潰滅、海軍工廠、火薬庫、其他爆破

◎セイロン島沖（東方約十哩）

空母ハーミス撃沈

驅逐艦 一隻撃沈

敵船撃沈 四隻

敵機撃墜 十五機

第五章 印度洋作戦

四月五日——九日間の潜水艦戦果

敵船撃沈 七隻

同 大破 一隻

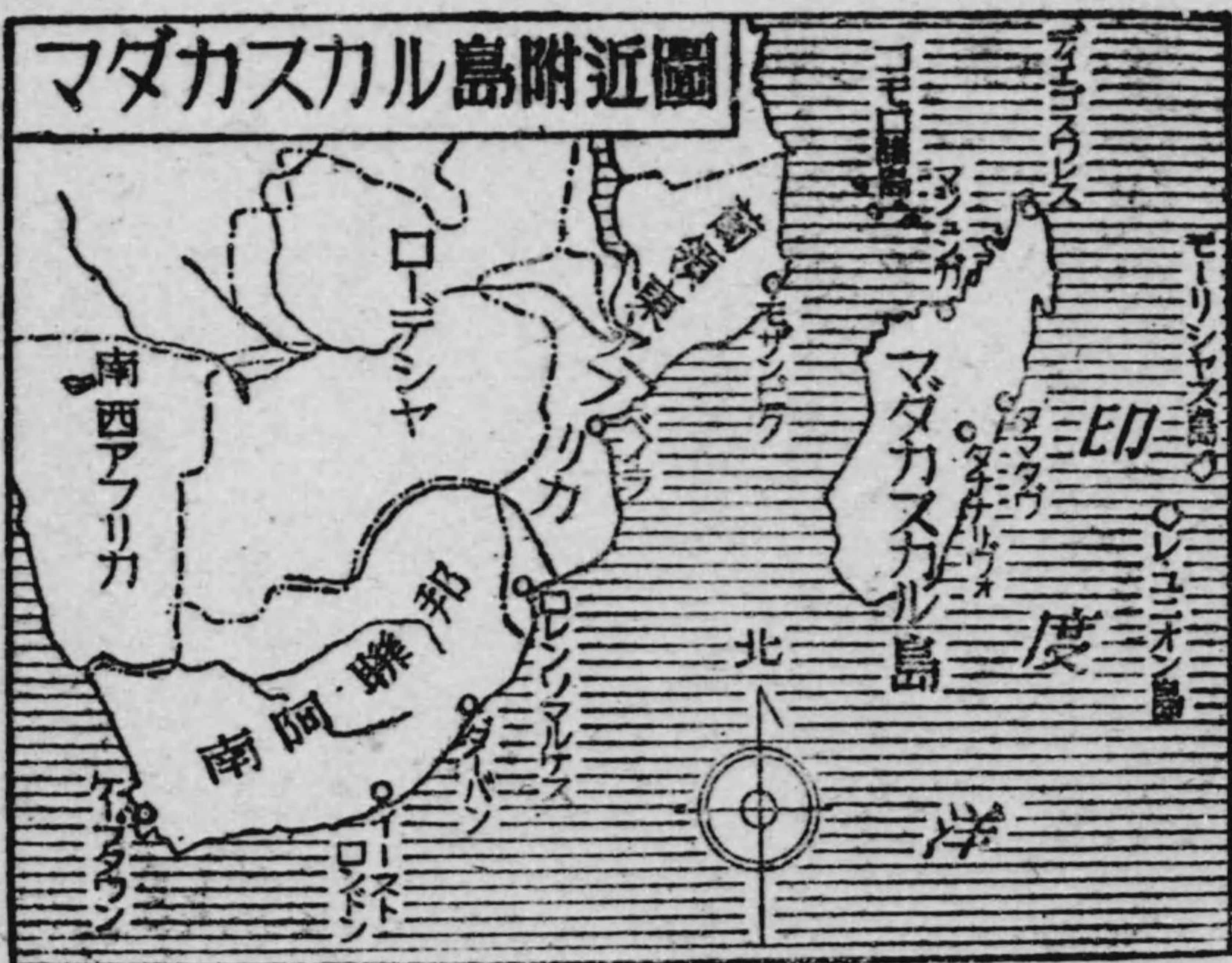
註、四月六日、九日、十日、十三日の大本營發表による。

### 二、デイエゴ・スワレス灣(奇襲第二次特別攻撃隊)

四月に於ける帝國海軍部隊のベンガル灣制壓は、新嘉坡軍港を喪失して印度洋に後退してゐた英海軍に取つてまさに痛撃であつた。

一週間の長い間、ベンガル灣一帯を強大なスコールの如く制壓し續けた帝國海軍部隊に對し、英海軍は何ら手の下しやうがなく、只管セイロン島から艦艇を逸走せしめるばかりであつた。

英海軍の落行く先はボンベイ、アデン、デイエゴ・スワレス、サイモンスタウンであつ



第五章 印度洋作戦

た。即ち英海軍は印度洋の西の果まで作戦線を後退せざるを得なくなつた。

デイエゴ・スワレス港はマダガスカル島の北端にある要港であつた。四周の山に圍まれた天然の良港は、リオデジヤネロ、プレストに次ぐ世界第三位の廣さを持ち、二萬噸の艦船を修理し得る巨大な乾ドックが設備されてゐた。同島は元來佛領だったが、英國は軍事價値に着目して此の年の五月四日不法侵略し、デイエゴ・スワレス港をセイロン島から敗

走した英海軍部隊の根據地とした。

當時英米はイラン、イラクにも派兵し、また紅海沿岸ソマリランドにも揚兵してゐたが、地中海の制海權が一九四二年に入ると共に著るしく動搖してきたので、それらの戦線に對する絶對安全な補給路として喜望峰を廻り西印度洋を経由する航路を是非とも獲得確保しなければならなかつた。

喜望峰經由の外廻り補給路はデイエゴ・スワレス港を根據地とする英海軍の保護によるのが最も有効であつた。

更に英國に取つて地中海の安全性が失はれたのちに於ては、印度に對する補給路としても喜望峰經由外廻り航路は一そう大切であつた。

五月三十一日未明我特殊潜航艇はデイエゴ・スワレス港を奇襲せんとして敵艦に迫つてゐた。

港の中には英戦艦クイン・エリザベス型、英乙巡アレスーサ型各一隻、油槽船其他の船舶が碇泊してゐた。

クイン・エリザベス型はかねて新嘉坡軍港に派遣される事を評されてゐた戦艦であつたが、東亞の風雲が切迫するや、英國は舊式の同戦艦の代りに最新鋭の不沈戦艦プリンス・オブ・ウエールズと高速戦艦レパルスを送つたが更に印度洋防衛として第二陣にクイン・エリザベス型を配してゐた。だが、我がベンガル灣強襲によつて同方面も安全ならずと知つたクイン・エリザベス型は遂にデイエゴ・スワレス港まで避退してゐたのである。

折柄満月の下、港の夜は靜かに更けてゐた。港口から三哩奥の港内燈臺は、我襲撃も知らずに光りを點滅させてゐる。

午前二時半、先づクイン・エリザベス型に火花がちつた。  
續いて英乙巡アレスーサ型の舷側からも水柱が高く立昇つた。

深夜のデイエゴ・スワレス港は我奇襲に震撼した。戦艦クイン・エリザベス型及乙巡アレスーサ型の撃破は遠くマダガスカル島迄後退した英海軍に青天の霹靂であつた。戦果の發表に關して比較的率直であつた英海軍も、我デイエゴ・スワレス港奇襲に對しては黙したまふ發表を避けたが此の二艦が沈没したのは確實である。

デイエゴ・スワレス港の奇襲は、これと殆んど同時に濠洲のシドニー港を強襲した我第二次特別攻撃隊の攻撃によるものであつた。

第二次特別攻撃隊はシドニー攻撃隊、デイエゴ・スワレス攻撃隊の二つから成り、五月卅一日それ／＼シドニー港及びデイエゴ・スワレス灣を襲撃し英艦隊を撃破した。デイエゴ・スワレス攻撃隊員の一部は其後敵陣に斬込んで壯烈な戦死を遂げた。

第二次特別攻撃隊に對しては感状が授與せられその戦死者十名は二段進級の榮譽に浴したが勇士の氏名は次の通りである。(何れも進級後の階級)

海軍中佐 秋枝三郎、中馬兼四、松尾敬宇

海軍少佐 伴 勝久

海軍大尉 岩瀬勝輔

海軍特務少尉 竹本正巳、大森 猛、芦邊 守

海軍兵曹長 高田高三、都竹正雄

右のうちデイエゴ・スワレス攻撃隊は秋枝、岩瀬、竹本、高田四勇士である。

## 第六章 ソロモン近海々戦

### 一、珊瑚海々戦

比島を喪失し、蘭印が反樞軸戦線から脱落したのち、米英陣營に取つて西南太平洋に残された唯一の城塞は濠洲大陸及びニューギニヤの一部のみとなつた。

北米とほゞ同じ面積を持つ巨大な濠洲大陸は、地形そのものが屈強な抵抗力を持つてゐる。

緒戦のわづか數日に於て比島の航空兵力を喪なつて以來、我が陸海軍部隊の疾風枯葉をまく急進撃に手の施しやうのなかつた米國は、濠洲大陸に凭つて辛うじて息をつく事が出来た。

開戦後數日にして比島の運命に見切りをつけた米亞細亞艦隊司令長官トーマス・ハート

大將が、A B C D 包圍陣盟約を無視し、蘭印を見殺しにして濠洲迄退却せん事を主張した経緯に鑑みても、開戦後數ヶ月間のアメリカは、西南太平洋の狂瀾を徒に傍觀するに過ぎないやうな状態であつた。

米國に取つて極めて意外な大東亞戦争の快速力は、開戦後半歳を経て漸やく濠洲大陸で收容されたが、この時米國は二つの對日反撃作戰を取つてゐた。

一つは布哇を中心として太平洋に出撃するもの、及び濠洲方面を足場として西南太平洋に進撃せんとするものであつた。

西南太平洋では、米國は更に二つの方法によつて抗戦を企圖した。一は航空母艦集團攻撃法によつて、反撃するものであり、他は濠洲並にその周邊防衛のため飛行機陸兵を派遣する事であつた。

なかでも西南太平洋制海權の歸趨は、同方面の戦局を左右する分岐點となつた。

西南太平洋を防衛するためには、戦力の總てが海上から濠洲方面に送られて來なければならぬ。即ち西南太平洋戦線を維持するには先づ同方面の制海權を獲得確保してゐる事

が必要であつた。

我が戦線が蘭印からニューギニヤの一端に伸びた五月迄の戦況に於ては、西南太平洋制海權は言ふ迄もなく米英の掌中に在つた。

ニューギニヤにまで伸びた我が戦略線は、いつかは米英の西南太平洋制海權に挑戦する情勢に在つた。

一方ジャワ海から敗退した米英は、西南太平洋制海權の維持には、眞劍になつて全力を傾けた。

米英が濠洲周邊の西南太平洋制海權を喪失すればアメリカの太平洋防衛線は尠くもサモア或は布哇近く迄後退する結果となり、我國に對する反撃は極めて至難とならざるを得ない。従つて西南太平洋制海權の歸趨はまた太平洋戦争の重要な段階を劃する事にもなるので、これに對するアメリカの態度もまた自づから眞劍であつた。

だが既に布哇海戦に於て太平洋艦隊主力に痛撃を受けたアメリカとしては、戦艦群の弱体化に伴つて均齊ある渡洋進航部隊の編制に困難を感じてゐたので、二、三隻の航空母艦



を中心とし、時にはこれに数隻の戦艦を配した空母集團攻撃方法で對抗せざるを得なかつた。

當時（昭和十七年五月）米空母陣營は次の六隻を中心としてゐた。

サラトガ、ヨークタウン、エンタープライズ、ホーネット、レンジャー、ワस्प。

かゝる空母陣營の中からアメリカは最大、最強力のサラトガ以下を濠洲方面に派して、最強力の機動部隊を活躍せしめた。

註、1、六隻の航空母艦は當時三方面に分れて行動してゐた。

濠洲方面

サラトガ  
ホーネット

ワस्प（珊瑚海々戦當時には未だ西南太平洋には到着せず）

布哇方面

エンタープライズ  
ヨークタウン

其 他—レンジャー

註、2、サラトガの姉妹艦レキシントン（三三、〇〇〇噸）は一月十二日夕方布哇西方洋上

でジョンストン島に向け巡洋艦驅逐艦を随伴して機動中我が潜水艦の攻撃を受け、二回に互る爆發を起して撃沈した。

レキシントン並にサラトガは英巡洋艦フッドに對抗して巡洋艦として計畫され一九二二年起工、一九二七年に竣工したがワシントン會議の結果航空母艦に改装されたもので、戦闘偵察機、爆撃機、雷撃機、各十八機、その他計八十一機を常用搭載機とし、戦時には百二十機内外を收容してゐた。

この他米英は更に濠洲方面に戦艦をも配置して空母機動部隊に協力せしめた。珊瑚海々戦で出撃し來つたノースカロライナ、テネシー型、（何れも米戦艦）ウォースパイト（英戦艦）の如く、西南太平洋制海権を維持するため米英は出來得る限りの力を傾けた。ノースカロライナは、當時世界最新鋭の戦艦であり、布哇海戦の時は、竣工間がなく大西洋方面にゐたのを西南太平洋に廻航したものであつた。

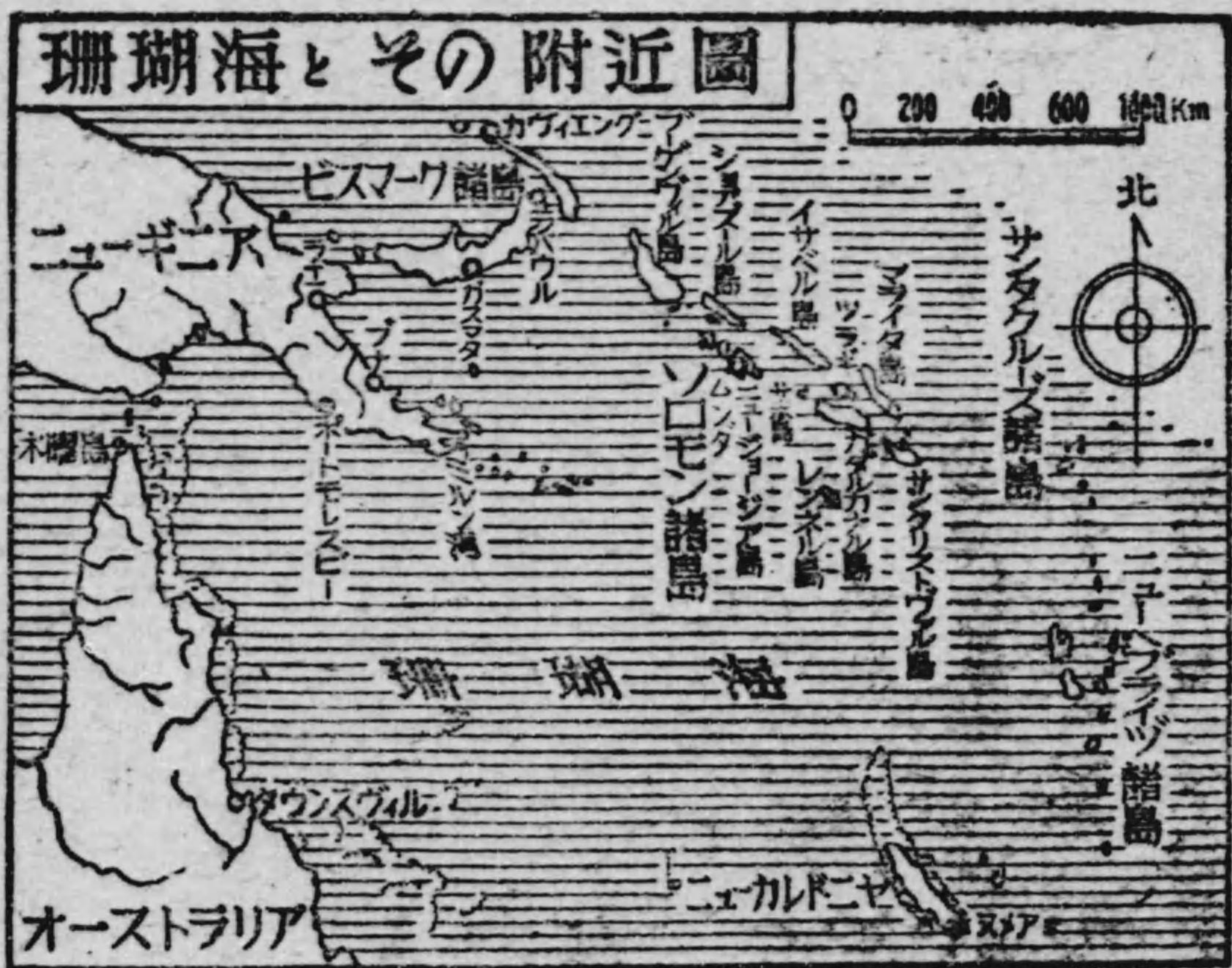
かゝる強力な艦隊を西南太平洋に出撃せしめて制海権の確保に努めると共に、アメリカ

は濠洲の戦力保存にも同時に狂奔した。

我が海軍航空部隊は濠洲北部の據點ポートモレスビーに對し三月上旬初空襲を行つて所在敵機二十六機を撃墜破すると共に港内の驅逐艦二隻、驅潜艇一隻、輸送船九隻、六千噸級特巡一隻を撃沈、陸上の全格納庫三棟、兵舎二棟その軍事施設を悉く爆破して逸早く濠洲に對して航空撃滅戦を展開してゐたが、航空戦は日を追うて熾烈となり、濠洲方面の前哨基地ポートモレスビー、ホーン島、ブルーム、ウインダム等一帯にやがて爆撃の手が及びて蘭印が降伏した三月に入るや我が航空撃滅戦は愈々白熱化するに到つた。

アメリカは比島蘭印には力が及びかねたが、濠洲方面に於て戦局を收拾せんとしてゐたので、茲に於て航空撃滅戦に堪へるため、全力を擧げて濠洲に對する航空兵力の補強を計り始めた。

米英の西南太平洋制海權確保は、航空撃滅戦に堪へ且制空權を保持する事によつて意義を見出し、制海權の積極的價値を帯びる事になるので、航空戦に對してもまた全力を注がざるを得なかつた。



第六章 ソロモン近海海戦

シドニー、ブリスベーン、タウンズビル等の濠洲の諸港を經由した航空兵力は、クツクスタウン、ホーン島、ポートモレスビー、ポートダーウィン等の前線航空基地に續々補強された。

ポートダーウィン、ポートモレスビー等に對しては殆んど連日に互つて我が航空撃滅戦が敢行されたが、所在の敵機を覆滅した翌日にはまた殆んど前日にかはらぬ航空兵力が補強されてゐる有様で、凄壯な激戦は連續し、典型的な近代消耗戦となつ

た。

我方としてもいまや同方面の戦局に對してはいさゝかの油断も許されなくなつた。

珊瑚海々戦は、このやうな情勢のもとに於て濠洲北東沖で勃發したのである。

珊瑚礁の多い水形の複雑した珊瑚海で我が航空母艦等を含んだ艦隊が、敵の空母を中心とした機動部隊及び戦艦を中心とした艦隊と遭遇したのだ。

珊瑚海々戦は米英の西南太平洋制海權に對する我が熾烈な第一矢であつた。恰も雨季にかゝつた珊瑚海には、濠氣と亂雲が連続して凄殺の氣が漲つた。

こゝに哀れをとどめたのは英國である。

濠洲は英國に取つて印度とならんだ二大寶庫の一つであつたが、ビルマには既に我が進出をみて居り、残る濠洲の頭上にもまた戦火が振かゝつた。而し大西洋と地中海を獲るために力一杯の英國としては、濠洲をまもるためにわづかに戦艦ウオースパイット及び數隻の巡洋艦を派したに過ぎず、専らアメリカに防衛を依存しなくてはならなかつたのは、大英國の凋落を物語つて哀れであつた。

二隻の航空母艦と戦艦からなる米、英西南太平洋艦隊は、濠洲方面に集結し、我が前線に反撃を試みんとして五月に入ると共に蠢動を開始した。

敵艦隊は先にジャワ近海で編成された米、英、蘭西南太平洋聯合艦隊に比して著るしく強大なものであり、空母を中心としたものと戦艦を中心としたものゝ二つの部隊から編成されてゐた。

一つは米、英、濠の聯合艦隊で、米海軍からは戦艦テネシー型、甲巡ボートランド型等、英國からは戦艦ウオースパイット、濠洲からは旗艦キャンベラ（巡洋艦）をはじめとした濠洲艦隊の聯合勢力で、他は空母團攻撃部隊即ちサラトガ、特設航空母艦を中心とし、米新鋭戦艦ノースカロライナ十機をはじめ巡洋艦、驅逐艦を配したものであつた。

二つの部隊は、巡洋艦、驅逐艦を随伴して、別れて行動を開始してゐた。

五月に入つて間もなく、敵艦隊は我が誘ひに乗つて珊瑚海を北上し行動を開始したが我方は敵艦隊の蠢動を逸早く察知し殲滅の機のを待受けた。

基地航空部隊は嚴重な警戒網をはり、一方水上部隊もまた航空母艦を含めて秘かに出撃

してゐた。

六日は快晴に恵まれた。だが彼我の距離が未だ開き過ぎてゐたため六日は索敵だけで終り、決戦は翌七日に持越された。

七日には未明から基地航空部隊の爲攻撃部隊は任務に應じてそれごとく全力を舉げて出撃した。折柄基地にはスコールの來襲が劇しく、驟雨は翼に亂舞したが、敵艦隊接近の報に航空部隊勇士は勇躍基地を發進した。

午前七時四十分パニート島南東一六五哩の海上を二十節の速力で一路西進中の敵艦隊が先づ發見された。

三隻の驅逐艦を前衛とし、續いて戦艦テネシー型、同ウォースパイト、そのあとに巡洋艦キヤンベラ、ポートルランド型の巡洋艦、最後にまた驅逐艦が加はつてゐた。

同九時頃、敵聯合艦隊はパニート島南百五哩の海上にまで進出した。

愈々戦機は熟した。珊瑚海上には凄殺の氣が濃く雲塊の多い此の空からは、時々一陣の風が荒んで海面の波頭は白く飛沫を散らしてゐた。

午前九時頃敵艦隊は一旦南方に向け轉針しつゝあつたが、我が航空部隊は、遂にパニート島南島海面で敵艦隊を中心とした艦隊に遭遇した。

攻撃隊はテネシー型目がけて先づ攻撃を開始した。

全速力で避退する敵艦の背後からは、眞白に泡立つ數條の航跡が、珊瑚海の目にしみるやうに蒼い海上にくつきりと白線を残し、射ちあげる高角砲は、忽ち空に眞黒な彈雲をつくつた。

必殺の氣に充ちてゐる我が攻撃隊の雷撃は猛烈を極めた。テネシー型は艦腹から重油を噴き出し、數十米の水柱をたてながら轟沈された。時に午前十二時四十分であつた。

米甲巡ポートルランド型もまたその後我爆撃隊の攻撃で數發の直撃弾を受けテネシー型のあとを追つて南溟に潰え、英戦艦ウォースパイトは損傷を受けてあはてゝ遁走した。

午後一時半過ぎ、既にわが航空部隊は歸還の途にあつた。此の海戦で基地航空部隊から四機の自爆機を出した。

一方航空母艦を含んだ我が水上部隊も刻々と敵艦隊に近づきつゝあつたが、やがて約五

十機からなる敵の雷撃機隊が大舉來襲した。

我が直衛戦闘機隊は敵編隊を迎へ撃つた。

戦闘機隊の必殺弾をうけて早くも傷ついた敵機の中には、三、四千米の高度から魚雷をはふり出して、身軽になつて遁走をはかるものもあつた。而し敵の攻撃も勇敢であつた。

最優秀な航空母艦の乗組員に選ばれるだけあつて、捨身になつて我が方に肉迫した。

左から、右から我航空母艦には魚雷が迫つた。それを全速力で左右に回避してゐたが遂に胴腹に魚雷が命中し、やがて艦尾近くに當つた魚雷のため、航空母艦は沈没した。

この航空母艦は油槽船を改装した小型のものであつた。

航空母艦乗組員は戦火のはげしい海上に九時間漂流した。水が澄み鱈が迫つた事もあつたが、海上の漂流者は愛國行進曲などを唄ひながら元氣に泳ぎつゞけた。

漂流者の中には重傷者もあつたので、元氣な者達は不自由な海中でありながら、材木の端や樽、救命具などを集めて急造筏を造り、負傷者を乗せていたはつた。

漂流しながらも美はしい戦友愛が海中に花を咲かせてゐた。

敵航空母艦に對し、止めの刃をつけたのは翌八日であつた。

曉と共に、我が索敵機は早くも索敵に出動した。そして我が水上部隊の前方約二百三十哩の海上に空母集團攻撃部隊を発見した。

敵部隊はサラトガ、特設航空母艦の二空母、戦艦ノースカロライナを中心として大巡、

驅逐艦を直衛として西方に向けて機動中であつた。

敵のその時の進路を伸ばせば、ニューギニヤの東端にぶつかるやうな位置である。

風速七米、海上には濃霧があつて、空からの視界は餘り良好ではなかつた。

魚雷を持つた基地航空部隊攻撃隊は既に珊瑚海上空に出動してゐたが、濃霧のために敵部隊を捜しあぐんでゐた。その時、上空でわが索敵機の一機に邂逅した。

索敵機は基地に引歸すところであつた。

既に敵部隊に觸接を保ちながら燃料一杯まで行動してゐたが、やがて基地へ引歸す燃料を餘すばかりとなつたので、翼をかへして一路基地への途次であつた。

はからずも大空で我が海鷲がばつたり遭遇した時、索敵機の機長であつた飛行兵曹長は、攻撃隊が敵部隊を捜しあぐんでゐる事を察知した。

索敵機は、翼をバンクさせてぐるりと反轉し、攻撃機隊の先頭に立つて、今來た方向へ逆に引返した。翼を左右にバンクしながら、道案内を引受けた事を攻撃隊に知らせた索敵機はその時既に戦死を覺悟してゐた。

果敢な索敵機は、やがて敵部隊を發見するや、敵艦を墓所に求めて壯烈な體當りで散華してゐる。

サラトガ、特設空母の上空には、敵直衛戦闘機隊が亂舞してゐたがそこへ攻撃隊が猛鷲の如く突入した。サラトガ、特設空母は、左右に一杯舵をとりながら懸命に遁走を企てた。着艦せんとしたグラマン戦闘機などは、あふりをくつて艦橋に激突した。敵の二空母は、次々と必殺の魚雷を受けて忽ち傾斜し、また多數の直撃弾をうけて遂に甲板から濛々たる火焰をあげた。

それへ海面低く敵艦に迫つて止めの魚雷を浴せる我が攻撃隊の中には、背後から敵の機

銃弾の被弾を受けたものさへあつた。

大傾斜を起した二空母は速力がとまつたと同時に相前後して沈没した。時に九時四十分『航空部隊の第一撃は見事なり』

と〇〇司令長官は、此の時の我が海鷲の猛攻撃をたゞへてゐる。

やがてノースカロライナもまた左右に魚雷をあげた。胴腹の穴からは重油が噴き出したが、必死になつて應急處置を施しながら、沈没だけは免れて逃走した。

珊瑚海々戦は水上艦艇、艦隊航空兵力、基地航空部隊、潜水艦とあらゆる海軍兵力を傾注して闘はれた海戦であつた。敵もまた米英協同のもとに新鋭戦艦、航空母艦並びに多數の補助部隊を繰出したため、はからずも同戦は大東亞戦最初の大規模な海上遭遇戦となつた。

開戦以來、アメリカは一、二隻の航空母艦を中心とする空母攻撃部隊を我守備地域或は第一線の一角にゲリラ戰的に驅使してゐたが、開戦後半戦にしてはじめて空母、戦艦等の海上主力を海上決戦に本格的に使用しはじめた。

マックアーサーが比島を脱出して濠洲に落延びた経緯、トーマス・ハート大將が大東亞戦争勃發後濠洲迄アメリカ戦線を後退せしめんと主張したこと、更に濠洲戦線は我方から約三千哩の遠距離にあり併も珊瑚海に戦火が波及した時には既に開戦後半歳の歳月が経過した事などから濠洲周邊の西南太平洋に於ける海戦は當然アメリカの大規模な抵抗を豫想された。

アメリカはノースカロライナ型新鋭戦艦空母サラトガをはじめ特設空母、甲巡其他數十隻の艦艇を濠洲東北方海上に集結せしめた。またイギリスもアメリカで修理終つた戦艦ウオースパイトなどを濠洲海軍補強のために派遣した。濠洲近海で合體した米英艦隊はニミツ米太平洋艦隊司令長官の指揮するところとなつた。

珊瑚海に出撃した米英艦隊の成果は、特にアメリカに取つては重要であつた。

開戦後半歳に互つて東亞の戦局に何ら有效な補強の措置を得なかつたアメリカは、それらの戦線に全力を傾き得なかつた非難を濠洲東北邊の西南太平洋に於て挽回する必要があつた。サラトガ、ノースカロライナ型、ウオースパイトなどの強力な空母、戦艦は決戦の

他にかゝる米英の思想的興望を擔つてゐた。

『個々の戦ひに負けても、最後の戦ひに勝てば勝利は掴み得る』といふネルソンの言葉を再び此の頃米英が持出さしたのはこれがためであつた。

珊瑚海々戦ではアメリカ海軍は眞髓を發揮し、敵乍ら天晴れの奮戦をした。我油槽船改造の小型空母が沈没した最後の時などは、米機で體當りした果敢なものがあつた。

だが敵の奮戦と優勢な力にも拘はらず、海戦の結果米英艦隊は大敗北を喫した。

珊瑚海々戦の結果は米、英、濠、新西蘭に大打撃を與へた。

航空兵力が強大になつた近代海戦は航空母艦による決戦が海戦の根幹とならんとする趨勢を生みつゝあるが、空母を中心とした米、英艦隊はまた我が機動部隊の威力に屈せざるを得なかつた。

アメリカでは既に布哇海戦、馬來沖海戦以來空母の重要性に着眼してその建造に優先的に力を注ぎ、ストック案及びその後の海軍擴張案によつて建造せんとしてゐた戦艦の一部を航空母艦建造に變更、一九四二年度に於て急遽二十隻の空母を建造する事になつたが、

珊瑚海々戦はかゝる傾向を一層刺激する事となつた。そして其の後の數次に互るソロモン海戦にみる如く、アメリカの空母は續々海戦に参加し、近代海戦の特質である凄壯な空母決戦が展開するに到つた。

アメリカは海戦と共に逸早く宣傳戦を開始をしてゐた。マックアーサー司令部もこれに呼應して日本の巡洋艦、驅逐艦等を撃沈したと尾續をつけたので、米英陣營の中にはマカツサル海戦以來の勝利であると喜ぶものさへあつた。

自らマカツサル海戦の幽霊海戦にあやからんとするなど、まさに米英デマ宣傳の悲劇に他ならない。

アメリカはデマ宣傳によつて珊瑚海の敗戦を隠蔽せんとあせつたが、米英陣營の中には深刻な氣分が溢れた。濠洲では五月八日の議會に於てカーチン首相が、珊瑚海々戦は今迄日本と米英海軍との間に戦かはれた最大の海戦であつて、海戦の規模、衝突した彼我勢力は極めて大きいから、海戦の結果如何では、濠洲の運命が決すると説明すると、議場では萬歳の喚聲のかはりに、沈痛な沈黙と、議員の眼に涙さへさしたほどであつたと報ぜられ

てゐる。

勝利を謳歌してみても、濠洲の運命がこれで救はれたのだとは誰も信じてゐなかつたのである

ニュージールランド首相フレージャーも、今こそ聯合國が樞軸國に對して攻勢に轉すべき機會であると米政府に皮肉な積極攻勢を鞭達する事を忘れなかつた。

この海戦に於て、最も打撃を受けたのはアメリカであつた。海戦の勝利を報じながら、自國の損害に就いて、殊に航空母艦陣營の痛撃に就いては、何ら觸れる事をしなかつた。

珊瑚海々戦に於ける綜合戦果は次の如くである。

敵側の損害

撃沈

戦艦カリフォルニア型一隻

航空母艦

サラトガ

特設航空母艦



米甲巡 ボートランド型一隻  
撃破 英戦艦ウオースパイト(大破)

米戦艦ノースカロライナ型(中破)

乙巡ルイスビル(大損害)

二萬噸給油船(大損害)

敵機撃墜 九十八機

我方の損害

沈没 小型航空母艦一隻(給油船を改造せるもの)

飛行機未歸還 二十四機

註、五月八日、九日、十二日、二十六日及び十一月十六日の大本營發表による。

二、シドニー港強襲

西南太平洋に蠢動する米英艦隊の濠洲に於ける基地の一はシドニー軍港であつた。

シドニー港は濠洲最大であり、且つ米濠連絡路の終點であつて、戦火が濠洲周邊に波及した後に於ては濠洲の心臓とも稱すべき重要な軍事價値を帯びるに到つた。

ジャクソン港は約六哩の狭長な水道を走らせてシドニーの諸港灣施設はその奥に設けられてゐる。

珊瑚海々戦後の五月下旬、敵艦はシドニー港の奥深くに碇泊してゐた。ドックの施設を持つ同港だけに修理のため入港してゐたものゝ如くである。

五月卅一日夜我特殊潜航艇はジャクソン港深く突入して敵艦を狙つた。シドニーでは恰も晩秋の頃である。月齢十五日の月光は幸にも厚い雲に遮ぎられた。

我が特殊潜航艇は完全に奇襲に成功した。

シドニー市は煌々とした電燈の下に、くつきり姿を呈してゐたのである。狭い所ではわづかに幅一哩に迫るジャクソン水道は、淺瀬の上に防潜網、機雷をめぐらしてゐたのでシドニーの敵は我奇襲を夢にも想像しなかつた。

我特殊潜航艇は港中の敵軍艦ウオアスパイトにひし／＼と迫つた。

やがて必殺の魚雷は敵軍艦の舷側深く喰ひ込み、數十丈の水柱が忽ち天に沖した。

攻撃は完全に成功した。火焰を發した敵艦は、やがて港底に沈没し去つた。

我攻撃に夜のシドニー港は忽ち大混亂に陥つた。恰も市民が眠りについた頃であつたので、空襲と間違へた同市防衛隊は探照燈を大空に照射して機影を捜し求めた。

シドニー港を襲つた我部隊は第二次特別攻撃隊であつた。恰も此の日マダガスカル島を襲つたのと攻撃の時期を同じくし第二次特別攻撃隊のシドニー港及びデエゴ・スワレズ港奇襲は米英陣營を震撼せしめた。

だがシドニー攻撃に参加した我特殊潜航艇中三隻は遂に沈没した。

濠洲政府は後日シドニー港を強襲した我が第二次特別攻撃隊員中の中馬兼四、松尾敬宇兩大尉、大森猛一曹、都竹正雄二曹の遺骸を茶毘に附し盛大な合同慰靈祭を行つた。

シドニー防衛司令官グールド少將は我四英靈に對して『鐵の柩に乗つて攻撃した勇士』といふ讃辭を送り全濠洲にラジオによつてその忠烈を放送した。鐵の柩(特殊潜航艇)によ

る壯烈なシドニー強襲は流石に交戦國の心臓をも感銘せずには置かなかつたのである。

遺骨は日英交換船鎌倉丸に安置されてソロモンに於ける戦ひの最中の十月九日横濱港へ凱旋した。

交戦中英靈が敵國によつて盛大に葬られた上、戦ひ半ばにして故山へ凱る如き事は稀有に屬する。四勇士の壯烈な行爲は、戦線を越えてそれ程劇しく敵國の心臓を感動せしめたのであつた。なほ此の時の戦死者には他に伴、芦邊の兩勇士がある(一四六頁参照)

### 三、米國の反攻と第一次ソロモン海戦

米、英聯合國は暗澹たる氣持で一九四二年の夏を迎へた。

太平洋に於ては、東太平洋の出撃作戦が敢行されて米空陣は弱體化し、併も、有史以來はじめての米本土一角喪失といふ出來事に遭遇した上一方、濠洲に於ては我が海軍航空部

隊の航空撃滅戦が愈々激化した。

この頃歐洲に於ても獨蘇戦線に於ける獨逸の進撃は愈々急激で東部戦線の天目山スターリングラード市はまさに累卵の危機に立ち、更に獨軍はコーカサスへも雪崩れを打つて進入、更に地中海でもイギリスの制海権は動搖して、南阿、マルタ島への英國の補給は困難となり、アフリカ戦線はそれにつれて急激な變化を生み樞軸軍は埃及國境を突破して一氣にナイル河の三角洲に迄進出するなど、戦線は到るところに於て樞軸の目覚ましい攻撃が成果を収めてゐた。而もこれらの戦線は全戦争の勝敗に極めて重要な作用を及ぼす性質を持つてゐたので、樞軸軍の進撃を阻むためにも、米英は急速に局面の轉換をはからねばならぬ羽目に立つた。

米英は八月に入るや太平洋、大西兩洋に於て一齊反撃を開始した。

歐洲に於ける反撃は英軍のジエツプ上陸作戦に具現された。英國としては獨蘇戦線に直接強力な援軍を送る方法を執り得ぬので、ドーバー海峡沿岸に上陸作戦を敢行し、獨逸軍を背面から牽制せんとする第二戦線を展開せんとしたのであつた。

英國は八月十九日未明獨占領地帯の英佛海峡に臨むジエツプに對して大規模な上陸作戦を開始し、三十五隻の輸送船に分乗した英、米、カナダ、ドゴール派各軍よりなる混成一ヶ師團の大兵がジエツプ沿岸に上陸した。これに對し獨逸軍は沿岸防備隊、空軍を活躍せしめてジエツプ沿岸には大激戦が展開したが、獨逸空軍は依然として壓倒的に優勢で、同日の午後四時迄に上陸部隊は悉く大陸から敗退し、英國側の驅逐艦四隻、水雷艇三隻、輸送船五隻等が撃沈され英米の第二戦線はわづか一日にして崩壊した。

英佛海峡方面の大陸に獨逸に對する反撃の足場を造らんとする事は大陸から敗退した後英國に取つて一日も忘れる事のない念願であつた。

英國のフランス海岸上陸作戦は一九四一年十一月二十四日の第一回以來、ジエツプ上陸迄六回繰返された。英國はなんとか上陸に足場を得んとあせつたがその都度獨逸軍の鐵壁の防衛陣に阻まれて失敗した。

スターリングラード攻防戦が高潮した時獨逸は大兵力を獨蘇戦線に集中した。英國に取つては、獨逸の背後を衝くの好機を迎へたわけである。ジエツプ上陸作戦には從來に比

類のない大兵力が駆使された。上陸部隊の中には優秀な機械化部隊も含まれ、英國としては倦土重來の意氣込であつた。

太平洋に對するアメリカの反撃は英國より遙かに積極的であつた。

北はアリューシャンから南はソロモン群島まで、全太平洋戦線に對して一齊に反撃が開始された。この反撃は英國のジエツプ上陸作戦よりは約旬日早く、八月に入ると早々行はれた。

アメリカの反攻は歐洲大陸の第二戦線結成とは異なつて、極めて積極的であつたのでソロモン群島の如きは遂に日米戦線の主戦線と化するに至つた。

アメリカは先づ支那を基地とする派遣部隊によつて我本土空爆を企圖したが、それは氣配を察知した我陸軍部隊の先制攻撃によつて晝餅に歸した。

註、大東亞戰勃發後アメリカは重慶政權へ送つたその航空兵力を派遣部隊と呼稱してゐる。アメリカの派遣部隊のみが蔣政權の最大の航空勢力であつた。蔣政權の弱體化は覆ぶ

べくもない。

支那大陸から飛行機によつて我本土を空襲せんとして成らぬアメリカは太平洋から全面的に反攻を開始した。反攻路に選ばれたのはかつてのアメリカの太平洋の三つの進攻路、アリューシャン方面、中部太平洋方面、ソロモン、ニューギニア方面であつた。

併し開戦後約八ヶ月にして太平洋の日米勢力分布は相貌を一變してゐた。

先づ北方進攻路に於ては先づ鳴神島、熱田島に改名されたかつての米領キスカ、アッツによつてアメリカの進撃は阻止された。

八月八日アメリカ海軍部隊は鳴神島、熱田島に對して海上から攻撃を加へんとしたが、同方面の我海軍部隊の反撃にあひ倉皇として退却した。

中央太平洋方面では八月早々同じく海上からかつての米領ウエーキであり其後の我大島島を攻撃せんとしたがこれもまた最重なる防衛のために引下つた。續いて八月十七日ギルバート諸島の北端マキン島に來襲したが、これもまた二日間の戦闘で撃退された。

註、マキン島は大東亞戦争勃發後、海軍陸戦隊が逸早く占領してゐたが、十七日未明二隻の潜水艦に乗つた約二百名の海兵隊が同島に來襲、寡兵の陸戦隊はこれに對して克く奮戦し、右翼隊を残し全員 陛下の萬歳を奉唱、突撃して大半戦死した。敵は我方が大半戦死した事も知らず、背後にまはつたつもりで同士打ちをやつて傷つき十七日夜潜水艦に退却した。此の時六十名餘りの米兵が取残されたが、彼等は衆議一決投降を申出で投降状を住民に託したが、住民が戦火に戦いて懐中にしたまで、あつたので我が軍には届かなかつた。六十名の海兵隊員は十八日夜周章て、潜水艦に救ひを求め、それに乗つて退却した。二十日にはわが増援隊が到着し島の掃蕩が終了した。米國ではルーズベルト大統領の長男ゼームス・ルーズベルト海軍少佐が本戦闘に参加したなどと宣傳してゐるが、定かではない。一説によればゼームス・ルーズベルト少佐に箱をつけるための捏り事だとも言はれる。

たゞ南方戦線に對する反撃は他の場合と異なつてゐた。

アメリカは八月反攻の重點をこの南方の反撃に注いだ。航空母艦、巡洋艦、驅逐艦其他の艦艇並びに輸送船團からなる數十隻の米英聯合艦隊は八月七日未明ガダルカナル島方面の水域に出撃した。

アメリカの企圖はガダルカナル島方面に航空基地を獲得すると共に、こゝに大兵を揚陸せしめてやがて我占領地域を除々に奪還せんとした。

既に珊瑚海では米英聯合海軍と我海軍部隊との間に海戦が闘はれてゐた。五月上旬の珊瑚海々戦に於て西南太平洋制海權に龜裂の入つた事を知つて、米英は制海權の動搖後に起る事態に就いて憂慮せずには居れなかつた。

今にして西南太平洋を防衛しなければ、同方面の喪失は米英に取つて不可避となる。アメリカは西南太平洋の入口に我勢力を阻む鐵の門を設けんとした。ソロモン群島の南ガダルカナル島方面はかかる條件に適してゐた。

ガダルカナル島方面はまた米濠海上連絡路を確保するためにも重要であつた。

濠洲方面は既に米濠連絡線一本によつて支へられてゐる状態であつた。

濠洲方面に對する航空撃滅作戦は、既に三月以來我が海軍航空部隊の手によつて熾烈に行はれてゐたが、敵の抗戦もまた劇しかつたので、激戦は半歳餘りも続いたまゝなほ押しつ返されつゝの状態であつた。敵の反攻が強烈なのは、アメリカの支援が強力であつた事による。

かゝる状態は、比島、蘭印、或は馬來半島の場合と根本的に異なつた。それらの戦線に於ては、米英の救援を先づ斷絶せしめたり、或は救援が至難な状態に在つたが、濠洲方面は廣漠たる西南太平洋を背後に控へて、自由にアメリカの支援を得る事が出来た。

米本土、布哇、サモア、フィジー、ニュージーランド、濠洲と東南太平洋に引かれた連絡路はいまや濠洲方面の動脈となつた。

西南太平洋の敵の生命は、この一本の動脈の活躍に左右された。

敵國はこの動脈に骨を添へ、肉をかぶせんとした。それは濠洲及びニュージーランドが珊瑚海々戦のあとでアメリカに對して要求した事であり、アメリカとしても、濠洲、ニュージーランド等を傘下に束縛するためには、その要求を満たさねばならなかつた。

註、珊瑚海々戦後カーチン濠首相が議會で珊瑚海々戦の結果は濠洲の運命を左右すると言ひ、フレーザー新西蘭首相が、聯合國は今こそ樞軸國に對して攻勢に轉すべきだと言つた事を思ひ出す必要がある。

アメリカの積極支援が西南太平洋の運命をいかに左右してゐるかは今や分明である。

ガダルカナル島方面へのアメリカの揚兵は、米濠連絡路に骨と肉を添へんとした。

アメリカの反攻によつて今や西南太平洋上には新たな主戦線が結成されるに到つた。而も航空兵力を配備した島嶼が、主戦線となつた事は、必然海陸空の全面的戰場と化す運命を包藏した。

海陸空と全面的に兵力を駆使した此の反攻第一矢が成功するか否かはアメリカに取つては極めて重要な問題であつた。同時に我國としてもアメリカの反攻にそのまま屈屬するわけには行かない。かくてガダルカナル島方面の戦局は、がっちり組合つたまゝ、凄壯な長日

月に互る戦史未曾有の血戦の幕を開いた。

ガダルカナル島はソロモン群島の南の端にあつて東西約十里、南北約四十里の密林に覆はれた島であつた。

同島東南にあるフロリダ島はツラギ港を擁しソロモン群島南方の唯一の泊地であつた。アメリカはガダルカナル島方面に兵力を揚げて航空基地を獲得せんとし、航空母艦並びに輸送船團、及びこれを護衛する巡洋艦、駆逐艦等、數十隻から成る大兵力を出動せしめた。

敵の護衛艦隊の中には濠洲、ニュージールランド海軍も全力をあげて参加してゐた。

米英の大勢力がソロモン群島に接近した八月六日深更から七日未明にかけて、西南太平洋にはスコールの去來が劇しく、霧が低く海面を覆つてゐた。

七日未明三千人餘の海兵隊が上陸した。愈々ソロモン激闘の幕が開かれたのである。

ガダルカナル島方面は我作戦根據地からは相當な距離があり、且同島方面には極く少数の我海軍部隊が上陸してゐるに過ぎなかつた。

七日の朝が訪れる共に、遠い基地を發した我海軍機による反撃が先づ開始された。

敵は我反撃を警戒し戦闘機等を多數配して防衛してゐたので、我攻撃部隊との間に凄まじい空中戦が展開された。

同攻撃に参加した海軍戦闘機隊は此の一戦に目覚ましい活躍をした。我作戦基地から非常に遠距離にも拘はらず、これを突破した戦闘機隊は米グラマン戦闘機群の中に突込んで敵戦闘機は相次いで撃墜された。

この空中戦によつて我攻撃部隊は敵戦闘機四十九機、戦闘兼爆撃機九機合計五十八機を撃墜したがその大半は戦闘機の活躍によるものであつた。

長驅ガダルカナル島方面まで出撃した我戦闘機隊は米空軍の心膽を寒からしめた。アメリカは我戦闘機の飛來は豫想しなかつたやうである。

一方攻撃機隊も敵艦隊撃滅の任務を遂行せんものと魚雷を抱いて殺到してゐたが、海面低く垂れ下つてゐる暗雲に遮げられて攻撃の手をゆるめた。

基地航空部隊攻撃隊の猛攻撃はこのやうにして八日に延期された。

八日に到るや、前日來腕を撫し來つた海鷲勇士達は一艦も餘すまじとツラギ海峡に殺到した。

ツラギの泊地にあつて前日來、我が航空部隊の再度來襲を豫知してゐた數十隻の米、英聯合艦隊は、優勢を恃んで猛烈な防禦砲火を以て迎へた。

敵の強大な大艦隊が一齊に海鷲目がけて打あける高角砲は、大空を眞黒に埋めつくした。

その中を、敵の彈幕を潜つて魚雷を抱いた攻撃隊は、海面低く飛び降り、必殺の魚雷を敵艦目がけて發射した。

海鷲の攻撃は、長官旗を掲げてゐた敵の旗艦ウイチタに先づ集中した。

魚雷を胴體に受けたウイチタは數十米の水柱を高く噴きあげた。そして相次ぐ魚雷に艦内からは濛々たる火焰が舞ひのぼり、泊地をぐる／＼のた打ちまはつてゐるうちに大傾斜して遂に沈没した。これと前後して艦型未詳の甲巡が一隻、魚雷をうけたとみるや大爆發を起し、火焰を噴きあげながら海中に没し去つた。

既に敵艦は方々に於て火焰をあげ、魚雷が艦腹に命中することに水柱は天に押し、わが海鷲と敵艦隊の凄まじい死闘は展開された。而し熾烈な敵砲火のために、我が攻撃部隊の中には敵彈を受けたものも尠くなかつた。

海面低く魚雷を發射した瞬間、被彈のためガソリンを噴出するものが出た。歸還覺束無しと覺悟を定めた海鷲は、傷つける機首をそのまま眞一文字に敵輸送船の胴腹に向けた。

ガソリンを噴きながら、任務を終へた海鷲が戦場に咲かせる最高の死花である。

機體諸共撃突された敵輸送船は、忽ち大穴をあげられ、劇しく傾斜したとみるまに火焰をあげてぶす／＼燃えながら海底に沈んで行つた。これを見た他の被彈機も、同じく死の道を眞一文字に輸送船に突込んだ。二機、三機……十隻の敵輸送船は、火焰をあげながら没して行くのである。敵軍艦を葬り、更に死所を輸送船に求めて、ガソリンを漏洩しながら、或は既に火焰をあげながら、傷つける翼が眞一文字に翔ける死出の姿を眺めた時、アメリカの將兵は慄然としたと言ふ。惑はず、怖れず、我が破れた海鷲の翼が向ふ所は敵の輸送船團であつた。此の時我が傷ついた海鷲は、文字通り眞一文字に輸送船に突撃して、



一機一船、共に南溟に没し去つたのである。我が攻撃精神の凄まじさは、敵を慍伏さすのに充分であつたらう。

此の日、航空部隊があげた戦果は、

撃 沈 ウイチタ、艦型未詳英甲巡一隻

艦型未詳乙巡二隻、驅逐艦二隻、輸送船十隻

大 破 艦型未詳甲巡一隻、輸送船一隻

であつた。

八日の午後、ツラギ海峡に暗雲が低迷したまゝ何事もなく過ぎた。

たゞ此の朝我が海鷲の體當りによつて炎上した輸送船は、重油が燃え盡すまで獨り炎々として燃え續けた。所がこの焰の船がその日、敵艦隊の眞中に夜討ちをかけた我が艦隊に、屈強な篝火の役を果してくれたのであつた。

眞黒なツラギ海峡の上空へ、その夜先陣を切つて駆付けた我が艦載機が、海上の燃える篝火を數哩の彼方から先づ認めたとである。

ほの赤い明るさをたぐつて、暗黒の夜空を翔けた艦載機は、何の苦勞もなく此の朝の戦場の上空に達する事が出来たのだ。

而も附近の海上には赤や青の信號燈をつけた敵艦艇が、右往左往、波を切つて走つてゐた。

このやうに桶狭間の一戦を運命づけるやうな夜の篝火にならうとは夢にも想像しない燃える輸送船を擁して、晝間のアメリカ艦隊はなほ多勢を頼んでツラギ海峡附近を遊弋してゐた。

この時のアメリカ出撃部隊は、ソロモンの揚兵によつて多寡をくゞつた傾向が強い。我が空襲部隊は午前中に現はれただけである。艦船十六隻の喪失はアメリカに取つては傷手であるが、全體から見れば致命傷ではない。午後の平凡を、我が方を撃退したあとの靜穩とでも多寡をくゞつたのであらうか、兎も角、此の時多年獨特の猛訓練に鍛えられた腕を撫しながら、秘かに合戦の夜に備へて肅々と迫りつゝあつた我が艦隊のある事に、米英は全く迂闊であつた。

八日午前六時頃、つまり航空部隊がツラギ海峡の敵艦隊に殺到する以前に、我が艦隊がソロモン群島の遙か沖合を航行中のところを敵の偵察機によつて発見されてゐた。

偵察機はしばらく追蹊して我が艦隊の行動を偵察し、偵察機が姿を消すとやがて同九時頃再び敵のロッキードハドソン爆撃機が出現した。

ロッキードハドソン機は我が艦隊の猛烈な防禦砲火に遭ひ爆弾を海中に叩き込んで逃走した。

我が艦隊は八日の朝このやうに二回にわたる敵機の追蹊を受けてゐたのである。そしてこの時既に我が艦隊は夜討ちの作戦を決定し、八日の深更ツラギ海峡の敵陣營に殴り込む行動を開始してゐたのであつた。

夜襲の絶體條件は隱密肉迫で、豫知されることなく敵の懷中に突入する事が必要であつた。

而もツラギ夜戦の場合には、敵は味方に遙か勝つた優勢な艦隊であつた。

「一回にわたつて我に追蹊した敵機が、寡少な兵力を率けて此の夜大敵の中に突入せんと

する我作戦の意圖を、察知したとすれば、その夜の大戦果は到底望めなかつたであらう。

だが敵機は此の時の我が艦隊の行動を見て、見當違ひの想像を巡らした。

ロッキードハドソンが襲來した時、我が艦隊はツラギの方向とは凡そ見當違ひに向けて航行してゐた。

或は敵は寡少な我が艦隊を見て、強襲するどころか、その逆な作戦にでも出でたと想像したのかも知れない。それ程彼我勢力は懸絶してゐた。

多寡をくゞつた安意、輕率或は拙劣が折重なつてツラギ夜戦のアメリカの不覺になつたのであらうが、それから開始されたツラギ海峡の殴り込みは、戦史に比類ない痛快極まる海戦史の一頁を造つた。

敵艦撃沈十六隻

我が方の損害は巡洋艦二隻に輕微なる損傷、而もその一隻は僅少な被害で死傷なし。

この百パーセントの大勝利が齎らされたツラギ夜戦は、その夜、八日午後十一時四十分から僅か三十六分間の出來事であつた。

うねりはあつたが、おだやかなソロモン群島沖を我が艦隊は速力をあげて進んでゐた。既に午前にはける我が航空部隊の輝やく戦果が艦隊に傳へられてゐた。勝利の快報に先幸はよし。午後五時の日没を迎へるまで遂に敵に覺られる事もなく、いまは一路ツラギを指して、艦尾から起る白波は南海の上につ迄も白い航跡を曳いてゐた。

『帝國海軍の傳統たる夜襲に於て必勝を期し突入せんとす。

各員冷靜沈着、

事に當りて克く全力を盡すべし』

ツラギ附近の日没は早い。午後五時頃、早くも夕闇は波の谷間に揺れてゐる。その時旗艦の檣頭に掲げられた信號旗は、帝國海軍の傳統たる夜襲に於て必勝を期し突入せんとすと力強い出陣の意氣を全艦隊將兵に告げたのである。

既に敵に覺られる事なく、隱密肉迫に成功してゐた。眼前に迫る宵闇は、我が艦隊をす

つぼりかくして夜戰場に運ぶのであつた。

軍縮會議以來二十餘年、六の比率で一〇を破らんがために、敵を夜戦に誘ひ込んで、暗黒の中で決戦を挑まんと鏖骨の辛苦を重ねてきた帝國海軍であつた。

『帝國海軍の傳統たる』と敢て冠頭に輝やく雄勁な文字は、永年海軍將兵の待ち焦れたところである。

やがて天佑も加はつた。高度千五百米あたりに雲が漲りはじめ、濃い霧が海上に降りてきた。

月光は消える。星影すら無い。低い雲と厚い霧の海上は、殴り込みには絶好の情態であつた。

午後九時、敵陣上空に先行する艦載偵察機が飛立つた。

艦載機は造作なく敵艦上空に達する事が出来た。敵艦に當體りした我勇士の魂は炎々と敵艦の上に燃え續けて死してなほツラギ海峡へ我が艦載機を眞直ぐ導いてゐる。

敵艦隊は再び我が航空部隊の來襲と思つたらしく、高角砲を打上げながら、海峡の外へ

つまりサボ島の南岸沖へ静かに移動しはじめた。

敵艦隊の移動で決戦の時期は半時間餘り早まり、十時三十五分、我が艦隊は早くも敵駆逐艦の哨戒區域にさしかゝつてゐた。

この時我が艦隊の針路前方右舷に現はれた敵哨戒駆逐艦は迂闊にも我が艦隊を見逃がした。我が艦隊は左に轉針して敵を避けたが、敵駆逐艦は、またぐるり反轉して闇の中に消え去つた。

バラ／＼とスコールが海面を叩いた。艦隊は全速力をあげて、敵の懷中へ、飛沫をあげて突込んで行つた。

やがてガダルカナルの島影が右舷に現はれた。敵艦隊の陣營は愈々間近かである。巡洋艦が三隻、またも移動してくるのに出遭つたが、右舷にそらしてなほも黙々と突走つた。

十一時四十分、曳光弾がツラギ海峡の上空に投ぜられた。先行した艦載機が敵陣上空に投下したのである。

左に島影が眠り、右舷に艦群が蒼白い光の中に浮び出た時、我が艦隊は早くもその真中

へ、旗艦を先頭に急行列車のやうに轟進してゐた。

敵は大空へ注意を集中してゐて、胸許へ迫つた我が艦隊の匕首に氣が附かない。今や肉眼に鮮やかな程敵艦は間近である。

やがて敵照明弾が我方に飛んできた。

敵の狼狽振りそのまゝに、敵弾は旗艦のあとの我が二番艦の上を通り過ぎた。戦機は熟した。我が主砲は敵艦目がけて火を吐いた。だが、その命中弾が敵艦に炸裂すると殆んど同時に、敵艦の舷側から、二、三百米にも達するが水柱が突然噴き上つた。同時にけたまゝましい轟音がとどろいて、ツラギ夜戦は瞬間最高潮に達したのである。

既に我が艦隊から敵艦目がけて必殺の魚雷が發射されてゐたが、それが秘かに闇夜の海中を突進して、いま舷側に見事命中したのである。

艦尾と艦首を、両方あげたやうな恰好になつたと思ふと、眞赤な火焰をあげて、狙はれた英甲巡オーストラリア型はあつといふ間もなく轟沈した。

オーストラリアの火焰は、敵陣を明々と照した。火焰に映發する敵陣めがけて魚雷が發